

mnfikmyhk

ふと見とれてしまふ、
あゝじゃないですか

川鵜鶏肋
なぎ
春屋アロツ
Lagado
Fukapon

7
Creature Mixing

<http://www.projectkaigo.org/>

次号は11月だよ

テーマも作品も募集中

mnfikmyhk
CREATURE MIXING 7
真夜中の君

2011年6月12日 初版発行

発行所 まにふいくみやはか
<http://www.projectkaigo.org/>

印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2011 春屋アロツ, 川鵜鶏肋, Lagado, Fukapon, なぎ,
まにふいくみやはか

この本は Creative Commons「表示 2.1 日本」ライセンスに従い頒布されます。
詳細は <http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/> をご覧ください。

CONTENTS

ハニーポッターと三つの秘宝	川鵜鶏肋	02
タンジブルアセット	なぎ	62
真夜中の姫君	春屋アロツ	64
今週の御託宣	Lagado	82
夜空の見上げ方	Fukapon	83
真夜中の私		96

真夜中の君

mnfikmyhk

CREATURE MIXING 7

もう朝ですが、いかがですか

川鵜鶏肋

最後の黒いの大暴れの巻にして、珠坂シリーズのネタばらし編？です。まだまだ曖昧なところは多々残りますが、一応の公式見解は示すことが出来たかなーと。世界設定自体がバグに抵抗性を持つため、少々の構成ミスについては言い逃れが効くのですが（笑）、エラッタは頑張って潰すしかありません。残ってたらゴメンナサイ。

なぎ

自分語り、締切超過、中途半端、すべてが通常進行な私。テーマとは関係なく自分が逃げているから駄目なのです。良いテーマなのに全く筆が進まないことでそれに気付かされました。車に乗っている話が多いのは好きなのと合同誌の発刊で地方イベントに参加することが多いからということで許してください。今回も印刷を担当します。新潟では当日印刷出来るところがないのですが、無事発刊することが出来るのかしら。

春屋アロツ

前回までのお話とはまるっきり繋がりのないお話になりました。端々に少々重たい空気が流れてる気がしますが、黒服たる主人公以外もおおむね緊張感なんてありません。

<http://third.system.cx/>

Lagado

見え透いた気休めならば、要らぬ。

<http://www.k3.dion.ne.jp/~lagado/>

Fukapon

5月コミティアと連投は無理なんだってば。

<http://www.fukapon.com/>

レイアウト

お外が明るいよ。
印刷、頼んだよ。

<http://www.projectkaigo.org/>

ハニーポッターと三つの秘宝

川 鷄 鷄 肋

それは、馬鹿馬鹿しいほどの不運がもたらした失敗だった。成り行きで責任者の立場にあった建流たけりゅうには、いかにしてもそれを避ける術がなかった。

彼が問題を知り得たときには既にすべてが遅かった。

その結果、クラス全員と担任と生徒会とその他諸々の人々に多大な迷惑をかける事になった。

とことん不運な彼が、頼られたとはいえ責任ある立場になどついてはならなかったのだ。

こんな事ばかり何回繰り返せば懲りるのだろうか。

建流に出来ることと言えば、近所の行きつけの喫茶店で唯一の相談相手に愚痴をこぼすぐらいだった。

我ながらなんて未練たっぷりの、後ろ向きな態度だろうか。

身の程にあわせて目立たぬよう引っ込んでるのが相応だというのに、それすらできずにいる。

「タケルちゃんは悪くないよ」

少女は首を振った。

「誰にもタケルちゃんを責める資格なんてない。だってタケルちゃんはこの国で一番偉くなるんだから」

将来の夢。

もしも小学校の卒業文集を見せられたならば、若気の至りであったと赤面するしかない。

建流自身もとうに諦めてしまった大風呂敷。

内閣総理大臣を目指しているなど、今でも本気で信じ続けてい

るのは彼女だけだった。

「そのためなら、渚沙なみさはなんだってやるから！」

胸の前で揃えた両手をぐっと握り締め、キラキラと瞳を輝かせて宣言。

無駄に大人びた容姿に、子供っぽい態度と仕草がおそろしく不釣り合いな少女。

この元氣潑刺あまむらなびさなのは天叢渚沙あまむらなびさ。父の妹の娘、つまり従妹に当たる。

二つ年下の中二だというのに、生意気にも僕より少し背が高く、見た目は僕よりずっと大人っぽい。

建流の容姿が子供っぽいのを差し引いても、彼女の容姿が中学生らしくないのは間違いない。ただ背が高いだけでなく、脚が長くて頭が小さくすらりとしているのに、出るべきところはしっかり出っ張っている。

当人はまるで気にしてはいなかったが、入学当初はいかにも幼い新一年生の中で強烈に浮きまわっていたし、今でもどう間違っても中学生以下にはみえない。相応の化粧をすれば女子大生といっても通じるだろう。

天は何を血迷ったのか、このお天気少女にその子供っぽい精神とはアンバランスな発育を与えてしまった。

運動能力も相応に高く、学業成績でもずば抜けている。世が世なら間違いない飛び級しているだろう、いわゆる天才の部類に属する。

そんな何でも出来る完璧な女の子が、建流なんかはどうしてここまで肩入れするのだろうか。

今も無邪気な期待のプレッシャーに、胃が痛くなってきたとこ

「今夜は静馬と、デートしてください」
依頼理由は問わない。

「ご依頼、承りました」
今夜もまた、パートタイムの恋人を派遣する。

ろだ。

「なあ、サナギ」

「ん？」

にここにここ。

「ううん……なんでもない」

そんな幼稚な夢はとくに諦めてる、と宣言してしまえばどれだけ楽か。

何度それを言おうとしたことかわからないが、この瞳を目の前にするとたちまち決意が揺らいでしまう。

いや、断言する。そんな真似が出来る奴は人の皮をかぶった悪魔だ。うるうるしてるチワワでも蹴飛ばす方がよほど精神的にたやすいと思う。

反則だよな。こういうの。

ん？

ああ、言い忘れてた。どうしてサナギなのか、ね。

彼女は呉服店のお嬢さんで三人姉妹の末っ子にあたり、上から絹^{きぬ}さん、茉^{まゆ}ゆさんとくれば、表向きはともかくおじさんの真意はあきらかというわけで。冗談でサナギと呼びかけたら至極気に入られてしまい、現在に至るわけ。

笑っちゃうな。

サナギと話しているうちに、いつしか気が楽になっていた。いつもの事だ。期待は疲れるけど、彼女の元気あふれる笑顔はそれ以上の活力を与えてくれる。

不連続きの建流ではあるけど、サナギに出会えた事だけは望外の幸運だったのだろう。いつも明るく前向きな彼女がいるからこそ、理不尽な不運の連続にも絶望せずに向かっていける。

「よし、気を取り直していくかっ！」

「うん、その意気っ」

コンビニ前の歩道に、コーヒー缶を傾けつつ談笑している四人の少年達の姿があった。

奇声を上げるわけでなし。駐車場を占拠するわけでなし。缶を路上に投げ捨てるわけで無し。

いかにも今時の若者達ではあるが、見た目にも行動にも反社会的な雰囲気は微塵もない。

最年少の少年など繊細で優しい容顔であるし、身につけているものも趣味のよい高級ブランドばかりだ。

であるから、彼らがいざれ劣らぬ前科持ち（ただし未検挙）である事を想像することは相当難しいし、小柄な美少年がこの一団の頭を張っているなどと言われたなら、大抵の人間は笑い出してしまうだろう。

この一団、容姿も家柄も学校での成績も、クラシカルな不良少年達とは一線を画している。

ただお縄になったことが無いというだけで、やってきた事は一般的な少年犯罪のレベルを超えていた。

「見たか、草野のあの顔。何が何だか全然分からなかったんじゃないか？」

「スッとしたよな」

「いや、まだまだだ」

爽やかに微笑んだまま、美少年は首を振る。

「まだあいつが同じ学校に、いや、同じ街にいるっていうのが我

慢ならない」

わざと偽の情報を伝えては大勢の前で恥をかかせる。単純ではあるが、教師・学生からの信頼を失わせるには有効な方法だ。

彼らの行う悪事としては極めてレベルが低い目的だが、その手段はかなり手の込んだものだ。

複数の情報源をコントロールしつつ、草野一人にだけ修正情報が伝わらないように仕組むなど、彼らが裏にしていることを悟られないよう巧みに立ち回る。

そして、いじめられている事を当の本人にさえ気づかせぬまま、立場が悪くなるように追い込んでいくのだ。

そこまでやっても、たかだか高校生一人への嫌がらせ。かかる手間とリスクの割には、得られる利益は少ない。

だが、リーダーの少年にとっては、それほどに目障りな相手だったとも言える。

「あいつ、樋口サンと被りまくりますからね……おっとと」

リーダーの視線が危険な光を帯びたのを見てとり、失言を悟った少年の一人は口をつぐむ。

「とにかく草野は僕にとって不倶戴天の相手だ。手加減は不要だからね」

樋口と呼ばれたリーダーの美少年は、そう宣言した。

双壁、では不十分だ。彼はただ一人の王子様でなくてはならない。全校生徒の敬愛と教師の信頼は彼一人の元に集中すべきなのだ。

来年度は生徒会選挙に打って出る心算だし、すべての対抗馬を蹴散らして圧勝せねばならない。

樋口家の人間に挫折は許されない。あらゆる手段をもって勝ち

め上げた。

いつの間に両腕が水平に構えられている。その先には赤いレーザー光、そして黒服の額。

彼女の背後では輝里と風太が半ば抱き合うようにくっついていて。この状況では彼女の指示がなくとも、二人は同じ姿勢を取っただろう。

「よく聞け」

凜と声を通す。

「月の姫が地球への永住を許される、その条件は——」

彼女の声に黒服三名は一糸乱れず続ける。

「地球にて姫となることです」

「よろしい。お前らが言うには少し気が利きすぎているがな。さて、風太さん、出番ですよ」

彼女は姿勢も視線も固定したままで、背後の彼に二つ目の指示を飛ばした。

「輝里様にキスを」

§

「お疲れーっす」

夕日差し込む小さな部屋。

「おー、済まんなあ、新司。俺の仕事を代わってもらって」

今日も緩みきった会話が交わされる。

「俺は構わないっすよ。でも、風太さんはいいんすか？」

ここは風間派遣サービス。

「正直、退屈だけだなー。静馬がうるさいから」

続ける事が求められている。この街珠坂市を統べ、国を陰から動かす斗流十家の一角に食い込み、そして彼らに取って代わる事を期待されている。

わずかでもつまづく可能性がある小石は徹底的に掃除しておくべきだ。

その手段には家の力の活用も当然含まれる。金と引き替えに彼らの罪を被った者は片手の指ではきかないし、県警内部にも彼らの協力者が多数いる。

頭脳と金と権力を備えた美しい悪魔。それがこの樋口少年であった。

「なあ、樋口サン？なら、こんなのはどうか」

長身瘦躯の少年が樋口に耳打ちする。

愛らしい悪魔は、にやりと微笑み。

「なるほど。決まれば一発であいつを破壊させられる。あれには僕もいい加減苛立っていたんだ。それで行こう」

「余録はあるんでしょうね？」

恰幅のいい少年の舌なめずりを「品がないなあ」とたしなめつつも、

「まあ、期待していいよ」

と鉛をくれてやる。

鞭をふるうだけでは、他人は彼にかわって手を汚したりはしない。恐れられると同時に十分に与える。それが彼の持論だ。

「でも拙速は厳禁だ。まずは情報収集からしっかりやってよ。いつものように君が指揮を執るんだ、城山」

「御意にございます、殿下」

長身の少年が優雅に一礼すると、

雑居ビルの一室にある。

扉が開けば入ってくるのは、だいたい従業員という流行り具合。

「ふふっ、静馬にそんなこと言わないでくださいよ？ あの子、自分の性格を気にしているんですから」

「お疲れーっす、輝里さん。気にしてるって、あの堅いところっすか？」

彼女は買い物袋を机に置くと、今日もたくさんのお菓子を広げている。

「ええ。気にすることは無いと思うのですが……」

「静馬と暮らしてみても、本当にびっくりしたよ。学校にバイトもあるのに、炊事洗濯、完璧にこなすんだから」

「へえ、そりや凄いですねえ」

好みのお菓子と飲み物を各自ピックアップ、おしゃべりは続いた。

「でも、ここだけの話をしますと、たまにはその、風太さんと二人きりにして欲しいと申しましょるか……」

「ああ、そうっすよねえ。新婚さんに子どもがいちゃ迷惑——」

おしゃべりが過ぎて、来客に気付かないこともある。

「か、輝里様……。私はお邪魔でしたか……」

今日現れたのが静馬であったことは不幸中の幸いなのだろうか。

「違うの、静馬！」

「済みませんでしたっ」

——バシャン

スチールドアが閉じられたあと、新たな仕事が無い込んできた。

「風太さん、お仕事を頼んでもよろしいでしょうか」

「え、ああ、うん」

洋式便器に尻餅をつくこととなった風太に、重ねて座るように輝里を乗せる。

暗闇で、形だけで言えば背面座位。扇情的な状況だが、二人にとってはそれ以上に、混乱の続く状況だろう。

一方の静乃は彼らを個室に収めた後、入り口の番に就く。

今のところ、外は穏やかだった。彼らが追ってきている様子はない。

(どのぐらい隠れていられるかしら)

彼女がプリンと話せたように、彼らも動物と話することができる。この場の特定など造作もない。

(五分、いいえ、三分で何とかしましょう)

彼女は己の置かれた状況の厳しさを目の当たりにしながらも、行動を開始した。

「二人とも、落ち着きましたか？」

静乃が小声で話しかけると、少々の間を置いて、個室の中から返ってきた。

「息は落ち着いていたが……、何なんだ？」

「輝里様は？」

「だ、大丈夫です。その、私のせいでは……」

「これが何か、誰のせいかわからない、その話はあとにしましょう」

彼女は外を見張りながら話を続け、さらにはヒップホルスターからピストルを抜いた。

「念のために伺いますが、風太さん、輝里様とセックスなされたことは？」

「あろうがなからうが答ええない。わかってるだろう？」

「そうですね。でも、聞く必要があったのです」

「くるしゅうないよ。良きに計らって」

樋口は冗談めかすが、ここが尻尾の境目だという事はお互いに分かっている。

だからこそ、樋口は詳細を知ろうとしない。

庇うことが困難となれば容赦なく切り捨てる。それが彼らの間の無言の約束だったが、そのリスクを冒してなお、樋口は彼女にとっては忠誠を尽くすに足る気前の良いボスであった。

「じゃあ、頼んだよ」

深夜。土手の小径に三人組の姿があった。

先行する少年が歩を止める。

「おい、あれ」

街灯の下にぼつんと佇む人影。

逆光のため顔は見えないが、長い髪にスカートのシルエットは若い女性のものだ。

「やあ、わざわざ待っててくれたんですか？」

長身痩躯の少年、城山は前に進み出ると、知り合いに対するような態度で話しかけた。

「知り合いッスか？」

「いいや」

「……なるほど」

小声で質問した少年も、さすがに樋口の取り巻きだけあって頭の回転は速い。

せっかく人目につかない移動経路を使ったというのに、ここで不用意に目撃者を出しては計画は台無しだ。

輝里の声が聞こえないことに笑みを浮かべると、銃口の保護キヤップを外す。

「輝里様」

「はいっ」

「今日のデートプラン、私に一任してくださいませんか」

「え、ええっ？」

「帰らずに済む、唯一の方法です。御身を守らせてください」

「……わかりました」

サブレッサーの取り付けを終え、音もなく立ち上がる。

「お聞きの通りです。私の指示に従ってください」

「ああ、わかったよ。どうすればいいんだ？」

レーザーサイトのスイッチを入れながら、彼女は表へと踏み出した。

「輝里様と手を繋いで。できる限り身体を密着させたまま、私についてください」

満月と街灯に照らされた公園で、彼らは対峙した。

「月と連絡を取りました。マアム、おわかりいただけませんか」

「上官に口を利くとは偉くなったな」

「いえ、そのようなことは……」

輝里と風太の前に現れたのと同じ黒服三人だったが、その様相は変わり果てていた。

「お前ら、いつ降りてきたんだ？」

「……申し上げられません」

俯きがちに答えた黒服は、悲痛な表情を見せる。

凄みを失った彼らとは対照的に、静乃の行動が場を緊張へと締

まずは正体を見極め、口封じの必要性を判断する必要がある。

「ねえ、しおりさん」

タイミングをはかって退路を断つように二人に目配せする。

城山は口から出任せを続けながら、さらに距離をつめる。

と、女性は答えるでも逃げるでもなく、唐突に疑問を口にした。

「あなたたち誰？なんでここにいるの？何をしたいの？」

いささか舌足らずだが良く通る澄んだ声が、誰何する。

「いや、しおりさんだろ？俺だよ、矢部。覚えてないかなあ？ほら、花火大会の時にさ、そっちは四人で……」

辺りを包む微かな甘い香りの中、自分に注意を引きつけるべく、たたみかけるように出任せをしゃべり続ける城山。

残りの二人はそっと土手を下り、女性の左右に回り込もうとしている。

であるから、質問に答えたのは少年達の誰でもなかった。

「こま珠坂大学附属紫城学園高等部一年。城山次道。後の二人は小山志朗と菱沼勇治」

声が上がったのは城山の背後。

録音した自分の声を彷彿させる不快な声色。

振り向くと、長く延びた女性の影の先に立っていたのは、鏡の中でさんざん見覚えのある長身痩躯。

何か異常なことが起こっている。彼の意識のどこかが警戒警報を発する。

「城山の」声はなおも続ける。

『はあ？目的い？草野建流を陥れるんだよ。ヤツとヤツのイトコに薬物を盛って意識を失わせた上で好き放題危害を加え、警察を抱き込みヤツにすべての罪をなすりつける。あいつのイトコッ

て凄く美人だし、ついでに美味しい思いも出来てラッキーだよな」

城山が決して表出することのない下品な口調とそれに相応しい表情で、城山そのものにしか見えないそいつは語る。

大袈裟な身振り手振りをまじえ、城山の内心を完璧に代弁して「そう。ご苦労さま、各務」

「どういたしました」

各務と呼ばれたもう一人の城山は、先ほどの歪んだ表情はどこへやら。胸に手を当て優雅に一礼すると、そのまま影の中へと沈むように姿を消した。

随分と遅れて悪寒が走り抜ける。

いや、恐れるな。何が起きているのか冷静に考えろ。

おかしいのはどこだ？状況か？俺自身か？

そうだ、城山の内心を城山が知っていてもおかしいことはない。ならばさきほどの幻覚だ。勘違いだ。彼の心の中だけの出来事に違いない。

ならば、この女は実在するのか？

「くっ！」

城山が向けた懐中電灯の光の中に浮かび上がるのは、風に靡くストレートの艶やかな長い黒髪。

大きな瞳と赤く光る虹彩。純和風の端正な美貌。

ここらのどこの学校の制服とも異なる意匠の、襟や袖に赤のラインの入った黒いセーラー服。豊かな胸元には大きな赤のリボン。黒のミニスカートからすらりと伸びた脚もまた、同色のストッキングに覆われている。

見た目は彼らより二つ三つ上、十代後半といったところか。

半笑いの顔を期待したものの、並んでいたのは無表情。未知の領域だ。

「あのー、何かご用でしょうか……？」

「失礼ですが、そちらの女性はご友人でしょうか」

「ええ」

しゃがんだ状態の風太に、男は引き続き、ガッチリした体躯を立たせたままで問う。

「実は私どもが探している女性に似ていたものですから。よろしければ、お顔を見せていただいても——」

「お断りします」

答えたのは、風太ではなかった。

闇夜を貫いた女性の声。しかし輝里でもない。

「人違いではありませんか」

「マアム！ なぜこちらに!？」

上官と敬われた彼女は、白いセーラー服を身に纏っていた。

「言うまでもないでしょう？ プリン！」

——みゃうーっ

「うあっ」

プリンは彼女のかけ声で男たちに飛びかかり。

「静乃？」

「静馬？」

「とにかく来てっ」

邂逅に疑問符を浮かべる二人を引っ張り、走り出す。程なくして路地を折れると立ち止まり、彼女は二人の手を離して言い放つ。

「輝里様、私に負ぶさってください。風太さんもついてきて」

最近どこかで見た覚えがある。だが思い出せない。

こんな綺麗な娘、一目見れば忘れるはずがないのだが……目の前の人物は真つ当な女とは思えないし、思いたくない。

何より、違和感がある。どこかが決定的に異常だ。

「ふーん。下っ端のくせにあのひと張り合おうなんて、身の程知らずだ」

そして再び起こる怪奇現象。錯覚と笑い飛ばした彼の心をあざ笑うかのように、容赦なく現実が変質していく。

高飛車に宣言する娘の足下、影が盛り上がり彼女をエレベーターのように持ち上げていく。

数秒の後、そこには身の丈四メートルを超える巨人が出現していた。

古代の鎧を彷彿させる全体のシルエットは、古い映画の「大魔神」にどことなく似ていなくもない。

「汝らのごとき卑しき者どもが、あのお方と直接干戈をまじえようとは……笑止千万と言わざるを得ぬ」

甲虫を思わせる黒光りする石鎧で全身を覆った巨人は、仮面の奥からこもった低音を響かせた。

「さて、お兄さんたちはどんな風になるのかな？性格悪いんだし、きつと不細工だよね」

巨人の肩に腰掛けた黒衣の娘はそう言って目を細め、軽く唇を舐める。子供っぽい口調と蠱惑的な仕草がまるでかみ合っていない。

挑戦的に値踏みするような表情は決して小娘のものではなく、容姿や服装にそぐわぬ色気と凄みが宿っている。

「天の姿見を前に、相応しい姿を曝すが良からう」

彼女は二人が混乱していることを織り込んでいたのだろう。

自ら輝里を引き寄せ、背中であぐら上げ。短距離走の速度で駆け出した。

「風太さん！」

同時に彼の名を呼べば、風太はとにかく走ってついてきた。

しかし、その構図はすぐに崩れ去り、風太が遅れ始める。彼女の足が速すぎるのだ。

「おい、待ってくれ、静乃……」

「あと少し、がんばって！」

背後から聞こえる弱音を叱咤しながら、速度を緩める。再び近づいた腕を引き寄せる。

自分よりも大きな人を背負い、さらには鈍足のものを引いてなお、彼女は十分な速度へと加速した。

「ほら！あの公園までだから！」

数ブロック進んで見えてきた目的地まで、彼女は勢いを失わない。

さらに目的地の公園に入ると、左腕を振り抜いて、風太を公衆便所へと突っ込んだ。

「そこ入って！」

灯りが壊れているのだろうか、便所の中は外よりも暗い。

小さな建屋に、彼女の強い口調が響く。

「輝里様！下ろしますっ」

彼女は背中から下ろした輝里を、風太の入らんとする個室に押し込む。

「うあっ」

「抱いていてください！」

猫の言葉には彼女だけでなく、風太も驚いた。

——みゃーみゃう

「そうなんですか。ご主人様なのですね」

「ご主人様って飼い主？　どんな人なの？」

風太がつい問うと、彼女は笑顔を正対させて答えた。

「ちょっと待ってくださいね」

再び猫に向き直った彼女は、いくつかの質問を投げた。

「どんな方なんですか？」

「いつ頃？」

「その方お一人なんですか？」

もちろん問うたびに猫からは鳴き声が聞こえたが、風太にとってはどれも猫の鳴き声。謎の真相は輝里の言葉等待つほかない。

みゃーみゃーとしばらく聞かされた後に、彼女の視線がついに返ってきた。

「高校生の女の子で、『プリン』って名前は彼女に付けてもらったそうですよ」

「へえ。茶虎でプリンみたいな色だからだろうな」

「半年ぐらい前に、電車の中であつたそうです」

「こいつ、いつから電車乗ってんだ……」

——みゃお

彼の言葉に猫が反応する。

となれば答えが返ってきたのかと思つたが、輝里から伝えられた内容は違つていた。

「プリンと呼べ、だそうですよ」

ヒト同様電車に乗れる猫である、確かに敬意を払うべきかと風太は苦笑する。

「ごめんな」

謝意を示すべく彼女かの頭に手を伸ばす。風太はまだ、プリンをわかつていないらしい。

——みゃ

短い鳴き声とともに、プリンは彼を交わす。

彼は特別どうと言うこともなく「逃げられちゃった」と苦笑いしようとしたが。

——ジョーッ

思いもよらず、輝里からも冷たい視線が送られていた。

「え？　俺、何かした……？」

「風太さんの気持ちもわかりますが……。よく知らない人に身体を触られたら、嫌でしょう？」

「あ、ああ、そういうことか。ごめんな、プリン」

風太はこんなとき、輝里が本当に猫と話せるんだと実感する。彼女にとって、猫と、動物とヒトとは違う存在ではない。話せばきつとそうなんだろうなと、彼には思えた。

——みゃーう

握手を求めた手には、カラメル色の手が重ねられた。

直後。

——みゃ！

プリンは風太の腕の下をくぐり、二人の背後へと抜けた。

——みゃーおー

今までより一段低い鳴き声。

その意味は、彼にもわかつた。

彼が背後を仰ぎ見れば、黒ずくめの男が三人。

（あーあー、本気で怖そうな奴らだよ……）

先ほどの異常な出来事、そして眼前で黒い山を為す威容は、

人に恐怖をもたらすに十分であつたが、

「あらら？　逃げちゃうんだ」

気づかぬ間に後ずさつてしまっている城山を、少女が愛らしい笑顔で嘲笑する。

認めよう。先ほどの二重体^{ドブルゲン}よりも目の前の巨人よりも、彼女こそが恐ろしい。

彼女が身にまとう異常な雰囲気、毒気や瘴気とさえ言い換えてもいいそこそが、まさに城山を震え上がらせているもの。

「でも、そんな格好でどこに行こうっていうの？」

言われるままに身体を見下ろすと、いやに地面が遠い。

城山の腕はこんなに細長く毛深かつたか？　手にこんな鉤爪はあつたか？

甘い香りの中、またも異常な光景が広がっていく。

いや。

ピンと来た。おそらくは幻覚性を有する薬物を空気中に撒かれたのだ。黒髪の美少女の先ほどの言葉は、城山の脳に幻覚を誘発させ感情を操るべく巧妙に組み立てられた刺激に違いない。

目をつぶって首を振る。

……俺は冷静だ。冷静だ。冷静だ。

三回唱えて目を開き、改めて周囲を見回す。

こっそり彼女に接近していた筈の二人もいつの間にか歩を止めているばかりか、彼同様の瘦せこけた大猿のような何かよく分からないものに成り果てている。

だが、正体を看破してしまえば恐れる必要など無い。自らの変貌も、今も目の前に立ちふさがる石鎧の巨人もだ。

「お前ら、泡くってんじゃねえ！　ただの幻覚だ！」

薬物は城山の感覚を操ることは出来ても、彼の優れた判断力まで阻害することは出来なかつたようだ。

しかしこの女、何の目的でこんな真似を？

そして沸き上がるこの衝動は何だ？

どうしてこれほど人間を襲いたいのか。

いや、当然か。今この国にはびこっているのは、遠い昔に彼らを駆逐した憎き一族の末裔だ。

恨み骨髓、そこそ皆殺しにしても飽きたらぬ。

自分の心が自分のものでない衝動に埋め尽くされ飲み込まれる最後の瞬間になって、城山は少女の目に宿るものの正体を不意に悟つた。

ああ、そうか。これが、狂気ってやつか……。

“ふむ、土蜘蛛であつたか”

「うん、これはもうダメ。どこからみても悪者だね。タケルちゃんだつてきつとやつつけろって言うよ」

“爾り”

「さあさあ、八重垣に八雲立つべし群雲の下に伏したる蛇の胎内に眠れる一口を　この手にとりて諸共に　罪追い退け清むべし」

少女が朗らかに高らかに唱え、何かを招き入れるように両手を開くと、その胸を突き破って何かがせり出してきた。

だが衣服が破れることも血が噴き出すこともない。

そもそも、直径十センチ・長さ五十センチを超える物体が体内に収まっている筈がない。あたかも水面のごとく波紋を描き、彼

女の胸と同じ空間から浮かび上がってくるのだ。

巨人の巨大な腕が棒状のそれをつかみ取り、一気に引き抜く。それによって物体の全貌が露わとなる。

刃渡りにして二メートル半を超える両刃の直剣。刃には複雑な文様と無数の漢字が彫り込まれ、切っ先から柄頭まで漆黒。

人が振り回すにはあまりにも巨大に過ぎるその剣。一見して飾り物だが、人間離れした巨軀の手にあつては手に馴染む得物と化す。

少女を肩に乗せた闇色の巨人が一步を踏み出す。足の裏に肉球を備えた肉食獣のように、いや、あたかも実体のない幻であるかのように、音もなく歩を進める。

だが、先ほどまで城山であつた異形のモノたちにとっては、実体をもって目の前に立ちはだかる暴力。全力で生き残りのための闘争をはかるべき、現実の脅威以外の何物でもなかった。

「さして大きくもないこの珠坂に八人全員が生まれ育つなんて」

「違和感がある？」

「はい……」

「その一人であるあなただからこそ、わずかなりとも感じられるのかもね」

部屋の主はそう言うと、窓際に立ち、ブラインドの隙間から町並みを眺める。

「私たち凡人にとっては、既に起こってしまった事は歴史であつて、たまたまその偶然が続いた状態を後ろ向きに確認しているに

すぎないわ。選抜クラスでは周りの全員が合格者であるのが奇妙でないのと同じね。でも……」

意味ありげに苦笑する。

「アリスがわざわざ警告してきたぐらいだしね。その違和感は無視できないってこと。あなたのダンナ黒男くろおはスルトに通じる、か。確かに出来過ぎだわ」

多数の金鎖と錠前を身につけたスーツの女性が無表情に頷く。

「クロヒメの精魂を持つ者には剣にちなんだ名が与えられるのか、あるいは相応しい名を与えられる事になる者がクロヒメの精魂を宿すのか。ともかく、互いに関連する属性を備えた強力な特有能力者が八人、周辺精魂群エンバイロメントまで含めれば、二百以上の精魂群体が同時に同じ街に存在する事になる。ここまで大規模な偶然の背後には、おそらく何らかの意思に基づいた横向きトランスバースリフトの流れが発生していると考えた方が無理がない……というところまでは私にでもわかるんだけどね。その目的まではさっぱり」

肩をすくめ、お手上げ、の動作をする。

「玲韻は比較的自覚度の高い方だと思ってるんだけど、それでも全然見当もつかない？」

「残念ながら。申し訳ありません」

「いって、期待してないし」

「……」

錠前の女性は鉄面皮に若干の無然を漂わせつつ、上司のいつもの暴言を受け流す。

「ともあれ、玲韻のオトモダチが何かやらかしたら、私らでは止められないのだけは確か。おたくのお嬢さんはかなりヤバかったけど自己解決した。星の御光教の真意は不明だけど直接動いてな

まさにその通りで、延々と静馬の話が続いたのだ。

(んー、未だに何か落ち着かないなあ。まあ、いっか……)

話を聞き進めるたびに、えもいわれぬ不安に駆られた風太だったが、深追いはするものでない。

「輝里さんのお話、楽しかったですよ」

静寂の中に声を通すと、なお頼に赤みを差す彼女の手を取る。

「参りましょうか」

「はいっ」

彼女も今や慣れたもので、くっと小さく握り返した。が、すぐさま手は離される。

「あっ、猫ちゃん」

とてとてーつと輝里が駆け寄った先には、キラリと輝く瞳。

「こんばんは。初めまして」

「みゃー」

「渡来輝里と申します。あなたのお名前は？」

「みゃーみゃー」

「ぶりんさん、素敵なお名前ですね」

「みゃみゃー」

「えーっと、そうですね、お散歩です」

街灯が照らし出す、一人と一匹の会話。

そう、彼女たちは会話をしている。風太はゆっくり歩み寄ると、小さく屈んで加わった。

「こんばんは」

「みゃあー」

彼は猫の返答と思われる鳴き声を聞くと、輝里と目を合わせた。彼女は再び、猫と向き合い。

「みゃあみゃみゃー
また顔を上げ彼の方を向いて。
「風太さんのこと、一昨日見たそうですよ」
「えっ？ どこで……あつ！ 電車の中にいた猫か！」
電車に乗る猫などそうそういない。故に彼はよく覚えていた。
「みんなお前のこと見てびっくりしてたぞ。電車乗ってどこ行っ
たんだ？」
「みゃーおみゃー」

「ヒトの言葉はわからない、ですって」

「どの猫も同じなんです。輝里さんも同じヒトの言葉で話しているのに……」

「不思議です……。私は動物と話すのが当たり前でしたから」

輝里が通訳となり、二人と一匹、あるいは何匹かで会話をするのは今やデートの定番イベント。

もちろん最初は、彼女が動物と話せることを、風太は信じられなかったが。己の目で見たことは否定しようもなかった。

「みゃーあみゃみゃー」

「話せないのが当たり前だと、また言われちゃいました」

「そりやそうですよ。俺の周りでも、話せるのは輝里さんだけです」

猫の突っ込みに苦笑する輝里に、風太も突っ込むのは恒例だ。夜な夜な出くわすのは猫だけだが、他の動物たちに聞いても、同じ答えなのだろう。まさに当然と言うべきことである。

しかしこの日は、続きがあつた。

「みゃうみゃーみゃん」

「えっ？ 私以外にもいらつしやるんですか？」

反面、外したときの反応も見てみたかったなと思いながら。
「お待たせしました——」

人のいないファミレスらしく、早くも並べられた注文の品
ケーキを見て、輝里は今日も目を輝かせている。

「あ、子どもっぽいですか？」

自らを眺める視線に気付いたらしく、彼女は話し出す。

「夜中に甘いものなんて、なかなか食べられなかったから……」。

静馬、あ、メイ…… 姪っ子がね、うるさく注意するんです。『太
りますよ』って」

「姪っ子さんと仲がいいんですね」

「ええ、とっても。毎日一緒に寝ていたくらいですもの」

他愛もない会話。

風太の仕事を進める上で非常に大切なことである。他愛ないま
まを維持するためには避けた方がいい質問もあり、彼は今日もい
つも通りに対応していた。しかし、ときにその努力は報われない。
「今の一人暮らしで、たった一つ足りないものがあるとすれば、
静馬です……」

「どんな子なんですか？ 見た目とか、性格とか」

経験上、暮らし向きを話すところくなことにならないのだ。彼は
速やかに危険から遠ざかると、幸い、彼女もついてきてくれた。

「見た目は、私と違って女の子らしい背丈で、あと数年したらき
つと美人になるぞーって顔。十歳も年下なのに、私より全然綺麗
なんですから。長い黒髪をポニーテールや、ツインテールに結ん
でました。『ツインテール』って髪型は静馬に教わったんですよ」

食べかけのチーズケーキを放ったままで、彼女は熱弁をふるう。
「私もやってみたのですが、二人並ぶと、その、ちょっと……」。

静馬は素敵だつて言ってくれましたけど、全然似合っていない
でした。加えて静馬は、何でも器用にこなしちゃうんです。学業
の成績はもちろん、運動だつて得意でしたし、帰ってくれば炊事
に洗濯、裁縫と本当に何でもできちゃうんですよ」

輝里の言葉によれば、静馬という姪っ子はさぞ素晴らしい女の
子なのだろう。

想像するだけで幸せになれるそんな女の子像だったが、彼の頭の
中を席卷していたのは輝里自身の方だ。

（彼女がこんなに話したこと、あったか……？）

もちろん、静馬に対する思い入れの強さのせいでもあるろう。加
えて、彼女が風太に気を許している、その表れと見ることは彼の
自意識過剰でもなからう。

「性格だつて非の打ち所がありません。がんばり屋さんでよく気
がつく子、ちょっと口うるさいところはありましたが……。それ
だつて、私のために言ってくれるのです」

しかし本当にそれだけののだろうか。

（一人暮らしの理由が、地雷でなければいいがなあ）

根拠のない不安が首をもたげるも、彼に考える間は与えられず、
彼女の話は続いた。

「一緒に暮らししていたときには、お風呂だつて一緒でした——」

二人揃つてファミレスを出ると、通りに今日も人っ子一人見
当たらない。

全くいつも通りの闇夜に、彼女だけが特別だった。

「ごめんなさい、だいぶ遅くなっちゃいましたね。それに、私ば
かり話してしまつて……」

いのは幸いだし、副産物は丈司君達や萌衣^{もえ}っ達が片付けてくれ
たっぽい。でもそういう偶然に頼ってばかりはいられないのよね
立場上」

「別に友達というわけではありませんが……従妹さんでも無理で
すか？」

「詩紀はこの街では無敵に近いけど、あんたらと同程度かそれ以
上に不安定で危ないから。真正面から関わって下手に属性ぶつか
った日には、どんな刺激を与えるかわかったもんじゃない。最悪、
九頭竜^{くわづり}あたりが顕現しかねないわ」

「…… 揺子^{ようこ}さんのご先祖はそんな手に負えないモノを利用しよう
としたと」

「新川^{あらかわ}はもともと外様だから、十家の立ち上げには絡んでないわ
よ。まあ、外敵から身を守るためにもっと危ない敵を引き入れて
しまうなんてのは、歴史上枚挙にいとまはないわけで」

「こうなったからには互いを不可分とするだけの共生関係を築き
上げるしかない」

「そゆこと。そうやって新川家は斗流を掌握した」

揺子は不敵に笑うと、手首にスナップを効かせつつびしりと玲
韻を指さした。

「そしてそれは玲韻達とクロヒメにも言えることよ」

「理念はわかりますが、そもそも私はクロヒメというのが何なの
かもほとんど存じません」

「奇遇ね、私もよ」

「……」

「クロヒメとは八つで一組の精魂群。象徴するのは剣と黒色と緋
色の紋様。ってね、私の知識なんて玲韻と大差ないわ」

そう言ってからからと笑う、珠坂商工会議所会頭^{しちようこ}四三揺子こと、
斗流宗家代理新川さおり。

「アリスあたりはなんでもお見通しの気がするんだけど。あの女
狐だつて情報小出しにするから、こっちはいつも不完全燃焼なの
よね」

「貴女がそれを仰いますか」

「私なんて限られた知識に勿体つけてるだけよ。運命に干渉する
意思もその能力もないわ。勿論他意もね」

などと言うが、こうして玲韻に相対している揺子もまた、世の
常の鬼憑きとは一線も二線も画した存在の筈だ。

かつてさおりに呼び出された破軍の星鬼^{ほろ}揺^{ゆり}。四三揺子とい
う立場を与えられてさおりの身体を折半している彼女は、常に共
にあった彼女の影響で変質、今や限りなく人に近い意思を持つに
至っている。さおりが一人増えたようなものだ。

「まあ、面白ければそれでいいのよ」

見方を変えれば、さおりの強烈な個性は、偉大な古代の鬼神さ
え俗っぽく人間くさく汚染してしまったとも言えるが。

「だから今回は玲韻にまかせた。好きにやって」

……このヒト、ダメだ。

「なんなんだ、この状況は……」

長身に眼鏡のインテリ風の少年は、異常としか言いようのない
光景を前に呆然と立ちつくす他なかった。

「聖者様」と讃えられる名生徒会長である浅葱谷高の扇戸丈司^{あおぞとじょうじ}

は、一見してカタブツっぽい外見や態度から想像するより遙かに柔軟な思考の持ち主であるし、そうでなくては天下無敵のボケ女サクラ姫とはつきあえない。

しかし、彼でなくても目の前の光景には頭痛を覚えるだろう。「うっひょー、これはまさしくパラソク！しかし一氣に平均以下に突き落とされるあたしにとってはインヘルノだったりおーあるぜっと」

この騒がしいのは向かいのテーブルの眼鏡少女。異様な緩急で盛り上がり盛り下がりがりつつ、でかいレンズをつけた一眼デジカメとスケッチで取材(?)活動に余念がない。

彼女の言わんとすること自体は、まあわからなくもない。

例えば、丈司の隣に座るボニーテール娘佐倉明日香。

大雑把で大ボケで精神年齢は小学生並みだが、婚約者としての欲目を除いても相当容姿に優れている事は認めざるを得ない。身にまとったノーブルな雰囲気もあいまって、黙って立っているだけでもミスコンを荒らしまくるぐらいは容易いだろう。

左隣のテーブルの見覚えのある制服の二人組は浅葱谷高の後輩達。

その片割れ、蝶のバレッタを身につけた小柄な少女は三条樹菜。

タイプは全く異なるが、明日香と甲乙つけがたいレベルの容姿。親友の狩谷楼蘭の方は日本人離れた華やかな美貌の持ち主だが、樹菜は彼女さえ霞ませてしまうほどの存在感を見せてつけている。楼蘭が事あるごとにぼやくのも宜なるかなというものだ。

明日香と三条は、性格もまるで違うというのに明らかに同種の雰囲気備えている。わかりやすく「格」と言い換えてもいいだ

「はい」

「経費はお客様支払い、ですが、ご愛顧に感謝いたしまして、今日は我々が支払います」

「いえ、それは――」

「お気になさらずに。長期にわたり、多くのお仕事をいただいておりますから」

風太にとってはちょっとした思いつきだった。それは単に、新司から聞いた「半年」のせいかも知れない。また、何か他の理由からかも知れない。ただ、思いついただけだった。

彼女は少し驚いたが、やはりいつものように穏やかに対応すると、お礼とともに封筒を取り出した。

「ありがとうございます。では、本日の分はこちらに入れておりますので」

「確かにいただきました。それでは参りましょうか」

彼は立ち上がると、彼女に先に行くよう促し、後を追って事務所を出た。

エレベータを待つ二人の元に新司が駆け寄り、風太に事務所の鍵を渡す。彼は引き続き、エレベータに乗り込む二人に一礼。

仕事が少ないにもかかわらず、実にスムーズな連携なのは、実のところ静乃の訓練によるものだった。対応がきちないと流行ってないと思われるという彼女の主張には、一理あるう。

重ねられる訓練は面倒なものだが、本番で決まると気持ちがいい。

「完璧っすね。風太さん、がんばってください！」

新司はピシッと四十五度に身体を折って、閉じられたエレベータドアにもう一礼した。

ろう。

まあ、『鄙にも稀』が二流高校でたまたま双壁を為すぐらいの偶然はあってもよいだろう、とは考えていたが……

向かいのテーブルの騒がしい眼鏡娘の傍らに控える、中性的な雰囲気少女。自己主張せず気配を抑え、主君を守る黒衣の女騎士を彷彿とさせる態度だが、癖のある長い前髪の陰から見え隠れする容貌の美しさには特筆すべきものがある。

奥のテーブルではウェーブヘアに赤いチョーカーの少女が、吊り目にふてぶてしい表情を浮かべて椅子にもたれ掛かっている。丈司達より三つ四つ年下だろうか。小柄な体躯にゴシックロリータファッションが異様にはまっている。態度の悪さを別にすれば、数年後が恐ろしくなるほどのとてもない美少女っぷりだ。向かい合わせに座るニット帽の少年はずっと俯いたままで小声でぶつぶつぶやき続けているが、そちらは気にしないことにする。

その二人の傍らに腕組みして立つのは、ずばぬけた長身の華々しい美女。明日香よりさらに背が高く、男性としても大柄な丈司に迫るほど。

丈司は何度から遠目から見たことがあるのだが、女性としてはずば抜けた身長と、喪服を彷彿させる黒のスーツのあちらこちらに錠前と金鎖をぶら下げるといふ特異なファッションのインパクトで記憶に鮮やかだ。

こうも容姿に優れた女性が一所に集まっているのだから、眼鏡少女でなくても浮き足立つに十分な状況といえよう。

そこで考えたところで、ドアベルの音に思考を引き戻された丈司達が腰を据えた喫茶店に、新たな来客が到着したとみえる。

「もしもし、高天と申しますが、約束の集場所はこちらでよろ

§

事務所の最寄り駅から、乗り換え一回を含め電車に揺られること一時間弱。住宅地といった風情の駅が、彼女の指定だ。

駅を出て数分歩くと、いつも食事に利用するファミリールレストランがある。

「いつも同じファミレスで済みません」

「気になさらないでください。この時間では、ここしか開いてませんから」

見慣れたメニューには、和洋中、一通り揃っている。まさにファミレス。

「輝里さん、決まりました？」

「ええ」

風太は彼女が頷くのを確認し、手を上げると、待ってましたとウェイトレスがやってきた。

お先にどうぞ、と視線を送ると、彼女が注文を伝える。

「ホットコーヒーとチーズケーキ。二つずつ」

にこっと微笑みかける彼女に風太は苦笑しながら、ウェイトレスが下がるのを見送った。

「いつも私と同じのでしょうか？」

「ですね、覚えちゃいました？」

「はい。今日で何回目でしょうか？」

「六回目、かな？」

「正解。五回も繰り返したら、覚えてしまいます」

彼女の小さな笑みに、風太が「ありがとうございます」と感謝した。

——渡来輝里、二十八歳、女性

——二十二時〜翌二時

——待ち合わせ、当社事務所

——デートプラン、当社おまかせ

見慣れた丁寧な字で、見慣れた依頼内容が書かれている。

業務内容が内容故、記録を取っていない。よって定かではないが、半年間ぐらい続いているのではなからうか。

「今日で六回目。ちようど半年じゃないっすか」

新司は台帳に目を落とす風太に気付いたらしく、教科書を閉じて応じた。

「よく覚えてるな」

「毎回、俺のいるときですし。綺麗な人なんで覚えてるんすよ」

「黒髪の姫カット、スレンダーな体型にブラウスとロングスカート。如何にもまじめですって感じだよなあ。大学生にしちゃ好みが出ないか？」

「そうっすかね？ まあ、美人なら何でもありってことじゃないっすか」

「おいおい、静乃に聞かれたら怒られるぞ」

男二人は軽口を叩きながら、それぞれ事務所を出る準備をした。準備と言っても、新司は鞆に教科書を入れるだけ。風太に至ってはポケットに財布を入れる程度のことだった。

早くも完了、今日の夕食の話などをしてしていると、刻限となったらしい。

——ピンポン

律儀に呼び鈴を鳴らすのはお客様だけだ。彼女が来たのだろう。「はい、少々お待ちください」

しかったでしようか？」

入り口に立った少女は会釈して上品な笑みを浮かべた。ツートールを結ったこれまた相当の美少女。一見して中学生ぐらいに見えるが、大勢の年上の視線を集めながら堂々としたものだ。人目に晒されることに慣れていそうに見える。身につけているのがいかにも地味な黒のワンピースでなければ、ファッション誌のモデルと言われれば一も二もなく納得するところだ。

「待ってたわ。好きなところに座って」

「はい」

ツートールの少女が丈司達の右隣のテーブルにつくのを確認すると、錠前の女性も満足げに頷いた。

「約二名不足だけど、集められるだけは集めてみた」

芳村玲韻。丈司の姉弟子にあたる人物にしてこの集まりの発起人が、ばんばんと音を立てて掌を打ち注意を喚起する。

「まずはわざわざご足労ありがとうございますと言わせてもらうわ」

皆、なんとなく頭を下げる。態度にも言葉の端々にも、そうさせるだけの威厳というか神々しさが備わっており、有無を言わさない。騒ぐ生徒を抑えられないうちの校長あたりには少し見習って欲しいものだ。

「初めて合う者も知り合いも、集められた理由がわかってる者もそうでない者もいると思う。でも何となくは感じてるはず。この面子の共通点をね」

眼鏡娘の相方と三条嬢が頷いた。さしずめわかってる部類か。丈司はわかっていない部類だが、自分なりに整理・推理してみますは観察。

ドアのすぐそば、事務机に浅く腰掛けていた風太が、ゆつくとドアノブを押した。

「渡来輝里様、お待ちしております。どうぞ中へ」

彼が見慣れた風貌の彼女を事務所に通すと。

「渡来輝里様、いらっしやいませ。どうぞ、こちらへお掛けください」

室内では新司が応接セットへと案内した。

来客が少なからうと、配慮は忘れない。

「本日も私、風見風太が担当いたします。よろしく願いたします」

腰掛けた彼女に一礼すると、応じて彼女も立ち上がり、頭を下げた。

「よろしく願いたします」

礼儀にまつわる所作が極めて穏やかなことも、まじめという彼女の印象を作り上げている。経験の浅い風太よりも余程、板についている。

挨拶を交わし二人がソファに腰掛けると、普段はアルバイトしか飲まないコーヒーが、新司によって並べられた。

「改めまして、今夜もよろしく願いたします。サービス内容はいつも通りでよろしいでしょうか」

ここでクリップボードでも持っていればそれっぽいのだが、彼らは記録を持たない。尤も大した内容でもないのに、風太は記憶を頼りに淀みなく続けた。

「二十二時から翌二時までのデート。ご指定の駅まで電車で移動。レストランで食事をして、街を散歩する。最後は駅前交番までお送りいたします」

ぱっと見回しただけでも、視界が随分と真っ黒い。

制服の者も私服の者も含めて、女性陣の黒服率が異常に高い。そして夜闇のごとき漆黒の髪を持ち主が目立つ。

容姿が優れている者が多いことは先に述べたとおりだ。

黒服に黒髪のずばぬけた美少女あるいは美女。各テーブルに分かれたグループごとに最低一人はそうした特徴の人物を擁している。

そして我が婚約者殿もまたその例に漏れない。

見てくれだけのお気楽脳天気娘であってくれたならば良かったのだが、明日香には多分に取り扱いに注意を要するトラブル源などところがある。ならば、ここに集まった連中は多かれ少なかれ、そうした星の下に生まれた者達なのだろう。

丈司は非常に嫌な予感に襲われた。

「まずは自己紹介、と言いたところだけど、まずは先入観無しで話合ってみた方がいいと思うわ。その方が理解が進むということもあるだろうし」

最年長らしく座を仕切る芳村女史だが、何を言わんとするのか理解に苦しむところだ。

三条嬢がすっと挙手。

「あの、アルさん」

「はい、議長ちゃん」

よくわからない呼びかけに、よくわからない返し。アル、というのは普通ならアルフレッドやアルバートの略で、男性に対して用いられる愛称だ。どうして芳村女史への呼びかけに用いられたのか定かでない。

議長、の方は聞き覚えのある単語だ。かつて明日香が三条のことをそう呼んだ事がある。明日香自身、自覚しての発言ではなかったようだが。

「そこらは全員の素性をご存じなんでしょう？」

「氏名や家族構成といった個人情報を入力しているという点ではイエス。でも本性という意味では必ずしも。私が自分自身について無知であるように」

「それで私たちを集めたのね。交流を切っ掛けに見えてくるかもしれない、何かに期待して」

「半ばまではその通りよ、十九さん」

今度のはさすがの丈司も一瞬耳を疑った。

「十九」。

芳村女史は眼鏡娘の相方をそう呼んだ。

アル、議長、十九。

男性の愛称、職名に続いて今度は単なる数字だ。法則が読めない。

そういえば、かつて三条嬢が明日香を「鉄塊」などと呼んだ事があった。ここまで来ると、おおよそ人間に対する愛称の類とは思えない。

「我々クロヒメとそのバートナー達に、今まさにこの世界に差し迫っているであろう危機に対する共通の認識を形成するため、でもあるわ」

芳村女史の口から放たれたクロヒメという単語。彼女たちの容姿から推測するに、素直に「黒姫」と表記するのだろう。

なるほどと思わせるネーミングに思わずにやりとしてしまうが、気に掛かるといえばむしろ後半の方だ。

うている。

いやはや大したものだ。風太は感心しきり。

一方問い詰められている新司も、初めてのことでない。相変わらずだと半ば感心していた。

もちろん静乃にとっても初めてではなく、風太から返ってくる答えはわかっていた。

「おいおい静乃、そりや聞かないのがルール。業務外だ、お客様にもキスを超えるサービスを保証していない」

「わかってます。けど……」

小さく俯く彼女を見て、毎度のことながら彼らは思う。アルバイトとは言えこの仕事に向いていないのでは。

しかし彼女がいらない事務所も想像したくない。今日の慰め役は新司だった。

「静乃ちゃんがそう思ってるように、普通の女性は普通に身持ち堅いって。サービスタイムが余ってたから、風呂入ってのんびりしてただけ、ね？」

「ってことは、高い部屋だったのか」

「一万五千元。ラブホっすよ？　これが夜ならたった三時間っすよ？」

「女にホテルにと、恋人持ちは金かかるなあ」

新司と風太が軽い乗りで話し始めると、静乃は今日も仕方なさそうに顔を上げる。そしていつもの厳しい口調に戻っていく。

「何言ってるんですか。風太さんは数時間で数千万稼いでいたんですよ？」

「いや、まあ、静乃様、それは言わないでください……」

真っ白な肌に幾分かの赤みを差して、彼女はソファから立ち上

「世界の危機だど？」

同じく後半に反応し、チョーカー少女の向かいに座っていたニット帽の少年が顔を上げた。特記すべきほどのことはない十人並みの容姿。身長・体型も平凡そのものだが、眼光だけが違った。

鋭いというより、「据わった」目。

いやむしろ、常軌を逸している、と評するべきか。すくなくとも世の常のものではない。どこか突き抜けてしまった人々に共通の目の色。

「つまりあんたらは、魔王の胎動を正しく知覚しているというんだな」

少年は、いぶかしげな眼差しで芳村女史を見つめ返す。

「いえ、残念ながら知覚は出来ていないの。観察と推理から到達した仮説にのっとって行動しているにすぎない。だからこそ貴方の力を借りたのよ、婿殿」

「はあ何言ってるの婿殿って何なのよそれじゃまるで私がこのぱつとしない中二病とけけけ結婚!?したみたいじゃないべつに嫌ってわけじゃないけどいくらなんでも先走り過ぎっていうか所詮可能性の一つでしかないんだからそもそなんでわたしがこんなどどど動揺しなきゃならないのわるいののはダイスケが調子に乗りすぎてからそうよそうきつとそうそうにちがいない……」

「カタミちゃん」

芳村女史が鏡前の一つに手をかけた瞬間、機関銃のようにまくし立てていた吊り目チョーカー少女（カタミ……形見？）が口をつぐんだ。

「落着いて」

「……はい」

がった。

「さてと、私はそろそろ上がりますね」

時刻は間もなく二十時。

再び穏やかという名の暇が戻ってきた。

§

新司はテストが近いとかで教科書と睨めっこ。風太も新司の教科書を一冊借りて、暇潰しにめくっていた。

あれから二時間、いつも通りに電話も来客もない。しかしそろそろ予約時刻。

風太は準備をすべく、事務所の一角に設置した更衣室、いわゆる試着ブースにて着替え終わったところ。

「カッコいいじゃないっすか、その服」

「そうかー？　静乃に選んでもらったんだよ」

外出と言えはスーパーカーコンピニという彼は、服を選ぶことに興味がなかった。

しかしこの仕事において服選びは大切。と言うことでスタイリストとしても静乃は大活躍である。

「さすがっすねー、静乃ちゃん、いろいろとセンスあるなあ」

「だよなあ」

「あの潔癖症からして、結構いいところお嬢様なんすかね」

「さあ？　そーゆーことは新司が聞いてくれ」

「怖くて聞けないっすよ」

ジャケットを羽織った風太は、再び事務机に座ると、予約台帳を確認した。

「男の人って顔しか見ていないんですね」

「静乃ちゃん、そりや違うよ。胸のサイズも重要だ」

「……最低っ!」

キツく睨みを利かせ、露骨に輕蔑を表す静乃。

対して風太は、何やら感心した様子で話を続ける。

「俺は小さい方が……って、そうじゃなくてだな。何だ、今日は二人も客がいるのか?」

「社長なんだからしつかりしてください。十五時から十八時で二十四歳の女性が一人、二十二時からは輝里さんです」

驚きの問いを向けられた静乃は、相変わらず呆れ気味に答えた。対して男性二人は、相変わらぬのんきな様子だった。

「すまんすまん。客が来ないのに慣れてるからなあ」

「大した宣伝もしてませんしねえ」

「まあ、いいんだよ。道楽みたいなもんさ。ところで今日の具合は?」

「ああ、報告ですな」

静乃の深い溜息も気にせず、男性陣は会話を進めている。

ここ、風間派遣サービスではおなじみの光景だった。

「三笠陽子さん、自称二十四歳」

「見立ては?」

「んー、どうつすかねえ。俺の二つ上かってーと、そうとは思えませんでしたね」

「ま、五歳ぐらいの鯖読みだな」

「そうっすね。スーツを着慣れた感じでしたから、そう若くはないんじゃないっすか」

新司は風太と同じコーラを開けて、飲みながら続けた。

人形のように機械的にカクカクと頷くカタミ?嬢。

それはそうだろう。今のは丈司でも怖い。

芳村女史の声はあくまでも静かで、柔らかな口調で囁んで含めるようだったが……だからこそ余計に迫力を備えている。

この人、力だけならあるいは師匠より格上かもしれないな。

そして、判明した事がもう一つある。

カタミさんと呼ばれたチャョーカーの少女は、芳村女史の義理の娘、芳村睡蓮嬢に違いない。

面識はなかったが、小規模といえ人を率いる者の嗜みとして噂レベルの情報なら把握している。珠坂一のエリート校たる紫城高の新入生にして容姿端麗成績優秀性格花丸と噂に高い彼女が、まさかこんな分かりやすいツンデレとは思っても寄らなかったが。

まあ、噂と実情の解離いう点ではうちのお姫様も似たようなものか……

「俺の力?」

芳村睡蓮の相棒となれば、ニット帽の少年の氏名も芋づる式に判明する。学生の間では見た目のバランスの悪さで、大人の世界では特異な家柄の組み合わせでそれなりに知られたカップルだ。「ええ。変動を外側から観測できる婿殿のしているものは我々とは違う。だからこそ道標となりうるんじゃないかってね」

「……フレア?」

ニット帽の少年、竜胆大輔は許可を求めるように相方を見る。「なに、こんなんの話信じようっての?正気?」

睡蓮の愛らしい容姿が嘲笑に歪んだ。芳村玲韻ともあろう者がバカな真似を、と言わんばかりだ。

「そこまで見くびるものじゃないわ。カタミちゃんの相棒でしょ

「聞いてた通り、仕事はめっぽう楽でしたよ。十五時に新宿駅で待ち合わせて、ラブホまでほぼまっすぐ歩いて、入って終了」

「そうか。ま、依頼理由は俺たちの詮索することじゃないからな」

「そうっすね。約束通り経費は向こう持ちで、問題ないっす」

報告を終えると同時に、二人は空になったペットボトルをトントン置く。

「今日もいい仕事をしたなあ」とでも言いたげな新司と、「お疲れ、また頼むな」とでも言いたげな風太だった。

しかし静乃の視線に、場は静まりかえった。少ししてやっと出てきたのは風太からの事務連絡。

「えっと、静乃、歩合給を払ってやってくれ。依頼料全額いいぞ」

「全額ですか?」

視線の不満はさらに増し、もはや突き刺すようだった。

彼らが勤める、風間派遣サービス。

人材派遣業のような社名、実際に人材派遣をしていると言えなくもないが、普通の派遣業ではない。社員一名、アルバイト数名で用が足りる零細な事業内容は、ダミー恋人派遣。パートタイムで恋人役を演じる人を派遣している。

「ああ。もう一件分は静乃にやるよ」

唯一の社員、社長の態度にも出ているよう、明らかな道楽稼業。

彼はアルバイトも道楽に見合った乗りで選んだつもりだが、優秀な女子高生が紛れ込んでいたらしい。

「ただだけません。それに新司さん、仕事は三十分もあれば終わりましたよね? そのあと何をなさってたんですか?」

己の利益を突っ返すと、己の利益にもならないことを本気で問

うに。狂人の妄想が宇宙の真実を反映していないなんて誰も証明できないんだから、聞くだけ聞いて、ダメっばかったら聞き流す

ぐらいの柔軟性は持たないと」

「……や、そこまで言わんでも」

自らの相棒をおとしめるような態度をとっていた睡蓮嬢は、反射的に弁護に回る。

「ならいっぺん聞くだけ聞いてみなさいよ。間違いないく引くから信じられるものなら信じてみればいいんだわ」

と、いくぶんの不機嫌を含んだ挑発的な態度で、彼女は義理の母親へと投げやりな言葉を投げかけた。

「ん」

睡蓮の合図に頷きをかえす大輔。

「言葉が通じないのには慣れている。それでも構わないなら好きに聞けばいい」

さすが師匠の一番弟子芳村女史といったところか。娘の操縦が上手い。売り言葉に買い言葉でキーパーソンの許可を引っ張り出したわけだ。

それにしても彼氏を顎で使うとは。見た目に似合わず態度の悪い“黒姫”さんだ。

竜胆の発言の詳細を語るのは差し控え、

アクセル全開・超時空大妄想。

とだけ形容しておく事にする。

その大演説の間の竜胆の様子と来たら名指揮者か大予言者を彷彿させる壮大な調子で、ベクトルはともかく何かを極めるというのはこういう事なのだろうと、呆れるを遙かに通り越して畏敬の

念さへ感じたほどだ。

ともあれ、彼の語った内容は以下のように要約できる。

- ・魔王により異世界からの侵略が為されようとしている。
- ・魔王はこの世に干渉し、自らの顕現に都合が良いよう作り替えつつある。
- ・多くの人間はその侵略に気づいていない。

……ただこれだけの説明に20分を要したわけだ。まったく、散文的な表現は効率が悪い。

そして、これが宇宙の真実でないと証明できないのは芳村女史の言の通りであるが、真実であるとの証明もまた不可能であり、素直に納得することはそれに輪をかけて困難だ。

ぶっちゃけて言えば、普通の感性の持ち主であれば「妄想垂れ流すな！ボランティア活動でもやって何も考えずに体動かせ！」とでも叫びたくなるレベルであるが……居並ぶ皆が意外と冷静な反応なのは驚かされる。

いやこれはむしろ、どこから突っ込めばいいのかわからない、といったところか。

「はあ、大変な事になってるんですね……なんとかしてあげてくだされませんか？」

明日香の不用意な発言によって、皆の注意がこちらに集まった。

「いや待て、君は僕に何を期待しているんだ」

「会長さんにお任せしておけばハッピーエンド間違いありません。だいじょうぶ！」

と。お気楽な笑顔でハードルを上げてくる我が婚約者殿。

だが、彼女の期待を裏切ることとは許されない。

そして、集中する視線がまたプレッシャーとなる。値踏みする

夜空の見上げ方

Fukapon

窓外が夜に変わった頃。

雑居ビルの一室で、彼女は今日初めて、ドアの開く音を聞いた。

「いらっしやいませ」

「んー、いらっしやったー」

現れたのは長身の男だった。

顔を上げた彼女に、気の抜けた笑みを向けている。

「今日も精が出るねえ」

「仕事ですから。社長様はどちらへ？」

陰のある問いも気にすることなく、男は悠然と答える。

「コンビニでお買い物。新しいコーラが出たって言うからさあ」

「はあ、そうですか……」

「ほらそこガツカリしない！プリンを買ってきたぞ、しかも新作」

「ありがとうございます。でも、買い物なら私に……」

彼女は事務机の上で開いていた本を閉じると、代わりに眼鏡を取ってかけた。

「静乃は忙しいだろ。この応接セットだってピッカピカだ」

窓際に腰を据えると、レジ袋からおやつを取り出している。彼は風見風太、この事務所の社長だ。

「確かに風太さんよりは忙しいでしょうね……」

向かいに座ったのは、水野静乃。

「うちの受付は可愛いツインテ女子高生、しかも甲斐甲斐しい働

視線、興味本位の視線、同情の視線。集中する視線の多くが明日香なみの圧力を備えている。

その勢いに押されるように立ち上がらざるを得なかった。

「……浅葱谷高二年の扇戸だ。彼が語った件に関してだが、少し時間をいただきたいだろうか」

「へえ、おたくが例の聖者様」

名乗った途端、向かいのブースの大ぶりの眼鏡の少女が乗り出してきた。

「ほうほう、噂にそぐわずさすがのイケメンっぷりですな。しかもこんな綺麗なカノジョ連れとはまったく羨ましい限りで。あやかりたいものですよー」

「そいつはどうも」

辟易している様子を隠そうとしなかったはずだが、眼鏡少女はまったく怯まない。

「あ、こいつはいきなり失礼でした。自分はけちな同人作家です。これ、愚作なんですけど、お近づきの印にお納めいただけると光栄ですよ」

と、紙袋から大判の薄っぺらい冊子を取り出し、押しつけてくる。

表紙には「メガバール」のタイトルと、ひらひらな衣装を身に付け巨大な釘抜きを手にした女の子のもののすごく精緻なイラスト。最近流行の魔法少女アニメのキャラクターのようだ。

裏表紙に作者情報らしい文字と、デフォルメされた赤い竜のイラストがある。

「……スナジオヒナ、ヘンプコード……」

造詣の深くない者にとっては暗号と同じだが、明らかに聞き覚え

き者。とゆーのがこの売りだからな」

太腿の上でスカートを押さえ座る彼女は、まさに売り文句通り。この場に似合わぬ白いセーラー服が眩しい。

「それでお客様が来てくれるならいいんですけどねえ」

「ああ、忘れてた。今夜、お客様いたよね？」

「忘れてたんですか……？ おなじみ月のお姫様、輝里さんですよ」

「おお、つてことは今日が満月か。デートは今日も二十二時から二時？」

「はい。今日も待ち合わせはここです」

「おけー」

極めて短い事務連絡を終えると、風太は待つてましたとポテチ袋を全開。コーラと交互にコンソメ味を堪能している。

対して静乃も、「いただきます」と改めてお礼を言いながらプリンの蓋を開けたそのとき。

再び事務所のドアが開くと、景気のいい声が飛び込んできた。

「お疲れーっす。つて、二人しておやつの時間ですかあ。俺も混ぜてくださいよ」

「おう、新司。お前の分もあるぞー」

「ありがとうございます」

どっかと静乃の隣に腰を下ろした彼は木谷新司。

「今日の仕事はいい仕事でしたよー」

「悪いな、昼間の仕事振っちゃって」

「いやいや、あんな美人ならいつでも大歓迎」

日に焼けた顔がにやにやと蕩ける様に、二人の反応はそれぞれだった。

今週の御託宣



えのある単語。記憶が確かであれば、師匠が絶賛する同人漫画家の一人のはず。

「あ、聖者様にならって自己紹介するなら、万戸屋高一年の飛成麻緒^{まお}っす。ヒナリは飛ぶに成立の成、マオは麻に端緒の緒^{ひな}とてと

ころで」

「なるほど、それでヘンプコードか」

ある意味本名そのままだな。明日香は首を捻っているが、どうせ深く考えるほどの意味のある情報ではないので放置しておく。

「おっ、すぐ気づくなんて流石ですねえ……ええと、こっちのウルトラ美少女は幼なじみでツレでマブダチの炬絵^{かぐり}莉華^{りか}」

先ほど芳村女史に「十九」と呼ばれた黒髪の娘、いかにも黒姫っぽいのが控えめな愛想笑いとともに無言で会釈した。

頭を下げる間も全く目をそらさない。四人がけのテーブルだと、うのに麻緒の対面ではなくすぐ隣の通路側に陣取っているところといい、すぐに飛び出せるように浅く腰掛けているところといい、麻緒が言うような親友というより、むしろ護衛騎士やボディガードを想像させる態度だ。

「こんなのと二人セットってバランス悪いと思いませんか？ずるいっすよねえ。完全に引き立て役じゃん。それに引き替え聖者様は美男美女カップルでウラヤマシス！」

「飛成嬢もそう捨てたものではないだろう、とだけ言わせてもらおう」

「あー、おかまいなく。自分の見た目は自分が一番分かっているんで、お世辞ならノーサンキューっすよ」

実際のところ十分水準以上だと思われるが、彼女なりのコンプ

レックスがあるのだろう。

いかにも人類の範疇外の見映えを備えた連中と張り合おうなどと、考える方がそもそも無茶な気がするのだが。あるいは同性ゆえだろうか。いずれにせよ丈司にはよく分からない感覚だ。

「……どうしてヘンプコードなのかしら」
しきりに唸っていると思ったら、まだ考えていたのか婚約者殿は。

「麻ヒモの意味だ。『緒』はヒモに通じるだろう」

「『おー！』」

一斉に声が上がった。最後にやってきた高天嬢などは、目を丸くして手を打ち合わせ、何度も頷いて感心を表現している。

「??」

直接説明してやった筈の相手だけがまだ分かっていない。

「麻ヒモであさお、あさお、あ・さ・お、あーさーおー……??」
いい感じに混乱してきているな。

「おいおい、伝説の王様になってしまってるぞ」

キングアーサーといえば円卓騎士団。どこぞの伝説の白馬の王子様だろう。話が逸れるにも程がある。

なんとなく引っかけかきを感じるが、嫌な予感も黙殺して話を進める事にする。

「話を戻そう。竜胆君の発言が真に正しいかどうかの判断はとらあえず保留するとして、彼を頼りに行動しようというのなら、まずは彼が観察しているものが我々の共通認識とどのように異なっているかを確認しておく必要があると思うが」

「その竜胆君、今まさになんか気になってるようよ」

三条嬢に言われて彼の方を見やる。たしかに、目を細めてある

人物の方を一心に見つめている。

「絵莉華が気になるのはわかるけどねー。あんまり見とれてるとそっちでぶんむくれてる彼女に失礼だよ」

「彼女違う！」

茶化す飛成嬢に、囁みつく睡蓮嬢。

相棒の反応も無視して、ただただ炬嬢に熱視線を注ぎ続ける竜胆。

「なあ、フレア」

「あん？」

不機嫌さを隠そうともせずたたきつけるように答える睡蓮嬢。

先ほどは芳村女史から『カタミ』と呼ばれていたはずだが、ニックネームが多い娘だ。

「そっちの席の眼鏡でない女のことだが、名前はわかるか？」

平然と尋ねる彼には、睡蓮の態度を気にした様子はない。機嫌は悪くとも返事はもらええることを確信しているようだ。

「はあ、炬さんでしょ、炬絵莉華さん。さっき飛成さんが紹介してたの聞いてなかったの？」

はたして、一言二言多いながらもきっちり返事をかえす。表向きの態度の割りに面倒見が良いとみえる。

「それはどっちの方だ、眼鏡の隣に座ってる黒いのか、向かいの金髪の方か」

「黒髪の方は紗也さんて言ってたじゃない」

「いや、俺は聞いてない」

「ったく、この若年性アルツハイマー」

睡蓮嬢の嘲るような発言を気にした様子もなく、ニット帽の少年は首をゆっくりと横に振る。

疑問符が付いた言葉は、カナメにはわからない。怒っているの？ 仕事しちゃダメなの？ 何であそこにしたの？ 許してくれるの？

わからない。カナメはそのまま階段の下まで歩いて、足を止めた。腰にしがみついたナイを引っぺがして、目を見開いたナイを正面から抱きしめた。ワンテンポ遅れて、ナイもぎゅっと腕を回してしがみついていた。

「ナイ、やっぱりその仕事はダメだ。俺がちゃんと稼いでやるから、しばらくは勉強しろ」

「カナメ、——！！！！！！」

言葉は通じていない、それでもカナメは、ナイが自分の体を押しつけるように抱きついてくる、その力をナイの想いだと解釈することにした。そのうちナイが日本語を話せるようになれば、自分の気持ちを説明してくれるかもしれない。それまで待てばいい。階上で鍵を開ける音がして、カナメはナイの体をそっと離れた。

「一言一句聞き逃すまいと十分に注意していた。それにもかかわらず、発言を聞いた事実がない」

熱に浮かされたような演説中の調子ではない。竜胆は冷静な態度を崩さず、淡々と言いきった。

「つい三分ほど前まで、そちらの飛成くんのそばにいたのは黒髪の娘が一人きりだった。俺の記憶は間違いなくそう言ってる」

それは丈司の記憶とは明らかに食い違っている。髪の色も体格もまるで異なる炬姉妹が双子であることは、つい先ほど飛成嬢に聞いたばかりだ。

認識している内容はイコール事実ではなく、感覚を元に脳が再構成したバーチャルなモデルにすぎないゆえに、個々人により認識される世界は異なっている。それぐらいの理解はある。であるから、他の多くの人々の認識とあまりにも大きくかけ離れた認識を持つ人々は、一般的には脳の働きに異常があるとみなされるわけだ。

丈司自身が身につけている気闘法は単なる技術であるが、五感を超えた＝気配＝感知を視力や聴力と同等にまで高めうるし、超能力＝としか言いようのない固有の感覚を持ち合わせる人間が稀に存在することもまた確かだ。

しかし、彼の知りうる範囲での＝特殊技術＝や＝超能力＝を常識のうちに加えたとしても、竜胆の言う内容はあまりに型破りで尋常でないものだ。むしろそれなりの病院に入院して専門家の判断を仰ぐことを勧めべきだと判断した方が無理がない。

「観察している限りでは、紗也という黒髪の娘は常に飛成くんのそばにくっついていて離れないな。先ほどそちらの眼鏡っ娘がトイレの方に向かったときにもついて行った」

に來た女たちの影がある。

そういう視線をなんとなく感じつつ、食べ物求めて通りを歩く。しかし一時間ほど前に食べたところで、今はまったく腹が減っていない。一旦帰って腹が減ってからまた出てくるか、とも思ふが、いつも腹が減ってくるのは日付が変わってからだ。ナイを寝かしつけるならあまり出たり入ったりしない方がいいだろう、と思ひ直して、また歩く。

しかし程よく落ち着いた胃袋を提げて歩いても、なかなかこれと決められない。半分散歩しているような気分になって、路地を抜けて一辻隣に行くことにした。大通りほど人がいないが、そちらにも店はそれなりにある。

路地に入ると、そこにいる女から声をかけられた。濃い化粧と薄闇を通してでも、カナメよりまいぶ年上に見える。並んで歩いてくるが、足を止めずに何度か軽く断ると、また元の場所に戻っていった。反対側の入り口でも一人立っているが、そちらは表に出てしまえばいいので、簡単にやり過ごせる。

隣の通りを歩き通しても、やはり食指が動かない。やっぱり帰るか、と、再び手近な路地に入った。

壁にもたれかかっていた背の低い人影が身じろぎした。また来るか、と思ひきや、はっと息をのむ音がただだけで、声をかけてこない。いつもならこれ幸いと素通りするところだが、ふと氣になって顔をよく見た。女はぱつと目をそらして、腕で顔を覆った。白っぽい薄手のダウンジャケットに見覚えのある短い髪。

「ナイ」

びくんと身を震わす。あまりにも早い露見に、頭が動かないのだろう。ただひたすら、カナメから目をそらし、自分の顔を見ら

「なっ、なにいつまでも失礼な妄想垂れ流してるのー紗也さん気持ち悪いでしょゴメンねこのバカがほんと。保護者として謝るわこの通り」

小さな身をテーブルの上に乗出し、ぺしぺしと竜胆を叩く睡蓮嬢。

「いえ別にそういうことは」

紗也嬢が遠慮がちに挙手した。

「麻緒に危険さえなければ、他のことには興味ないんで」

と、発言している間も視点を一所に落ち着かせず、常に辺りの状況を確認している。

落ち着いた感じの容姿とはそぐわないキョロキョロっぷりはうちの婚約者殿に通じるものがあるが、何にでも興味津々の子供じみた危なっかしさとは似て非なるもので、子連れの草食動物じみた神経質そうな態度に感じられる。

全集に向けられる視線には、あの天井の端のひび割れは大丈夫か、コンセントにはトラッキング防止が施されているか、巻いたカーテンには棒状の武器を隠せないか、とでも言わんばかりの偏執的な雰囲気さえ漂っている。大財閥の跡取りかなにかで世界中から狙われる立場にある麻緒のボディガード、とでもいった大仰さ。

体格が貧弱なので外敵に対する戦闘能力は期待できないが、危険を察知・回避するという点での目端は利きそうな印象だ。

「うん、大丈夫だよ麻緒。その人は人畜無害。何も出来ない」

「それさ、聞きようによってはものすごく失礼にも聞こえるんだけど」

麻緒は苦笑しつつ、竜胆の方を片手で拝んでみせる。

れまいとしている。

カナメも迷っていた。どうしたらいいのかわからなかった。言葉が通じれば、と思ひ、日本語で言葉をかけようとしては通じないんだと否定して、強引に連れ帰っていいのか悪いのかもわからずに、ただ立ち尽くしていた。

「あー、君さ。声かけないなら先、いい？」

ナイがはっと顔を上げ、カナメもそちらを向く。耳慣れない声は、カナメにかけられたものだった。千々に乱れる思考をすべて止められて、思わず訊き返す。立っていたのは、スーツを着た中年の見知らぬ男だった。

その男は、興味をなくしたようにカナメから視線を外し、ナイの方を向いた。その横顔を見て、ようやくさっきの言葉の意味を理解できた。ナイに視線を向ける。

ナイと目が合った。

「ナイ」

もう一度名前を呼んで、手を伸ばす。何も考えずにそうしたが、ナイには通じたらしかった。差し出した手をすり抜けて、朝のように体ごとぶつかってくる。その肩をぎゅっと抱いて、男には一言も声をかけずに歩き出す。男は舌打ちをして何やらぶつぶつと言っていたが、引き留めようとはしなかった。

二人は黙って歩いた。ナイが体に回した腕を外そうとしないのでカナメは歩きづらかったが、何も言わずに肩をしっかりと抱いて歩いた。

「カナメ、——？」

アパートの門をくぐった時、ナイは消え入りそうな声で呟いた。

睡蓮嬢がむっとしていたのは対照的に、氣にするな、と首を振る竜胆。いかにも面倒そうな彼女もただけあって、人格的には意外と完成されてるようだ。

「そうそう、絵莉華という『黒髪』の娘は、ちょうどその直前までそっちの髪飾りのちっさい娘（三条嬢か？…丈司注）と会話していたな。で、氣がついたら金髪の派手なのと黒髪の地味なの二人になってたというわけだ」

目の前で突然一人が二人に分かれた、と断言して憚らない。

「だが、その二人には邪悪の気配は皆無だし、むしろ相対する清浄さのようなものが感じられる。魔王の手のものとはとても思えない。そこで、俺自身も扇戸サン達の意見を聞きたいと思う……俺の頭が壊れていて、異世界の魔王だの勇者ダイナスだのが単なる妄想の産物ならそれでいい。だが少しでも正気の可能性があるのなら、あんたらのような、こちらの世界でそれなりの実力を持った連中の協力を得る必要があるんだ」

本当にそんな光景をしょっちゅう見ているのなら、自分の正気性を守る防衛反応として魔王うんぬんとかいう説明をひねり出してしまっても仕方ないのだろう、と同情的な感情を覚えると同時に、世界を守るためであれば自分の正気を守る必要はないと言っているのけたところには尊敬の念さえ禁じ得ない。

相当に変わった少年ではあるが、対等の友人として誇れるだけの魂の崇高さを備えているとみてよきさうだ。

ならば、ここは真摯に腹を割って答えるべきだろう。

一番胡散臭い部分は防衛反応の産物として忘れろとして、仮に彼の見た光景が正しいとしてその原因を理屈が通るように説明できるのか？

「分かった。だが早計は避けるべきだな。まずはそれぞれの意見と情報を整理しよ……」

「よく言った少年!」

遮って割り込む声。

「さすがカタミちゃんの相棒。いい目してる」

高らかに宣言したのは、これまで沈黙を守っていた炬姉妹の姉の方、絵莉華嬢だった。

「なにしろ私たちは聖なる使命を帯びた存在だから。二人一組、麻緒を守りつつ敵を排除するために生まれてきたんだよ。私は攻撃担当で、」

「私が防衛担当」

「これでギヤラはおなじ」

さすが、似てなくても双子の姉妹といったところか。あうんの呼吸だがセンスには問題があるな。

……さてはこの姉妹も同じ穴の貉か。言葉の端々に竜胆と同系の、一般的認識とのズレを含んでいる。

端的に言えば、睡蓮嬢いうところの中二病くささ、なのだが。本物の中学生にはストリートに届いてしまうようで、最後に店にやってきた女子中学生の高天嬢は、目を輝かせながら何度も何度も頷いていた。

「私も一言よろしいですか?」

丈司の視線に自分へのバトンを感じたか、一礼してから発言。

初見の人間からアイコンタクトで意図をくみ取るとは聡い少女だ。チームでのスポーツか何かで、会話以外での意思のやりとりに慣れているのだろうか。眼鏡娘とその一味、あとうちの婚約者殿にも見習って欲しい。日本人ならちゃんと空気を読むように。

アヤは思わず叫んでカズの前に立ちふさがろうとしたが、いかんせん背丈が違う。

「カズ、さっさと部屋入んなさいっ!」

「は、はいっ!」

遠目ながらしっかり見てしまったのだろう、真っ赤になったカズを部屋に蹴り込んでばんとドアを閉めると、今度はナイに駆け寄った。

「あー、そーいや着替え置いとくの忘れてたな」

「つかあんた、そもそも袋に突っ込んだまんまじゃん! せめて出しなさいよ!」

「眠かったんだよ……」

「アヤ、アリガトー、カミキル」

「ど、どういたしまして……いいから中に入っ!」

さっき鏡で見たのだろう、整えられた自分の髪を嬉しそうに撫でながら言うナイに、アヤは脱力しながら、どうにか洗面所に押し戻した。

どうにかこうにか身支度を調えたナイに見送られて、カナメはいつもどおりの時間に家を出た。これまで知らなかったアヤの一面に感謝しつつ向かう。電車で揺られること二十分。人の流れに乗るようにして繁華街の方に歩いていったカナメを、何故か店の方から歩いてきた同僚が呼び止めた。

「あれ、どうしたこんなとこで」

「今日は休みだよ」

「は? なんて。定休日じゃないだろ」

「暖房がぶっ壊れて全然つかねーんだと」

「そちらの男の方のお話も、十九さんとサヤさん達のお話も、なんとなくわかります。世の中にはそういう、運命に導かれた奇跡がいっぱいあるんです」

胸に手をあててうっとりとする高天嬢。中坊らしからぬきちんとした態度とはアンバランスなまでの、典型的な夢見る少女っぷりだ。

「本来なら消えてしまう筈だった私が、ここにこうやって体を持って存在できているのもそのおかげなのですから」

……こいつもか。いや、中学生で中二病なら自然経過なのかもしれないが……

三条嬢は自分は楼蘭のための相棒と言い切って憚らないし。

うちの婚約者様はアレだし。

よくもまあこうも難儀な連中ばかり集めたものだなあと妙な感慨にふけっていると、

今度はしきりに首を捻りつつ、竜胆が話しかけてくる。

「なあ扇戸さん」

「自分で話を振っておいてそこに割り込むのもどうかと思うが」

「これも関係あるかもしれないから伝えておこう。新情報だ」

「なら聞こうか」

もともと雲をつかむような話だ。情報は少しでも多い方がいい。

竜胆は頷くと、ちらちらと高天嬢の方を見やりながら、言う。

「そっちのツイテの中学生な、頻繁に、なんというか……な、まあアレだ」

「歯切れが悪いな」

さっきから遠慮の無かった竜胆がこうも言いにくそうにするとは。

よほど他人に聞かせ難い内容なのだろうか。

呆れた様子の彼に、カナメも似たような顔になった。今の季節、夜に暖房が一切使えないのではさすがに営業できないだろう。

「一応店行っとくわ。無断欠席とか言われたらヤだしな」

「おー、そうしとけ。じゃーな」

同僚と別れて店に向かうと、確かにいつも表に出している看板に、「本日臨時休業」の張り紙がしてあった。

「店長ー」

「おう。表に出しといたけど、今日明日は休みな。帰っていいぞ」

熊みたいな体型の店長は、若干機嫌悪そうにカウンターに寄りかかっていた。

「うす。暖房つかないんスカ」

「ああ、野崎辺りに聞いたか。そうなんだよいきなりぶっ壊れやがってよ。しかも三台同時にだ」

「じゃあ次は明後日スね。失礼しまーす」

「おう」

こういう時は長居しないに限る。カナメはそそくさと店を出た。二分分とはいえ収入が減るのは少々痛い、仕方がない。アヤ辺りに笑われそうだな、と思いつつ、再び電車に乗って帰る。まっすぐ帰ろうとして、夕飯のことを思い出した。ナイの分は朝の買い物の時に買っておいたが、自分の分はどうせ職場で適当に食べるから、と何も用意しなかったのだ。別に待たせているわけでもなし、ときびすを返して、商店街の方に向かった。

職場のある駅ほどではないが、家の最寄り駅もそれなりに賑わっている。そして、こちらの方が路上で客を引く女の姿が目立つ。さすがに表通りでうろうろすることはしていないが、表通りから左右に伸びる路地や、一本隣の小道に行くと、海を越えて出稼ぎ

ことはない。

「でことで、あんたんちの鍵よこしなさい。ちゃんとそっちで寝かすから」

「おう。頼んだ」

と部屋に戻って、通帳と一緒にしまってた合い鍵を出す。実際、ここにしまい込んであってもあまり意味がないのだが、他に置いておくところがないから仕方がないのだ。

「ほい」

「ん」

鍵を手渡すと、代わりに椅子を手渡された。

「じゃね」

「おう。いろいろありがとな。助かったわ」

「どーいたしまして。あんたじゃなくてナイのためだからね」

アヤの台詞は照れ隠しなどではなく本心そのままだろうが、カナメが助かったのは事実だから特に気にしなかった。

「あ、カズ。おかえり」

振り返るや、アヤが言った。その向こうには、自分の部屋の前でこっちを見ているカズがいた。

「おう、おかえり」

「あ、えと、どうも、ただいま……」

こうやって挨拶し合うのは珍しいことでもないのに、妙に歯切れが悪い。

「ん？ どうかした？」

「いえ、別に……その、おめでとうございます」

「何が？」

今度は脈絡がなさ過ぎてよくわからない。思わずハモってしま

った。

「え、その、さっき渡してたの、鍵ですよ？ お付き合いを始めた、とか……」

「なわけないでしょっ！」

アヤがすぐに突っ込んだ。ついでに駆け寄ってごすんとチョップ。

「いって！」

「訳わかんないこと言ってるんじゃないの！ 勉強のしすぎじゃないの？」

「でも……」

「鍵はナイの世話するのに必要だからもらったの。カナメは夜い

ないから、あたしとかあんたが面倒見ないと」

ちょっと真面目な声でそう言われて、カズはようやく納得した

ようだった。

「そういえば、服とか服とか買いに行ったんですか？」

自室の鍵を開けながら訊く。

「午前中に行ってきたよ。あの子結構かわいいからいろいろ着

せがいあってさ。さっき髪も切ったし」

「ああ、やっぱり切ったんですね。あれ僕も気になってたんです」

「ちょうどさっき切り終えて、髪を洗うのに今シャワー浴びてるよ」

「カナメ！」

噂をすれば、ナイが風呂から上がったらしい。呼ばれたカナメ

だけでなく、アヤとカズもその声につられてそちらを見た。ちょ

うどがらりとドアを開けて、一糸まとわぬナイが現れたところに

「ナイ、何で服着てないの！」

「ぜひとも聞かせていただけませんか。はっきしておっしゃって

たいて結構ですから」

本人に促されてもなおためらいがちな竜胆。

「ああ……なら見たままを言うぞ。その席の状態は分単位で結構変化してる。今現在のように女の子一人の時がほとんどだが、瞬間的に誰も居なくなったり、中学生ぐらいの男子が一人だけになったり、男女二人になったり……シャム双生児ってやつか？ 二人組の体の一部がつながってる場合もある。繋がり方はその時によって違うが、詳しく知りたいか？」

さすがの竜胆も詳しく描写するのに躊躇があるようだ。

「いや、十分だ」

皆の表情もうんざりしたものになってきている。丈司が一同を代表して制止すると、我らが道標様はホッとした表情を浮かべた。相手は多感な中学生の少女（しかも既に中二病）だ。いくら何でもそんなことを聞かされては平然としてられないだろう。

これで竜胆の態度が少なくとも演技ではない事を確信できた。自分に関心を集め他人に評価されたいのなら、これでは逆効果だ。インチキ占い師やエセ霊能者よろしく、もう少し気の利いたことを言う筈だ。

しかし、大部分の人間が引きまくるなかで、

「ああ、なるほど」

当の高天嬢はけろりとしたもの。我が意を得たりとばかりに両手を打ち合わせ頷くその表情は、嬉しげにさえ見える。

「納得するのかよ……」

これまで一切話に参加しようとせず、表情には不快感を露わにしていた符谷楼蘭（お忘れかもしれないが、丈司の後輩で三条樹

菜嬢の相方だ）が言い捨てた。

見た目のケバさにそぐわぬ常識派の彼女は、先ほどのぶつとんだ展開にはさぞや困惑していたことだろう。かつて丈司や明日香ともども非常識事件のまった中であつた一人でもあるから、不可思議な話を頭から否定することはないだろうが。

「はい」

と、ツッコミに律儀に答えを返す高天嬢。

「私とヒロ君はもともと双子ですから。今はヒロ君の中に私がいる状態ですけど、それが逆だったり、中途半端にくっつく可能性もあつたんでしょね」

中にいる、を文字通りに解釈すると、それが物理的意味であれ精神的意味であれ、丈司の目の前で可愛らしく微笑んでいる人物の体は少年のものであるという事になる。

一同が口をつぐむと引き替えに、少女（？）の全身をなめ回すように視線が集中する。

「な、何ですか……そんなに見つめられると恥ずかしいんですけど」

「……確かにべたんこではあるが、高1の睡蓮も大差ないから証拠としては弱……」

「逝ってしまいなさいっ！」

睡蓮のかかと落とし（？）が一閃。竜胆の顔をテーブルにたたきつけた。

油断していた事もあって出かかりはほとんど見えていないが、フリルのついたスカートを持ち上げている事で足技と判断できた。今のはそこらへんの少女の動きじゃないな。

「そうですよ。女の子の肉体的特徴をあげつらうのは感心できま

せん」

人差し指を立て、お姉さんぶって説教を垂れる明日香。

「それはもっともだ。許して欲しい。この通り」

素直に頭を下げる竜胆。

「よろしい」

うちの婚約者殿はふにゃふにゃだが、どうも逆らいがたい雰囲気があるからな。

「あんたが言うなー、大輔も簡単に納得するな、そして誰に謝ってるかっ！」

片足を地につけぬまま鞭のようにしなる蹴り。睡蓮による見事な三連撃。斗流人払儀の技だ。型だけで言えばさおり師匠より綺麗かもしれない。十家のひとつ四三に連なるだけのことはある。

頭部への連打は一見容赦ないように見えるが、絶妙に手加減してるのは明らかだ。竜胆の方も分かっているが、絶対に受けているように見えるし、見た目の派手さの割りにダメージは少なそうだ。まあじゃれ合いの一種といったところだろう。いささか過激だが、仲の良いことでまことに結構。

「へこまないへこまない。貧乳もまたステータスだし、需要とかみ合ってれば無問題でしょ」

と眼鏡っ娘飛成嬢が独特な論法で睡蓮嬢を励ます(?)。

「ど、どうも……ほら大輔のせいで憐れまれたっ！どうしてくれるの!？」

明日香ともども、突っ込みにくいタイプの相手だ。いきおい、激しい感情はわかりやすく身内に向かう。

「しかし男の娘だったとわ。確かにちょっと骨格が違うけど骨細だからわかりにくいし……いや、一目で見抜けぬとはこの飛成麻

いかない。アヤが新聞紙を取りに戻っている間に、ナイに長袖のシャツを重ね着させた。もらったばかりのジャケットは膝掛け代わりに膝に載せることにした。

新聞紙を敷いた上にボロい丸椅子を載せて、そこにナイを座らせる。

「……寒いな」

「あんたは我慢しなさい。あたしもナイも薄着でやるんだから」

「――」

そのナイはまだ平気そうだが、寒かったとしても髪を切って迂闊に動けない状態では言いたくても伝わらないだろう。

「なるべく早く済ますから」

アヤはそう言って、はさみを構えた。思いのほか素早く、慣れた手つきで髪を切っていく。

「お前美容師の専門とか行ってたのか？」

「あたしは専門とかは行ってないけど、行ってる友だちに教わったんだよね。美容室も普通に行ってたんじゃないかな」

能ある鷹は何とやら、だ。まずは無残に切られてしまった右側を整えて、左側もそれに合わせて大胆に切っていく。何度か前に回ってうーん、と唸ってはまた戻ってはさみを入れる。それでも十五分ほどで終えた。

「よし、こんなもんでしょ。かわいいかわいい」

「おー、すげえな」

カナメも前に回って、思わず感嘆の声が漏れた。素人が急いで切ったとは思えない出来映えだ。元の状態を残してか少し左右を不揃いにしてあるが、適当にごまかしたようには見えない。

緒一生の不覚ナリ！あとで一緒に写真撮ってサインもちょうだい！」

「え、ええ」

強引だが悪印象を与えない飛成嬢の押しに、苦笑で答える高天嬢。

その自然な態度は女装男子の演技にはとても見えないし、生理的にそうは思いたくない。もしそうであれば、一瞬でも愛らしいと考えてしまった事とことん後悔してしまいたいそうだが。

「切り替わりの切っ掛けは何？水被るとかそういうやつ？」

「え、ええと……あはは」

飛成嬢あたりは別の感想を持っているようだが……。

いや、思考が脱線しているな、軌道修正しよう。

目を閉じ腕組みしてテーブルに腰掛けた芳村女史は、時に苦笑しながらも干渉はせず丈司達の会話の聞き役に徹している。

この集会の開会に際して彼女が発言した言葉を思い返す。

曰く、今まさにこの世界に差し迫っている問題に対する共通の認識を形成するため。

曰く、変動を外側から観測できる媚殿のしているものは我々とは違う。だからこそ道標となりうるはず。

……外側からの観測、か。

以前師匠が話していたシュテンバース仮説、コペンハーゲン解釈と多世界解釈と心理分析との融合とでもいうべきトンデモ理論を思い出させるキーワードだ。

なんでも師匠の同級生にして、精魂工学などというわけのわからない字問を創始したアリスという人物が唱えている珍説。

アリスはその仮説内で、集合無意識による共通の観測点が多世

それも含めて、自然だった。

「よし、じゃあ鏡見ておいで。あとついでにシャワー浴びといで。髪がちくちくするだろうから」

一気にまくしたてられて、ナイは困惑したようにカナメの方を見た。

「シャワー、行ってこい」

「シャワー」

わかった、と頷いて、ナイはてるてる坊主みたいな格好のまま立ち上がった。と、切った髪がばらばらと落ちる。

「あああ、ちよっと待ったちよっと待った！」

「ナイ、動くな。ストップストップ！」

二人がかりで慌てて止めて、体に巻いていた布をそーと外し、新聞紙の上に落ちた髪もそれ以上飛び散らないようにゆっくり歩かせる。玄関の正面にある洗面所にナイが入ってがらがらとドアを閉めたのを見届けてから、カナメは手早く新聞紙を丸めて、コンビニの袋に突っ込んだ。

「やれやれ。でもこれで、ひとまず生活できる状態にはなったかな」

「そうねー。後は……生活時間を戻さないとダメかも。そもそも夜型は体に悪いし、あんたもチャチャイも夜いなくてあたしは寝てるから、あの子一人で何にもできないじゃん」

「そうだな」

「それに……動くにしてもね」

ためらいがちに付け加えたのに、カナメも頷いた。昼間起きていて夜寝ているとなれば、ナイは元の仕事を諦めざるを得なくなる。何をするにしろ、しないにしろ、昼間動く方がいいに越した

「五時くらいに出る」

アヤはそのまま部屋に入って、ナイの枕元に座った。

「あーまだ肌きれいだなー」

そんな声が聞こえてくる。妙に優しい声だな、と思う。普段は男ばかりのこのアパートに平然と住んでいて、一緒に夜通し飲んで昼まで雑魚寝して、誰も違和感を覚えないというキャラクターなのだ。

「あ、起きたね。おはよー」

「ん、アヤ?」

「おはよう、だよナイ」

「オハヨー?」

「そう。朝はおはよう」

「全然朝じゃないけどな」

カナメが歯ブラシを口に突っ込んだまま言うと、ナイがむくりと起き上がった。カナメの方に駆け寄ってきて歯ブラシを取ろうとする。

「ナイ、おはよう」

「アー……、オハヨー、カナメ?」

「ん、よし」

アヤの意図はちゃんと伝わっていたらしい。よしよし、と思う反面、なんとなく覚えのいい九官鳥に言葉を教えている気分になる。それでも、これならそのうちチャチャイくらいにはしゃべれるようになるかもな、と気楽に思った。

「んー、どんな髪型にするかなあ」

「右が短いからそっちに合わせるしかないんじゃないの?」

「そうなんだけどさ」

界間を飛び移るように遷移する状況を仮定している。

そうした「横切る流れ」の存在は否定できない。なぜなら集合無意識につらなる精魂達自身にとっては記憶を含めた歴史そのものが替わってしまう事になるため、変化を知覚しようがないからだ。

だが、集合無意識とは異なった、一連の並行世界とは別の安定した何かへの連なりを同時に有する者がいるならば、この仮説を立証できるかもしれない。

アリスによれば、トランスバースドリフトすなわち観測点の横移動の引き金になるのは集合無意識の意思であり、つまり意思ある存在の総意が世界の歴史を選び取る事になるという。集合無意識内における発言力の高い者はより都合の良いドリフトを引き起こせる事になり、それは一般的には運の強さとして観測される。竜胆の発言のすべてを真実と仮定してそれを説明するにはこんな思考実験にさえ頼らざるを得ないのだが……竜胆が並行世界間のドリフトを観測しているというのは魅力的な仮説だ。姉妹の件も高天兄妹の件も説明できる。

なるほど、ようやく芳村女史の言葉の意味が分かってきた。姉弟子にあたる彼女がシュテンバース仮説を知らぬはずがない。最初からこれを念頭に話していたのだろう。

「かなりぶっとんだ仮説の一つに過ぎないが、こういう考え方が存在する」

考え込んでしまった丈司をおいて談笑していた少年少女達が、びたりと口をつぐむ。

この場においては彼をとりあえずの進行役として認める、その程度の信頼は得られていると考えて良さそうだ。

世間様よりはだいたい早めの夕食を摂る二人の前で、一般人の生活時間をキープしているアヤはひたすらナイの髪をじろじろと見つめていた。ナイはあからさまにじろじろ見られてさすがに少し落ち着かない様子だったが、ひとまず食べることに集中している。二人が食べ終わってちゃぶ台の上をきれいにする頃になって、ようやく「よし決めた」の一言が出た。

「ナイ、髪切るよ」

言ってから、ナイの長い方の髪を二房そっと手に取って、

「髪」

反対の手ではさみを作ってちょきちょきとやりながら、

「切る」

と言った。

「カミ、キル」

「そう。ナイの髪」

そう言って、手に取ったナイの髪を手で作ったはさみでちょんちょんと切る真似をする。ナイははっとしたが、すぐにうんうんと頷いた。

「いいみたい。じゃーやるか」

「おい、外でやれよ」

「当たり前でしょ。椅子と新聞紙」

「椅子はそれ使えばいいとして、新聞紙はない」

「ないの?」

「職場にあるから取ってねえ」

「んじゃうちの使うわ。椅子持ってきて来ていて」

「おう」

とはいえ、外でやるとなればそのままの格好でというわけには

その信頼をぶちこわしかねないような珍説を披露する事になったわけだが、誰一人として野次ったり突っ込みを入れたりする者がいなかったというのは驚きだった。まあ竜胆のアレの後なら何を言っても普通に聞こえるだろうが。

「へー、凄いですねえ。さすが会長さん、いろんな事を知ってるしゃるのね」

婚約者殿は絶対理解してないな。あとでじっくり時間をかけて説明……する必要はないか。

「なるほど。面白いわ。チャネル争いのようなものね」

「何かなるほどだ、全然分からん」

肩をすくめてお手上げの仕草をみせる狩谷嬢に対し、からかうように三条嬢が言う。

「ふふふ、今ローラが考えるのを諦めた裏では、魂が無意識にギブアップを選択したのかもしれないってこと。その結果、テレビのチャネルを切り替えるみたいに、じっくり考える世界から諦める世界へと飛び移った。別にローラが怠け者だって訳じゃなくて、魂の方にやる気がなかったんだね」

「……それだと結局あたしを非難してないか?」

「すべての魂が同じ時を過ごしてるって説だから、魂は個別のものであると同時に、繋がり合った一つの大きな魂みたいな性質も持ってるんだと思う。ローラの思考に関してはローラの魂が優先されるんでしょけど……一見偶然に見えるクジ引きでも、一番強い魂の意向が優先されて、みんなが見ている世界が都合のいい方にずれてしまう。そういうチャネル権の持ち主は、一見するとただ運のいい人のように見えるんだね」

「うーん、分かったような分からないような話だな。でも一つだ

けはつきりしてる。今は全然フォローになってないからな、じゅら」

「ん、したつもりもないもの」

「……こいつは……」

三条嬢は繊細な見た目にそぐわず、なかなかお茶目な性格をしているな。

「私はなんかピンと来た気がしなくもない。ものすごく強力な魂が乗り出してきたら、教育テレビからアニメ専門チャンネルみたいな無茶な切り替えもできちゃうんでしょ……議長さんって説明上手いわね」

「それは光栄だわ。ありがと」

不満げな符谷嬢を尻目に、ツンデレゴスロリ娘のタメ口を聞き流す。三条嬢は相変わらず余裕たっぷりだ。

「なら、両方でアニメを放送している時間帯ならもっと簡単にチャンネル替えられるかも！」

飛成嬢にも変なスイッチが。

「でもって、同じキャラデザイナーで声優陣もだいたい被ってるとかだとさらに簡単ってね」

妙な例えを切っ掛けにまた脱線してきたな。

「その例えはよく分からないが……共通点の多い世界同士の切り替えなら抵抗も少なからうし、利害関係を持つ魂が少ない出来事ほど書き換えが容易いというのも十分あり得るだろう。我々は視聴者ではなく放送中の番組の登場人物にあたるわけだな」

「では、撮影中のドラマのシナリオが役者の力関係でどんどん変化していくような感じですか？」

この高天嬢の意見こそが、まさに正鵠を射ている気がする。

アヤののんきな声に、カナメは疲れた声で応じた。普段ならとっくに夢の中にいる時間に、アヤに三時間はどこちの店を引っ張り回されたのだ。ようやくベンチで小休止を許されて、ぐったりと座っていた。

ナイは慣れているわけでもないだろうに平然と、というよりはむしろ元氣そうにそばに置かれた紙袋を順繰りにのぞき込んでいる。その髪は未だに左半分は肩までのストレート、右半分は散切りにされたままだ。さすがにあまりに酷いと思って右側には少しだけはさみを入れたが、左側は迷った挙げ句止めたのだ。

「最後の客がやったんだろ。何考えてんのか知らねーけど」

「どうすつかね。あたしが切ろっか」

「あー、やるんだったら頼めるか？」

「別にうまくもないけどね。まあ少々アレでもこれよりはマシでしょ」

若干不安を感じなくもないが、任せておけばいいだろう。少なくとも自分がやるよりはよくなるはずだ。

「さて、じゃあ後は細かいもの買って帰るかー」

「おー……」

「オー」

アヤの声に反応してか、単にカナメの真似をしてみただけか、ナイもぱっと顔を上げて応じた。やはり元氣だ。

それからさらに三個所ほど回って帰宅した時点で、カナメは力尽きた。

「ちょっと無理だ。寝る」

「ん、じゃあ適当に起こす」

「頼むわ」

「そうだな。役者が魂にあたるとすれば、まさにその通りだ」

「そんなルールなら強引な変更に対する再修正みたいのもあり得るんじゃないの？大御所がアドリブで好き勝手やっても、監督が編集段階で方向性を修正することは可能なわけでしょ？」

これは炬姉の意見。これも鋭い。

「オンライン辞典の編集合戦を見かねた管理者によるロックみたいな？」

「それそれ、そんな感じ。さすが麻緒」

飛成嬢の例えは相変わらず随分と片寄っている。それでも炬姉妹は全肯定らしい。

「世界を管理する神的な存在が実在するかどうかはともかくとして、大きな変動に対して無理のない合理的な歴史の連続性を維持しようとする反発力の様なものは、提唱者の想定にも含まれていないな」

急激な横向きドリフトによる不連続性の補正のために起こる、追従ドリフトとか言ったはずだ。

「なら一度に無理をせず、多段階で目標に近づけていけばどうかしら。各方面の同意を得ながら少しずつ変化させていって、いつの間にか全然違うシナリオに変えてしまうの。生きた蛙は水から茹でろって言うでしょう」

残酷な例えがさらっと出てきた。炬妹、紗也嬢大人しげに見えるてなかなか危険な性格をしている模様だ。

「地道に軌道修正してやれば、魔王が跋扈するファンタジーな物語であっても、リアルな現代劇にまで軌道修正できるってか」

楼蘭が頭を掻きつつ言うのと、一同の視線が竜胆に集中した。

「結論がでたのか？」

ナイはというと、既にカナメの背中で寝息を立てている。最後に電車に乗って座った瞬間にこてんと寝てしまい、揺すっても起きなかったのだ。そもそも昼夜逆転の生活をしていたから、カナメが仕事をしている間も寝なかったのだろう。

ナイを背負ったままだうにか布団を敷いて、ようやく背中から下ろした。思わずふー、と息が漏れる。子供だから、やせているからと背負ってみたものの、ぐっすり寝ている人間は意外に重いジャケットとセーターを脱がして転がし、自分もダウンジャケットを脱いで寝転がる。冷え切った掛け布団に震える暇もなく、すんと眠りに落ちた。

毎日の習慣は思った以上に体に染みつくようで、ピピピピピ、と鳴り響く目覚まし時計に、素直に目が覚めた。音のする方に手を伸ばして、止める。身を起こそうとして、ぐっと止められる。ナイがいつの間にかしがみついていた。昨日は起きてからだった、今はまだ起きていない。

一応起こさずに抜けられないかと試みる。服を脱がないと無理だと判断して、無理矢理引っぱがした。

「んー」

「……起きないのかよ」

平和に寝息を立てているのにカナメはどこか安心して、洗面所に向かった。顔を洗っていると、だんだんだんと遠慮のないノックが聞こえる。アヤだ。

「……ナイは？」

「まだ寝てる。起こすか？」

「や、ならまだいいよ。あんたまだいるでしょ？」

「わかった。――」

「――」

「――？」

「――、ありがとう、――」

チャチャイに何やら訊いたナイは、不意にカナメとアヤの方に振り返った。

「カナメ、アヤ、ア、リガトー」

いかにも日本語に不慣れな言い方に、カナメもアヤも思わず頬が緩んだ。

「どういたしまして。さ、ご飯食べといで」

「ん、行くか。じゃまた後でな」

今度こそ部屋を出る。カナメは、前を歩くチャチャイに尋ねた。

「チャチャイ、そういや日本語勉強した時、最初どうした？」

「現場で教えてもらった。あとは、本読んだ」

「んー、やっぱ最初は教えるしかないか」

「みんな日本語しゃべってる、俺もだんだんわかる。ナイは小さいだから、たぶん早い」

経験者は語る、だ。学校に行くこともなく、いきなり外国人ばかりのところに放り込まれて、必要に迫られて覚えたのだろう。逆に言えば、ナイも何か仕事をして強制的に日本人としゃべらされれば覚えるし、部屋の中ずっと一人でいたらなかなか覚えられないかもしれない。

「……まあ、とりあえずは飯だな」

「じゃあおやすみ、カナメ、ナイ」

「おやすみ。俺はまだ寝られねえけどな……」

「さきほど言ったとおりだ。今のところ我々に竜胆が正しいかどうかを証明する手段はない。だから竜胆の見たものを細大漏らさず教えてもらい、それを少しでも可能性のあるシュテンバース仮説に従って解釈してみようと思う……そんなところでどうかな、諸君？」

麻緒「おっけーであります」

絵莉華「妥当かな」

紗也「……ご随意に」

樹菜「会長に一票」

楼蘭「好きにしたらいいよ」

睡蓮「ま、いいんじゃないね？」

明日香「会長さんの思召しのままに」

萌衣「はい、よろしいかと思います」

振ってみたらあつという間に意見が統一されてしまった。なんというか、非常識だが適応力も異常に高い連中だ。「なあ、本当にそんな簡単に俺を肯定していいのか？自分て言ってる何だが、ファリメウルの原住民にとってはものすごく胡散臭い話だろう。これまで信じてくれたのは睡蓮ぐらいのものなんだが」

「いや信じた覚えはないからねこれっぽっちもむぐっ……」

「いいのよ」

芳村女史は腰掛けていたテーブルから一挙動で跳ね起きると、義理の娘の口を押さえ、ツンデレ発言を遮った。

「いや、さすがね。無意識とはいえ大規模ドリフトを引き起こし

「なんで？」

「買い物。こいつの服とか買いに行くんだよ」

「ああ、アヤと一緒に」

「そうそう」

「がんばれ」

「サンキュー」

部屋に入って弁当を出す。箸の代わりにスプーンとフォークを付けてもらっていたので、それもナイに渡した。

「ナイ、スプーン。フォーク」

それぞれ指さして言ってみる。

「スプーン、フォーク」

「そうだ。これは弁当」

「ベントー？」

どうもそれが気に入ったらしく、食べ始めたら、カナメ、カナメ、と言いつつ指さす。ご飯、鮭、ポテトサラダ、と答えるが、途中で詰まった。

「……んー、漬け物？」

「スケモノ」

危うくかじりかけの鮭を飛ばしそうになって、カナメは盛大にむせた。

「そーいやさ」

「ん？」

「ずっと気になってただけだ。この子の髪型、ちょっとアグレッシブすぎない？」

「いや狙ってねえって」

まくってる子達だけの事はある。理解も思い切りも早くて助かるわ」

今ははっきり断定したなこの人。

「私個人としては、ドリフトって現象の存在を実感として信じてるわ。私たちクロヒメの度の過ぎた強運と、目立たなさこそが端的な証拠よ」

芳村女史はとあるテーブルを指さす。

「例えば麻緒さんの周辺では破壊的な事件や事故が頻発してるけど、私が調べた限りでは彼女が被害を受けたことはないわね。十九さんとサヤさんがクロヒメとしての力で彼女を守った結果が、より受け入れやすい歴史として再補正された結果がそれなんだとしたら？」

「納得した」

「……（こくり）」

身を翻し、また別のテーブルを指す。

「珠坂医大病院と医学部で根強く噂され続けている、極めて具体性の高い数々の怪奇事件。目撃証言からして議長さんあたりが片付けてくれてるんだと思っていたけど、事件の多くがヒトに危害を加える怪異との戦いの話であるにも関わらず、実際に被害を受けた者が存在しないばかりか怪異の痕跡も発見できていない。こちらで隠蔽工作をしたわけでもないってのにね」

「んー、何のことでしょう？全然存じ上げませんけど」

またまた別のテーブルを指す。

「寛彰君と一心同体という現状はまさに奥方ちゃんの望み通りなわけだし」

「はい」

今度は、先ほどまで腰掛けていたテーブルを叩いて、「寂しがり屋で心配性の睡蓮ちゃんときたら。やることなすこと裏目に出るのに、自分は全然被害を受けずに周りにばかり不運をまき散らしてたし。婿殿と一緒にってから随分落ち着いたけど」

「い、一緒になんてならないんだから！」

「あら、そっちの方を否定するんだ」

「あああ、悪趣味よっ！」

そして最後に芳村女史は、丈司と明日香の座るテーブルを指し示した。

「丈司君が倒したアレの死骸は揺さんと私達が責任を持って隠蔽したけど……鉄塊さんのピンチに潜在能力を振り絞った一撃がたまたま逆鱗に入ったなんて、あんまりにも出来過ぎだと思わない？ご都合主義の根性系少年漫画じゃあるまいし」

「それは自分も思っていました」

普通ならまともに傷を負わせることもおぼつかない相手だったテレフォンパンチも同然の大モーション技がまともに弱点に入るなど、放った丈司自身も未だに信じられない。

「これは推測ではあるけど……鉄塊さん、佐倉明日香嬢のクロヒメとしての固有能力はおそらく^{ドラゴンスレイヤー}竜殺し^{ドラゴンスレイヤー}よ。私が炎を、カタミちゃんが生死を操るように、彼女はただそのためにだけに特化した力を持つてるはず」

飛成くんが、あつと声を上げ、掌を打った。

「そっか、扇戸^{センド}丈司^{ジョシ}の聖剣“アスカロン”だ。いや、来たわコレ来まくってるってば」

「今麻緒が上手いこと言った！座布団一枚やっつくれ」

「んー……あー、これならいいか」

「何だ？」

「外出る時用の上着。そんなんじゃ寒いでしょこれから」
引っ張り出してきたのは、ベージュ色のジャケットだ。明らかにサイズがでかいが、確かにセーターだけでうろうろするのはキツいだろう。

「ナイ、おいで」

かがんだままちょいちょいと手招きする。ナイは少し不安げにカナメを見上げた。

「大丈夫だよ。着てみる」

ナイの背中を押してやると、ためらいがちに歩を進める。

「ホントにあんたに懐いてるんだね。ほら、着てみ？」

押し出されてきたナイにジャケットを羽織らせると、ナイは目をぱちくりさせた。

「あーやっぱ丈がちょっと中途半端だなー」

「いいんじゃないか？ 買い物とかぐらいなら。あったかそうだしな、それ」

「何より軽いんだよね。ナイちっちゃいからトレンチとかだと肩こりそうじゃん」

「だな。ほら、袖通してみる」

アヤがナイの手を取って袖を通してやると、恐る恐る反対側は自分で着た。

「ん、まあいっか。ナイ、プレゼント」

「エ？プレゼント？」

「そ。プレゼント」

ジャケットをつまんで見せてから、ナイを指さす。もう一度繰

「……ハイただいま」

飛成一門の発言とそれが意味する内容に、頭痛を覚えざるを得ない。

「彼女自ら竜を倒しておいて、その経過を貴方の活躍にすり替えたとすればどうかしら。自覚はともかく十分にあり得る話だと思うけど」

なるほど、認めたくはないが得心はいくな。

「え？何のことですか？」

「いや、君は分からなくていい」

「そうですか。では気にしませんね」

こういう時こそ、明日香が大雑把な性格で良かったと思うと同時に、先ほどの嫌な予感の正体が分かった気がする。

飛車が成れば赤い竜王。赤竜はウェールズの象徴であると同時に竜の頭と伝説に名高い王を彷彿させるものでもある。

「では、十九さんの場合は麻緒^{アスカロン}の絵莉華^{エズカリパー}？」

三条嬢が嫌な予感をあつさり言葉にしてくれた。

「紗也転じて鞘^{サヤ}ってか。おいおい、やっぱり出来過ぎじゃん」

王の敵を倒す剣と王の身を守る鞘、二つで一つの王剣。先ほどの二人の発言ともびつたり合致する。

符谷嬢に言われなくても十分出来過ぎだ。

「……え、セイバーなんなの？それはちょっと、なんていうか、畏れ多いなあ」

何を想像しているのか分からないが、当の飛成嬢は体をぐねぐねさせながら照れまくっている。

「待てよ待てよ。それだと何か、じゅらもそういうロープレ武器ネタになるのか？」

り返すと、ナイはこみ上げるような笑みを浮かべた。

「――」

「ん、どういたしまして」

アヤは頭を撫でてやって、不意にすくと立ち上がった。

「さて、じゃー朝ご飯食べて買い物に行きますか。カナメ、あんたも出て準備しといで」

「おう」

普段なら時間的に任せてしまいたいところだが、今回はそういうわけにもいかない。眠いが仕方ない。

ドアを開けたとたん、オウ、と低い声がした。チャチャイの目の前でドアを開けてしまったらしい。

「あ、悪い」

「カナメ？ おはよう」

「ああ、おはよう」

「――」

「――」

人相は悪いがどこまでも礼儀正しいチャチャイは、出てきた順にカナメ、ナイ、アヤ、と挨拶を交わす。

「アヤ、飲んでた？」

「違う違う。ナイに服あげたの。これ」

「オー。ナイ、――」

「――」

二人で何を話しているのやら、横で聞いているカナメとアヤにはさっぱりわからない。

「あー、チャチャイ。ついでにさ、食事終わったらあたしと服買いに行くよって伝えてくれる？この子何にも持っていないでしょ」

「カナメ——！」

どしん、と体ごとぶつかってきて、カナメは思わず呻いた。どうにか踏ん張って転びはしなかったが。

「お前な、もうちょっと加減しろ」

「——」

「あーはいはい、ただいま」

カナメがぼんぼんと背中を叩いてやると、ナイは嬉しそうにぎゅーっとカナメを抱きしめてから、ようやくそばの二人に気付いたような顔をした。

「……懐いてるねー」

「なんでかな」

「言葉わかるの？」

「名前しかわからん」

「今のは」

「適当。こいつも俺が何言ってるのかわかってないだろ」

呆れ顔のアヤと話していると、ナイがちよいちよいと裾を引いた。

「ん？」

「カナメ、——？」

なんとなく疑問文な雰囲気。ついでにアヤを指さしている。

「あー。こいつはアヤ」

「つあーや？」

「ア、ヤ。あたしは、アヤ。よろしく、ナイ」

「アヤ？——ナイ」

二人がかりで言ったらわかってくれたらしい。少しほっとした様子で笑顔を見せた。

「ついでだ。こっちはカズ。カズ」

「ついでって……」

「カッ」

「ん？カッじゃねえ、カズ」

「カッ？」

「あー、発音できないんじゃない？ チャチャイもズって言えてなかったじゃん」

「ズー」

「ツー？」

「ズー」

「スー？」

「あの……僕そろそろ行かないと遅刻しそうなんですけど」

カズを送り出してから、三人はアヤの部屋に入った。アヤの部屋は二階の真ん中にある。手前からカズ、アヤ、チャチャイ、カナメの順だ。カナメの部屋とは洗面所その他の位置と窓の有無が違ってくるので、広さはほとんど変わらない。

「つーてもあたしんともこの子に入るような服ないよ」

「まー体格が違うしな。安めの適当に見繕ってやってくんねーかな」

「んー、ついでにあたしのも買ってよければいいよ」

「……四桁に収まるんだろうな」

「六桁はいかないから」

「ナイが餓死するぞ」

「うっわ最悪」

言いながらふすまを引いて、下の段に頭を突っ込んだ。

「ここでネタ呼ばわりは酷いね。自分も有名な英雄の名前をもらってにくせに、うりうり」

「うひゃっ、ワキをつつくな！」

じゃれ合う狩谷嬢とその相棒。この状況でもいささかも不安げな表情を見せない三条嬢を見ていて、ピンと来た。

「そういう君は、とうの昔に気づいていたとも言わんばかりだが」

「まあ、なんとなくです。なにしろ飛行場には生理的嫌悪感を覚えますし」

「そこで気づくとはマニアックすぎるわね、議長さん、いやさ二十九さん」

「あ、やっぱり知ってらしたんですね」

と、にやにや笑いの芳村女史に、三条嬢が愛らしく笑って返す。「分かるように説明しろ！私は一体何者だってんだ？伝説の女巨人かなんかか？」

置いてけぼりにされた狩谷嬢が半泣きになって縋り付くと、小柄な三条嬢はその頭を撫でてやる。

「楼蘭^{ロウラン}といえばデュランダルでしょうに。世間の常識、ましてや女子高生なら知ってて当然の基本知識」

「んなもの知るかっ！」

刈谷嬢が怒るのは無理もないが、フォローしてやろうか。

「叙事詩『ローランの歌』の主人公、シャルルマーニュの甥にしてフランスをイスラム勢力から守った伝説の騎士だ。デュランダルは確か、折るために剣を叩きつけた岩を逆に切り裂いたといわれる名剣のはず」

「へえ、格好いいじゃん」

少しは効果があったようだね。

「義理の父親に裏切られて死んじゃうだけだね」

「うがーっ！」

「ついでに言うと、ローランの親友オリヴィエの剣がオートクレールで高潔とかいう意味。さらについでに言うと、シャルルマーニュすなわちカール大帝の剣がジュワユーズで、英語で言うところのジョイフル、嬉し楽し喜ばしぐらいの意味」

「はあ、それが何の……げっ」

刈谷嬢の表情がより渋いものになる。

「そのココロは、折部^{おひべ}織絵^{おりえ}に小暮^{こくれ}潔^{きよし}、狩谷^{かりや}大に^{ひろし}歓喜^{かんぎ}幸子^{さちこ}ってか」「だからローラと織絵が延々どつき合ってたときには笑った笑った」

「分かってたら先に止めてくれよ、頼むから！」

あの時は生徒会の会計がかなり潤ったものだが、そういえばローランの歌にそういうエピソードがあったな。

「アリスはエンヴァイロメントとか言ってるそうよ。クロヒメぐらいの精魂になると環境を引き連れて関係性を再現するってね」

そこでちょっと考えて、飛成嬢が挙手。

「はいはい。うちの妹、麻鈴^{まりん}で名前なんだけど、やっぱりそうなのかなーって」

「あの子、ネット上ではウィザード呼ばわりされてるしね」

炬姉妹も納得の様子。

おそらく近年までは世界一有名だった魔法使いだな。昨今では知名度で某眼鏡小僧に抜かれてるだろうが。

「ってことは、私や玲韻さんや奥方ちゃんもそういうファンタジーな剣に縁が？」

首を捻る芳村嬢。それに応えて高天嬢が小さく挙手。
「なんとなく思いついたんですが、私は『干将・莫耶』かもしれない、と」

「確かに、寛彰君はそのまま干将に通じ、そして萌衣は M o j e すなわち莫耶に通じるわけか。ありうるわね」
と何度も頷く芳村女史。

「ってえとアチャやら天化のアレっすね？」

「わからんが多分それじゃないか？」

「ですよー」

飛成嬢に無茶な同意を求められたので、適当に同意しておく。
無責任なようだが大きく間違っはいいまい。

「……うーん、なんていうか緊張してきたー」

自分の体を抱くようにしているゴスロリ嬢。

既に結果の出た立場であるからこちらは気楽なものだが、いわば職業適性テストの結果を渡されるようなものだからな。期待と不安で気持ちがいっぱいだろう。

「カタミちゃんはあるよ。ポポリボクチャヌ」

「何そのばつとしない名前」

「アフリカ奥地の某部族の神様が牛の糞から世界を作るのに使った木の槍」

「それって、マジ？」

むき出しのおでこに縦皺を寄せて義理の母親に詰め寄る芳村嬢。

「マジ」

見つめかえす芳村女史の表情は真剣そのものだ。

直後、ふらりと傾いた芳村嬢だが、

「おっと」

同意を求めるような声と視線を、カナメの背後に向ける。はっとした頃には、カナメの首に半纏に包まれた腕が回った。手から落としたボールが地面に向かうような自然さで、その腕がすいと動いて、カナメの喉にそっと触れた。耳元でハスキーな声がする。
「朝っぱらからご挨拶だねえ」

「アヤ……お前なんで朝っぱらから起きてんぐっ!？」

「あんたが玄関先でぎゃーぎゃー騒ぐからだろ。あたしの爽やかな朝を返せ」

カナメは慌てて両手でその腕を掴んで外そうとしたが、全力で引いてもびくりとも動かない。

アヤはそんなカナメから視線を外してカズを見上げた。

「おはよカズ。何事？」

「おはようございます。いや、昨日の朝、カナメさんの家にアジア系の女の子が行き倒れてて、カナメさんにそのまま住むことになったんですけど、服とかも全然なくて、何を買ったらいいか全然わからないって」

「なるほど。で、女子高生にモテモテのカズ君をバシって服とか靴とか買わせようとしたわけか」

「です。なので僕よりアヤさんの方が適任なんじゃないかって」

カズの説明に、アヤは少しばかり考え込む様子を見せた。

この間、カナメはずっと首を絞められ続けているわけだが、アヤがカナメをシめるのはそう珍しいことでもないから、カズも止める以前に気にも留めない。

「まあ行くのはいいけどさ。カナメ、あんたこれからどうする気？」

「っ……手を離せ……」

大輔（と呼ばせてもらおう）が素早く抱き留めたため、事なきを得る。

真っ白な顔色に赤みが戻ったと思ったら、急激に紅潮へと進んでいき、

慌てて跳ね起きた芳村嬢は、天を仰いでわめき始めた、

「いっやー、そんなダサイの嫌すぎっ！冗談でしょ、冗談だって言ってよ、ねえ!？」

「うん、冗談。でまかせ」

「……」

この人、最悪だ。

「私はダインスレイフじゃないかなと思ってる。大輔に、フレアだしね。睡蓮でも語呂が合うでしょ」

「……そんなの知らない」

「北欧神話において、ダインという小人によって鍛えられ、女神フレリアによってデンマークの王に授けられたという由緒正しい剣よ」

びくっ。

あさってを向いてしまった芳村嬢だが、

「斬りつけた相手に治らぬ傷を与え、ひとたび抜かれたが最後、敵を倒すまでは決して鞘に収まらないとされてる」

「……悪くないかも」

だんだん機嫌が直ってきた。

ものは言いよう、というやつか。呪われた剣が随分立派な代物のように聞こえる。

「うん、そう、悪くないっすねえ」

飛成嬢の歯切れが悪いのは、予備知識があるからだろうな。

ぽふぽふと腕をタップしてようやく解放されたカナメは、首をぐりぐりと回してから聞き返した。

「どうする気って何がだ」

「何がじゃないでしょ。行き倒れてどこの子なの」

「どこも何も、孤児だ。チャチャイが言葉通じてたからあの辺なんじゃねえか？」

「あー、それで強制送還とか言ってたのか」

「待て、お前そこ意味わからずに締めたんか」

「悪口言ってるのがわかればそれで十分じゃん」

乱暴な口ぶりに、カナメはため息をついた。

「まあ、問答無用で強制送還はさすがにしないって」

「そうですね」

「ただ、ずっと育ててくんだとちょっと大変じゃない？ 学校も通えないし、その辺のコンビニでバイトってわけにもいかないでしょ。それを——」

「カナメ！」

アヤが言い終えないうちに、高い声が降ってきた。アヤは思わず振り返り、カナメとカズもその声の方を見た。声の主は、顔を上げたカナメの方を見て手を振ると、ぱっと廊下を走り出した。あつという間に廊下を横断し、階段を駆け下りてまっすぐにカナメに駆け寄ってくる。一応セーターは着ているものの、下はジャージの裾をぐるぐるとまくり上げているだけだし裸足のままだ。

元気だなーおい、なんて思っていると、ナイはまったくブレーキをかけずに飛び込んでくる。

「おいおいおいこらちょっと待っ……」

電車で揺られること二十分。駅前のコンビニで朝食の弁当を買って、繁華街から少し離れたところにあるアパートに戻る。

今日もちょうど入り口でカズとすれ違う。昨日はあれから姿を見なかったから、事情はまだ話していない。

「おうカズ」

「あ、おはようございます。……その、昨日の子は……」

やはり気になるのだろう、すぐにその話を振ってきた。

「ああ、あいつなら……」

からかったものか、ちょっと迷う。カズは生真面目だから、あまり変なことを言う……。

「お前の妹として代理で養子縁組しといたから。頑張って育てろよ」

「は、はい!？」

誘惑に負けた。カズはいじるとちゃんと乗ってくるから面白い。

「なんで僕の妹なんですか」

すぐに冗談だと気付いて、微妙にずれた不平を言うカズにもう一つ笑わせてもらってから、実際のところを言ってしまった。

「つうわけで。お前も妹としてちゃんと世話してやれ」

「それは構いませんけど、なんで妹なんですか」

「なんだお前、妹じゃなくて彼女がいいのか?……あそっか、お前とだったら三歳差だからロリコンとかないな」

「いや、そうじゃないですってば」

「つか俺、子供の相手したことないんだよ。ホントのガキじゃねえけど、言葉も教えないと話通じねえし」

「それは僕もそうですよ。下の兄弟もいませんし、従姉妹は女多いですけど年上ばかりだし」

「で、そういう義母^{ハハツエ}上さまはきつとよほど高貴な名剣にご縁でいらっしゃるのでしょうか？」

いかにも卑屈な態度で皮肉を発する芳村嬢に対し、芳村女史(わかにくいな)は淡々と答える、

「破滅の枝レヴァテイン。これはほぼ確定ね。女巨人シンモラに嚴重に保管されているとされ、その夫である黒い巨人スルトが世界を滅ぼす事になる炎の剣と同一視する向きもあるわ」
「なるほど、いかにも凶悪よねえ。放火上等って感じじゃないの」

こちらは神が世界を浄化するための最終兵器という事になるが、言い方次第ではいかにも胡散臭げに聞こえるから不思議だ。

先ほどのおちよくるような態度は大人としてどうかと思っただが、どうやら優しさから出たものだったとみえる。

人生の先輩の懐の深さに尊敬の念を抱くと同時に、大変嫌な疑念が膨れあがるのを感じる。

芳村女史が最後のクロヒメとは限らない。

そしてすべてのクロヒメが、ここに集った六人のように話の通じる相手であるとも限らない。

丈司がそれを口にする、と、

「残り二人」

と、疑念はあっさり肯定された。

「これまであなた方の関わってきた事件の背後には間接的に危険なのがいたのだけれど、彼女は最近では動いていないわただ、その分もう一人の周辺が妙な具合になってね」

「それが、最初に貴女の仰ったところの『危機』だと」

芳村女史の言い方ではあまり大変そうには感じられないが、い

「というわけで、言葉はまあチャチャイと俺で教えるから、お前買い物頼む」

「買い物?」

「服。お前なら女ものの服とか下着とか普通に買うだろう」

「買いませんよ! 女装癖があるみたいと言わなくてください!」

「俺もない」

「じゃあどっちが行っても一緒じゃないですか」

「お前学校でモテモテだろ。誰かにについて来てもらえばいいじゃんか。おにーさん知ってるんだぞー?」

「モテません」

「バレンタインから一週間ぐらい汗かきながらチョコ食ってただろうが」

去年の二月中旬の惨状はアパート中の知る事実だけに、カズはぐっと言葉に詰まった。

「あれば何でもいいから。あ、レシートちゃんともらってこいよ」

「いやだから何で僕が行く前提で話が進んでるんですか」

「せっかくだから狙ってる彼女連れてけよ。結婚した時の練習だよ、とか言って」

最後の一言は余計だったようで、カズはさすがに突っ込まずに冷やかな視線をカナメに向けた。

「……そもそも僕じゃなくてアヤさんに頼めばいいじゃないですか。女性なんだし」

「馬鹿、あいつに頼んだら速攻警察に拉致られてそのまま強制送還コースだろ」

「いや、何もそんなことはないと思いますけど……ねえ?」

つぞやの事件において人間をあんな怪物に変貌させてしまったのがただ一人の能力によるものとすれば、世界レベルというのは大袈裟にしても危険とみなすに十分だろう。

ではもう一人のクロヒメにはどのような危険が?

と尋ねる間もあらばこそ。

芳村女史がその実務能力の本領を発揮し始めた。

「意思統一と属性の考察が終わったところで、これで前振りは終わり。やっと本題に入れるわね」

彼女が手を打つと、コックコートにエプロン姿の男性が厨房から顔を出した。

「ど、どうも、失礼しまして」

みるからに気が弱そうな風貌で、針金のような体型もいかにも虚弱体質を思わせる。幽鬼のような雰囲気的人物だ。

「こちら店主の萩本^{はぎもと}さん」

「ご紹介に与りました萩本です。本日は当店をご利用いただきありがとうございます」

萩本氏はふかぶかと頭を下げる。そのまま頭を上げられずに床に倒れ込んでしまうのではないかと心配になるが、ゆらゆらしながらも倒れそうで倒れない。

「これはこれはご丁寧に。わたくし佐倉明日香と申します」

「高天萌衣です」

空気が読めない明日香と、基本的に丁寧な高天嬢が素直に挨拶を返す。

どうしてここで店主が?という疑問を抱きつつ続こうとした丈司を視線だけで制した芳村嬢は、

「皆さんにアルバイトを紹介するわ」

と言いつつ放った。

疑問を挟む余地を与えない。

「ここは監視と観察の基点として理想的な立地条件なのよ。中高生がたまってても不自然じゃないし」

何となく分かってきた。

「心配ご無用。皆まで言わなくていいから。保護者の同意と各校の許可は取得済み」

各位をどうやって納得させたかは聞かない方がいいだろうな。

「つまり我々の意思は関係ない」と

「別に君が参加する必要はないわ。必要なのはクロヒメ、つまり君の婚約者の方だから」

あんな危なかった人物を他人任せに出来るか。そもそも箱入り過保護大ボケ娘に客商売など務まろう筈もない。

「いえ、僕がフォローします」

「ん、それでこそ聖者様」

ちゃんと断れないように追い込まれているんだな。このへんのやり口、師匠と全く同じだ。

「理想的とはいいが、俺には情報へのアクセス性が致命的な不十分なように思えるな。むしろ家の方が都合がいい」

竜胆のこれは暗に何かを要求しているのか？

「当店にはウェブに常時接続可能な無線LANを完備しておりますし、時間単位で端末の貸し出しも可能ですし、もちろん従業員待遇に色をつけて、メニューは注文し放題ということていかがでしょうか」

「ならば世話になりたい」

理不尽な要求もあっさりクリア。至れり尽くせりというやつか。

思い切り笑われた。予想どおりすぎて呆れるが、同世代ばかりだし、前から職場の同僚とはお互い深刻な話をしたこともなかったから、こんなものだろう。男連中で大騒ぎしていたら女共も寄ってきた。

「えー何々？」

「いやカナメが外人の子供飼いだめなんだって」

「はあ!？」

「えーマジ？ カナメ、ロリコンだったの？」

「ロリコンじゃねえ」

「そっかー、モテないと思ったらそういうことだったんだ」

「そういうことじゃねえ」

モテないのは事実だが、それはカナメの好みの問題ではない。

「じゃああれか、自分好みの女に育ててからいただくってか」

「きゃーヘンターイ！」

「うっわー、ちょっとやってみてえ」

「お前もかよ！」

騒ぎを聞きつけてやってきた店長の怒声を聞きながら、カナメは何の役にも立たない同僚たちのために息をついた。

仕事自体はいつでもどおりに淡々とこなす。カナメの勤めている店は繁華街から少し外れたところにあるからか、あまり面倒な客が来ない。今日はそもそも客自体が少ないから、少々考えごとをしながらかでも仕事は進む。

考えているのはナイのこと、彼女のためにカナメがしなければならぬことだ。

服にしろ身の回りの物にしろ、カナメの物をそのまま使える物ばかりではないし、十四歳なら月のももあるはずで、その辺り

「そんな大盤振る舞いでこんなに雇ったら赤字になるんじゃない？」の疑念ももっともだ。

「珠坂商工会が全面的にバックアップすることになっているから問題なし」

そういえばこの人、会頭秘書だったな。

公私混同、組織の私物化もここに極まれりだな。

「それに、商売づけを忘れたつもりは無いわよ」

珠坂大学附属紫城学園中等部。二年C組。

「あの、すみません。天叢渚沙さんってこちらのクラスですか？」

「あー、彼女ってば激レアモンスターだから、学校で会えたらむしろ超ラッキーだよ」

「何でも出来ちゃう超天才だからね。テストで百点とり続けているりは遅刻早退御免、サボりのライセンス持ちなんだって」

「まあ、あそこまで差をつけられたら悔しいとか妬ましいとかいうレベルじゃないし」

「神様から与えられた容姿も才能も、全部帳消しにしてあまりあるアレっぶりだしねえ」

「アレ？」

「高天寛彰よりH Q。中等部なう。ターゲットは登校していない模様です」

「H Q了解。別命あるまで待機。著変の際には遅滞なく連絡されまし」

に関してカナメは何も知らない。同僚に助けを求められないなら、チャチャイ以外のアパートの住民にも力を借りるしかない。

それに、ナイは働く、などと言っていたが、それが実際にできるわけではない。人種国籍を問わない働き口もないではないが、不法入国となると話はまったく違う。働きたければ、蛇の道に通じた蛇の力を借りる必要がある。それでは早晩、またばる雑巾のようにそこらに投げ捨てられることになるのは火を見るより明らかだ。

つまり、ある意味中学生の子供だと思えば当たり前の話だが、ナイの収入は当てにできない。ある程度時間が経って、日本語が話せるようになることと、見た目だけでも年齢がいくのを待つしかない。カナメの店には外国人のホステスはいないが、見た目の年齢さえクリアしていればツテはないでもない。

今日はチャチャイを通じて外に出るなど言っているが、家の中でできることを探した方がいいかもしれない、とも考える。

そんなことを考えながら動いていたら、気付けば夜明けも近い時間帯になっていた。

「カナメちゃん、やーっと仕事終わったなあ。愛しの彼女が待っているぜえ？」

「お風呂にする？ ご飯にする？ それとも――」

「『あ・た・し?』」

仲良く大合唱、そして大爆笑。カナメは割ともうどうでもよくなってきた。ナイはそもそもこういう文化を知らないだろう。日本語しゃべれないし。

その声に押されて、というわけではないが、店に在るといじられるばかりなのは身に染みしたので、さっさと帰ることにする。

言っても通じないが、言う。肩をつかんで引きはがすと、ナイは案外素直に離れた。くぁーっと猫のようなあくびをする。カナメが貸したＴシャツにハーフパンツ、という格好なのだが、サイズの合わないだばだばのＴシャツがハーフパンツをほとんど隠してしまっていて、Ｔシャツ一枚にしか見えない。

「……だからって色気なんてあったもんじゃねえな」

眠気が残っていてまだ少し重たい頭を載せたまま、カナメはぼーっとナイを見ていた。汚れ破れた服はゴミ袋にまとめて突っ込んで、汚れた体はシャワーで流した。他人の頭を洗ったのなんか初めてだ。

「――？」

疑問符を発音するように語尾を上げて、ナイは弁当を差し出されたとき以上に嬉しそうに笑った。何見てるの？ とでも言うてるのだろうか。カナメは応えずにもう一つ大あくびをして、洗面所に向かった。

ナイ、十四歳、天涯孤独、日本語が話せない、日本には売られてきた、自分の国の言葉なら話せるが、読み書きは不得意。チャチャイが聞き出した、居候少女の情報のすべてだ。十四歳、中学二年生の歳だが、顔立ちが幼く見える上に背が低くやせた体は小学生にしか見えない。

胸から腹にあった傷痕は太ももと尻にもあったが、ちゃんと洗ってよく見たらそれほど深いものではなかった。数日で跡形もなくなるだろう。

「あー、歯ブラシもないのか」

自分の歯ブラシを手にとって、気付いた。服もすべて捨てたので、言葉どおりの意味で身一つのナイを住まわせるとなると、ナ

イが使うものはすべて買い揃える必要がある。あちこちうろつく必要もあるし、しばらくはこれまでに金欠になりそうだ。何も面倒ごとがなかったとしても、それだけで十分面倒だ。

洗面台の下にある観音開きの扉を開けて、中を探る。予備の歯ブラシが見つかった。

「ナイ！」

「――？」

呼んだらぱっと飛んできた。洗面所をのぞき込んだ笑顔に歯ブラシを手渡す。洗面台に向かわせて、カナメは自分が持っている歯ブラシを洗って歯磨き粉を載せて口にくわえる。歯磨き粉のチューブを渡してやってみろ、と身振りで促した。しゃっこしゃっことやりながら見守るカナメの目の前で、ナイは案外慣れた手つきで歯ブラシを口に突っ込んだ。

「なんだできるんか」

よく考えたらさすがに歯磨きぐらい、と思うのだが、カナメはソースがたっぷりかかったとんかつを躊躇なく素手で掴んだ印象が強すぎて、何もできないような気がしてしまう。なんだから親子か兄妹のように並んで歯磨きをしながら、カナメは仕事までのわずかな時間をどう過ごしたものかと考えていた。それから、仕事場で話したら笑われるだろうな、とも。

「うっそマジで!」

「マジだよ」

「すげーなお前超いい奴じゃん!」

「っーか超ロリコン?」

「ギャハハハハ!」

「睡蓮よりH Q。高等部なう。サブターゲット確認。観察を開始」
「H Q了解。なお現在ターゲットの所在不明。任務遂行においては周辺状況に十分に注意せよ」
「睡蓮了解」

サブターゲットの草野建流は、くりくりした目の愛らしい少年だ。

可愛らしい系の美少年としては、高天つちとか気配り王子樋口君あたりという勝負ではなからうか。

しかも人当たりも柔らかく、言動も常識的。

どこぞのぼつとしない中二病ヲタとは人間としてのモノが違うわけで、これは実に好都合。

なにしろ、大輔を引きこもらせないでおくには実存する仮想敵が必須だ。

越えられない壁として立ちふさぐてくれている南山生徒会長は、時期が来れば自動的に退場となる。だからこそ、気配り王子や草野君といった直接ぶつかり合える超強敵の存在は有り難い。

と、内心ほくそ笑んでいたのだが。

次の瞬間、睡蓮は戦慄する事になった。

猛烈なエネルギーの込められた視線の圧力を背後から感じる。

迂闊に振り向いたら石にでも変えられそう。

生徒手帳の裏表紙に貼った鏡と窓ガラスの反射を使って背後を確認すると……

いた。

視線の主は、長い廊下の反対側の端、階段の角から半身を覗かせていた。

艶やかな長い黒髪にクラシカルないわゆる姫カットがこれ以上ないほど似合う、端麗和風辛口の超絶美少女。清楚だが可憐という形容は決して似つかわしくない。その怜悧なまでの美貌と、強い意志の宿った瞳。

見覚えが云々いう必要はない。昨日写真で見せられたターゲットそのものだ。

赤のラインの入った黒のセーラー服は、紫城高等部の制服であるアースブラウンのブレザーとは似ても似つかない。

見た目のインパクトで周囲から浮きまくる以前に、あまりに堂々とした部外者っぷりにはいっそ爽快ささえ覚えるが。

って、中坊でなかったんかい!

上背も体型の起伏もあり、睡蓮より年下には全体に見えない。

見た目はまず高校二年かそこらだ。

顔の造作で負けているとは思わないが、なんとも腹立たしい。

つかムカツク!

って……うっわやばっ、あれ少佐じゃん。

あの目は危険すぎる。幼なじみに向ける視線じゃない。

玲韻の忠告を考慮して、大輔と離れていたのは正解だった。少なくとも一網打尽は防げる。

その頃大輔はいえ。

中庭を隔てた南校舎から、睡蓮たちの様子を窺っていた。

玲韻のついでで入手した高級双眼鏡の調子はすこぶる良い。蛍石

を奢った光学系の優秀さはもとより、最新の手ぶれ防止とレーザ―距離計連動のオートフォーカス機能が常に最高性能の発揮を約束する。

「あいっだあいっ」

「相変わらずやべえな」

周囲から浮いているのは百も承知。外聞など気にしては使命は成し遂げられない。

そこらへん、ターゲットも分かっているようだ。徹底した割り切り、敵ながら天晴れといえよう。

「!?」

舌打ちと、ため息。

なんという目まぐるしさか。

「こらー竜胆、覗きとは何事だー。職員室来い！」

“ダイナスよりH Q。ターゲットを失探。突然消失した”

“H Qより一同。ターゲットの情報を再確認したい”

“萌衣よりH Q。先ほどまでの書き込み通り、朝からターゲットを捕捉しています”

“丈司よりH Q。ドリフト発生の疑いあり。ダイナスの記憶との照合を要する”

「都合16回」

それがここ二日間の始業から終業までの間に大輔が感知したトランスバースドリフト現象の回数だ。

「空気を読まない生活指導教諭や風紀委員に妨害された分を含めれば、おそらくその倍近いだろう」

「いや、むしろ正しく職務を果たしていると言えるな、さすがは

た皿を片付けた。やがて、話が一区切りしたのかチャチャイが振り返った。

「カナメ。こいつ、ナイという。カナメの家に住みたい、言ってる」

「ダメだ」

「――」

「――、――！」

カナメは別にそのまま返事するつもりはなかったのだが、チャチャイは速やかに通訳し、少女、ナイは驚きと懇願を混ぜたような顔をした。

「私働く、ここに住みたい、お願い、言ってる」

そういう問題じゃないんだ、と言いかけて、ナイの視線に気付いた。珍妙な髪型で、ボロボロの服を着て、そんなことには気付いてもないように、ただまっすぐにカナメを見ていた。

（くっそ、餌付けなんてするんじゃないか……!）

カナメがためらっている理由は、自分が一人余計に養わないといけない、ということだけではない。ナイの服装と体にあった傷痕だ。ナイだけではなく、東南アジアからの人の流入はここ数年で急が増えてきた。正規のものだけではない。裏口から入ってくるケースも、明らかに増えている。目的はもちろん出稼ぎだが、そんな方法で入ってきて、すんなり職にありつけるわけがない。

日本語も英語も話せず、専門知識もない外国人が日銭を稼ぐには、少数の例外を除いて、肉体労働だけだ。正規のパスポートを持っているチャチャイも、偶然が重なってコンビニのバイトをしているが、ついこの間までは工事現場を点々としていたのだ。殊にナイのように人身売買のブローカーの手で連れてこられた少女

紫城だけある。うちの適当な連中に見習わせたいところだ」

まったく、浅葱谷は生徒も生徒なら教師も教師だからな。

「つまり、ターゲットは頻繁に優等生とストーカーの立場を切り替えていると、そういう事ね」

事実上のリーダーたる玲韻さん（同志を呼び合うのだから、もう名前でもいいだろう）が、簡単にまとめた。

「学校の移動のためにわざわざ歴史を書き換えなんて、効率が悪いことこの上ありませんね」

と、萌衣ちゃんが感想をこぼし、

「いやいや、炬姉妹の合体分離やあなたの変身と大差ないですよ」

「そういえばそうですね」

睡蓮嬢のツツコミにあっさり納得する。

が、

「必ずしもそうでもないかも。うまく切り替えられれば、二兎でも三兎でも追えるんじゃない？」

じゅらの指摘ももっともだ。常に要所・要点に身をおく事が出来ると同時に、目的を果たしつつ学生としての立場を両立できる

「で、そんな娘のどこら辺が危険だったの？」

強引につきあわされた形になる楼蘭嬢がそう尋ねたくなるのも、もっともだ。

明日香や樹菜嬢達とどことなく共通性を感じさせる容姿と、いかにも意味ありげな姓名。玲韻さんに指定されたターゲットである天叢渚沙嬢がクロヒメであることはまず間違いない。

が、ドリフトの内容を含めても、彼女の行動が世界に危険を及ぼすようにはとも思えない。

たちが生きていく手段は一つしかない。体の傷痕は、彼女の客がつけたものだろう。

単に頭がイカれているだけの一般人ならいい。うっかりやんごとなき立場の人間だったりすると、余計なことを話されないように、とか、意味のわからない理由で面倒ごとが湧いてくるかもしれない。ナイには相手が誰かなんて知る術もないし、そもそも興味もないだろう。ちゃんと金を払ってくれるかどうか、それだけだ。それだけだ、ということは普通わかるが、後ろめたいと感じている奴には当たり前のことなんてわからないものだ。

「……なんでここにいたのか、訊いてくれ」

ぐるぐると迷い続けたまま、カナメは尋ねた。チャチャイの質問に、ナイは一言で答えた。

「理由ない、言ってる」

「たまたま、つてことかよ」

カナメはチャチャイとナイの視線を受けて、ため息をついた。

ビビビビビビ、と鳴り響く目覚まし時計に、カナメは目を覚ました。あくびを一つして止めようと手を伸ばす。その手に何も触れないうちに、音が止まった。

「……んあ？」

「――」

すぐ隣から聞こえた声に、カナメはぼんやりとしたまま思い出した。ナイは何を言ったのか、また布団に潜り込んでカナメにぎゅっとしがみついた。

カナメはそれを無視してむくりと起き上がった。

「うら、離せ。もう起きるぞ」

少女は今度は頷いてそれを受け取り、かつかつと皿を鳴らして食べ始めた。さすがにスプーンはちゃんと使えている。カナメはようやくほっとして自分の食事を再開した。

自分の分は、あつという間に食べ終わってしまった。元々食べるのは早い方だし、今日はいつもの半分しかないのだ。正直、全然足りない。追加を買いに行きたい。

「おい、食ったら出てけよ」

スプーンで皿をかつちやかつちや言わせている少女に釘を刺す話しかけられた、と気付くや少女はぱっと顔を上げたが、何を言っているのかは理解していないらしい。にこーっと笑って何か一言言うと、またスプーンを口に突っ込んだ。少女が言わんとしたことはさっぱりわからないが、こちらの意思も伝わっていないのは明白だ。

片付けたら首根っこを掴んで放り出すか、と考えていると、ドアが控えめにノックされた。そのノックの音に、カナメは膝を打った。こいつがいた。

「おう、どうしたチャチャイ」

ドアを開けると、立っていたのはカナメより頭一つ背の低い、東南アジア系の若い男だった。隣人のチャチャイだ。短く刈り上げた頭に鋭い目つきの無表情と、見た目はかなり怖い。その彼が、近所のコンビニのビニール袋をぬっと差し出した。

「おはよう、カナメ。廃棄の弁当、もらった。食う？」

「おおマジか！ サンキュー」

ちょうど腹が鳴りそうな状況である、カナメは一も二もなくビニール袋を受け取った。じゃあ、おやすみ、と礼儀正しく挨拶をして背を向けたチャチャイを、カナメは慌てて呼び止めた。

「さあ」

「おいおい！」

と、玲韻さんはあつさりしたものだ。

「それは聞き捨てなりませんね」

これだけの人数を集めて怪しげな事をやっている大前提が崩れてしまう。

「怖い顔しないの丈司君。アリス・シュテンバース博士の警告に従って調査してみたら、クロヒメ全員がこの街に集まっている。

その過程であなた達のひととなりは知ることが出来た。でも一人については尻尾はつかめたものの、とある宗教組織による隠蔽工作の壁に阻まれて近づけなかった。そして最後に、まるで異常を感じさせないのが一人残ったのよ」

「んー？」

首を捻る麻緒嬢。

「それだと一番怪しくないんじゃないの？」

「いや、納得した。明日香と同じようなのが平穩無事に生活できるはずがないからな」

クロヒメは皆、傑出した容姿と能力を備えている（一部例外はあるが）。ならばよい意味でも悪い意味でも、平穩無事な生活など遅れようはずがない。

「目立てば目立つだけ、否応なしに集まってくる大小のトラブルを解決する必要があるし、如才ない樹菜嬢でさえその形跡を完全には消し切れていないという。だが、自然の摂理と自らの特殊能力を熟知した上で行動し、より精密に歴史をコントロールしたならどうだろうか」

「まあ、そんなところ」

「ちょ、ちょっと待て。来たついでにちょっと手伝ってくれ」

「手伝う？ 何？」

「あのガキの言葉わかるか？」

チャチャイがぬっと部屋に入ると、何事かとこちらをうかがっていた少女はびくっと身を震わせた。

「カナメの子供？」

「な訳ねーだろ。朝、ドアの前に倒れてたんだ」

「ドアの前に、何？」

「あー、寝てたんだ。帰ってきたら、いた。俺が連れて来たんじゃない」

チャチャイは片言の日本語を話すが、早口で少し難しいことを言うと、聞き取れないことがしばしばある。言い方を変えたり身振り手振りを交じえたりするとわかってくれるので、大して困ったことはないのだが。

今回もちよっと言い直しただけでなんとなくわかったらしい。

「どうする？」と改めて訊いた。

「まず、こいつの言葉わかるか？」

そう訊いておいて、少女に向き直る。チャチャイと話している間に、ご飯粒の一粒まで食べきったらしい。

「……きれーに食ったな」

「――」

「オー、――」

カナメに何やら答えた少女の言葉を一言聞くなり、チャチャイは横から割り込んで話しかけた。チャチャイの言葉に少女は素直に驚いて、「エ!?――」と言葉を返す。そのまましばらく、異国の言葉でのやり取りが続き、カナメは暇つぶしに少女が食べ終え

「自然すぎて不自然なのね。なら警戒が必要だったのは同感かな」と、樹菜嬢が同意。

一同の表情を見回してみると、拙い説明ではあったが感覚的には納得してくれたというところだろうか。

そこに申し訳なさそうに顔を出した貧相な顔。

「あのー、お忙しいのは分かりますが、ウェイトレスが全員がバックヤードで密談というのはちょっと」

「おっとっと、仕事回らないわよね、こりゃ失礼」

頭を掻く玲韻さんin喫茶店制服。

「いや、むしろ暴動が起こりそうな勢いです。男性スタッフのみでは收拾困難なので、一刻も早く顔を出していただけると大変有り難いのですが」

丈司は大輔や楼蘭、麻緒ともに窓際のリザーブ席についた。

ここは通り向かいを持統的に監視できる絶好のポイントになっている。

本来であれば、だが。

「満員御礼、だな」

商売つけを忘れてないと言うだけある。これなら大人数を雇っても収支は大きく黒に振れるだろう。

だがいささかやりすぎの感もある。

店内にあふれる客、客、客。

響きわたる歓声あるいは怒号、あるいは奇声。

人いきれて紅茶やコーヒーの香りを楽しむどころではない状態だ。

ブラインドの隙間から覗けば、歩道を埋め尽くす行列。そしてダフ屋の姿がちらほら。向かいの呉服店の看板はなんとか見えるものの、入り口は見えたり見えなかったり。

「いやー、かわいいウエイトレスさんハアハア」

うちのテーブルの騎士王様まで、目的を忘れて写真撮影に励んでいる始末。スタッフ腕章と撮影中看板まで用意する準備のよさ。

「キリマンジャロとモカスベシャル、お待たせしました」

「っひょー、お待たされましたですよ！」

「待った待った！」

「無闇とウエイトレスにお手をお触れになりませんように心からお願い申し上げます」

「ひゃっひょー！」

睡蓮嬢の手を取ろうとして手首をねじり上げられ、歓喜の声を上げる者達がいれば、

「ご注文を承ります」

「お姉さんをください！」

「申し訳ございません。お姉さんはただいま品切れ中となっております。バカ学生はバカ学生はらしく、身の程をわきまえていただけませんか」

「はっ、はひい！」

樹葉に冷静に罵られて喜ぶ者もいる。

「ダージンおまちどうさ…あっ!？」

ずべしっ。ばしゃっ。

「あっちいいいい！でも気持ちいい！」

何もないところで明日香が転ぶのはいつものことだが、宙を舞ったトレイと紅茶を頭からまともにかぶって喜ぶ者がいたのは予

の突き当たりにこちらを向いて作ってある。その前に、ドアに体当たりでもしたような格好で倒れている人影。

朝日に照らされたそれは、確かに日本人にしては肌が浅黒く、やたらと手足が細く、髪は目を閉じて刈ったように散切りに短く、服は生ゴミの中から引っぱり出してきたみたいに薄汚れて、おまけに袖の長いＴシャツの前が景気よく破れていた。

カズが妙に歯切れの悪い言い方をしつつ、女の子ときっぱり言った理由がようやくわかった。

「おい」

歩み寄って、声をかけてみる。そのまま二、三度声をかけると、もぞりと頭が動いた。ひとまず、めでたく生きていてくれた。地面に両手についてゆっくりと目を上げた少女は、カナメをじっと見た。顔立ちは明らかに日本人ではない。短いと思っていた髪は、上になっていた右半分が短いだけで、左半分は肩を覆うくらいの長さはあった。Ｔシャツの破れ目からのぞく、緩くふくらんだ胸元や腹には、浅黒い肌にもわかるくらいの傷痕がいくつも残っている。

カナメは大体の事情を察して、ため息をついた。少女の表情がわずかに曇った。が、それよりもわずかに早く、カナメのため息に応えるように少女の腹がぐきゅるー、と鳴った。

カナメは思わず手に提げた袋に視線を向けた。

買ってきた弁当を台所で開けて、中身を半分皿に載せた。ご飯だけ別にして、おかずは適当に積んでいく。多少ソースが混じるかも知れないが、それを気にするような育ちはしていないだろう。小さな冷蔵庫から烏龍茶を出して、二つ並べたコップに注ぐ。箸

想外だった。

即席フロアチーフとして適材を適所にあてがっているのは玲韻さん。魔法としか思えない手腕だ。

いやこまで都合良く事が進むというのは、実際にはさんざんドリフトして最適化した結果なのかもしれないが。とすれば魔法と同じか。

「なんだこりゃ。チーフのおまかせ喫茶かよ」

楼蘭嬢の言うように、随分と特殊な喫茶店になってしまった感がある。特殊な趣味の客の巣窟だ。

「しかもあの制服は犯罪的だな」

さしもの大輔も木石ではないとみえ、頬を掻きつつ目を逸らしつつもそんな感想を述べた。

大司としてもクロヒメたちの姿が魅力的なのは認めざるを得ない。

ゴスロリとメイド服の折衷のようなデザインで、赤のリボンやフリルが多数施されている。全体的な雰囲気は統一してあるだけで、個々人にあわせてデザインを違えてあるものを制服と呼んでよいのならば、だが。

この制服はなんと、斗流十家においてサポート役を務める宮藤家の跡継ぎ姉妹の手に成るものという。玲韻さんの裏で糸を引いているであろう師匠の本気具合が分かるうというもののだが、いささか気合いを入れる方向を間違っている気がしないでもない。

実際その威力は大したもので、萩本店長は嬉しい悲鳴を上げっぱなしだ。開拓された客層には疑問を感じないでもないが、辛うじて保っていた喫茶「ハニーポット」が二日目にしてこの大盛況となったのは喜ばしいことであるし、労働(?)して他人に喜ば

は前に使わなかった割り箸が残っていたから、それを出す。

ちょこんと座った少女の前に、皿とコップと箸を並べてやる。

自分の分も向かい側に置いて、どかっとな腰を下ろした。

「食えよ」

「――」

少女は目をぱちくりさせて、初めてしゃべった。無理だろうと思いつつも日本語か、せめて英語を話せないか、と期待していたのだが、予想どおり何と言っているのかさっぱりわからない。少女を連れてきた誰かは、仕事に必要な言葉まで教える手間はかけなかったのだろう。カナメは面倒になって、自分の分の鮭を一口かじって、お前も食え、と身振りで促してみた。

「――!」

ぱっと笑顔を浮かべて、たぶんお礼か何かなのだろう、言った少女は、いきなりとんかつを指でつまみ上げると、かじりついた。それを置いて、今度はご飯をひとつまみ、少し丸めてから口に持っていた。手に残ったご飯粒をぱくりとくわえたところで、カナメはようやくはっとした。

「お、おい待て。何で手でいくんだよ。箸使え、箸！」

割り箸の袋を破いて、ぬっと突き出す。少女はいきなり目の前に箸が現れてびっくりと身を震わせたが、カナメの方を見ると、困った顔で首を横に振った。

「……使えねーのか。しょーがねえな……」

カナメは箸をしまうと、台所からスプーンを持ってきて、差し出す。

「こっちなら大丈夫だろう」

「――」

夜と朝の合間の時間に、カナメの仕事は終わる。着替えて帰る頃にはすっかり朝に変わり、遠いところで働いているらしいサラリーマンや朝練に向かうジャージ姿の学生とすれ違う。

電車に揺られること二十分。駅前のコンビニで朝食の弁当を買って、繁華街から少し離れたところにあるアパートに戻る。食べて寝て、夕方に起き出して少し遊んだらまた仕事。そんな昼夜逆転生活を送ってそろそろ一年半が経っていた。朝の強くはないが眩しい日差しに目を細め、時折吹きつける張り詰めた風に肩をすくめる。もうすっかり冬になっていた。寒いのが苦手なカナメはそれだけで気が滅入ってくる。アパートは安普請ですきま風が入ってくるから、なおさらだ。

「エアコンとかある家に住みてえなあ」

部屋の片隅で頑張ってくれるハロゲンヒーターを思い浮かべて独りごちる。無いよりマシなのは間違いないが、限界はある。部屋に誰かもう一人いれば違うのかもしれないが、生憎そんな当てはない。同僚に馬鹿にされるわけだ。

アパートの入り口で詰襟にピーコート姿の大柄な高校生とすれ違う。同じアパートに住む唯一の学生で、大体この時間にすれ違う。

「はよっす」

「あ、カナメさん。おはようございます」

折り目正しくそう言って、頭を下げる。カナメもそれほど背が低いわけじゃないが、彼のシルエットにすっぱり隠れてしまうく

れる(?)という経験は、明日香にとっても得難い何かとなるだろう。

だが、本来の目的の方の妨害になってしまうようでは、それこそ何をやっているか分からない。

通りいっぱいに大勢の客がひしめき合い、歩行者天国の様相を呈している状態となれば、喫茶店のアルバイト店員と常連客の立場で、呉服店「あまむら」と履物店「くさの」を自然に監視するという目論見はかえって困難となった。

こんな派手なまねをせずとも、普通に隠させてもらった方が確実だったのではないか。

といっても後の祭りだが。さおり師匠のやることにはケレンミが多すぎるとかねがね思っていたが、玲韻さんも同じタイプだったか。

この喫茶店はターゲットの本拠に程近いと同時に補給・回復の機能を備えており、拠点としての利用価値は今もって高い。

人垣は十分な監視活動を阻害すると同時に、こちらの出入りを隠すための隠れ蓑ともなりうる。災い転じて福となす、といったところだ。

二人が学校に居る間は同級生がなるべく近くから監視、は変更する必要はない。

その他の時間はここを基点に、巡回・監視班を編成して対応する他ないだろう。

玲韻さんに計画の修正を進言したいところだが、フロアチーフとして多忙そうな彼女の邪魔をするに忍びない。客がある程度捌けてからにするか。

らしい体格差がある。頭を上げると、見下ろされるのだ。いつものように見上げた彼は、少し戸惑ったような顔をしていた。

「ん、どうしたカズ。なんかあったんか」

「いえ、その……」

カナメを含め、アパートの住民からカズと呼ばれている彼は、言い淀んだ。

「カナメさんの前に人が倒れてるんですけど」

「んあ？ 人？」

「はい。外人の女の子です」

「外人？」

「はい。なんて言うか、南国系というか、そんな感じの」

はつきりしないことを言って、カズは会釈を一つして学校に向かった。眉を八の字にしたカナメは、とりえず自分の部屋の方を見た。一階の一番奥の部屋の前に、確かに人が倒れていた。

近づいてみながら、カナメの頭にあったのは、生きてくれよ、という一点に尽きた。部屋の前に死体が転がっているなんて面倒以外の何者でもない。警察沙汰は御免こうむりたい。

「……ってかカズの奴、あんな顔してさっさと見捨ててんじゃねえか！」

さいてー、カズくん冷たい、とかなんとか呟きながら、恐る恐る現場、もと自室に向かう。カナメの部屋は二階の一番奥。角部屋、といえば聞こえはいいがこんなボロアパートに角部屋もくそもない。部屋のない方の壁に洗面所と風呂場と押し入れが並んでいるのだから尚更だ。

「……ホントに転がってるし」

他の部屋は廊下に面している玄関が、一番奥の部屋だけは廊下

「レジのフォロー入ります。アスカちゃんは3番テーブルにお冷転んでも水かけてもオーケーというかわしろかけてあげて」

いやもう、嬉々としてウェイトレス業に精を出している。表情も生き生きして、水を得た魚のようだ。

商工会で辣腕を振るうよりも、こっちの方が天職なんじゃないだろうか。

もしや、子供のころの夢を叶えたとかいう訳ではなからうな、と穿ったことを考えてしまうが。

まさか、な。

彼らが作戦を開始してから二週間を数えた頃のこと。

巡回班は、丈司と大輔に、楼蘭・樹菜組。本来なら明日香も同行するはずだが、隠密行動にまったく向かない上に夜に弱い彼女は玲韻さんに任せる事にした。

まったくといっていいほど動きがなかったサブターゲットに対応する監視班は、「ハニーポット」に泊まり込みでの交代制になるだろう。

ここ数日、ターゲットは日中はサブターゲットをつけまわし続けていた(例によってドリフトでの往復だ)。

一方で、夜間の単独行動もまたお決まりの日課であるようだ。天叢渚沙は決まって二十三時に二階の窓から脱出。その後まるまる一晩かけて珠坂市じゅうを巡る。

物陰、裏道。殊更に危険そうな場所をはしごする、真夜中のお散歩だ。

そして朝にはお散歩の事実は無かったこととされ、ちゃんと部屋で就寝したことになっている。

大輔の話を信じればそういうことになる。が、目的の方がさっぱりだ。

それでも、推理ぐらいはできる。

日中の彼女の行動は、警戒だろう。相棒となる草野建流の周囲の状態、安全を確認していると考えるのが無理がない。

夜間の行動についても、パトロールと解釈するのが簡単ではある。しかし草野建流という少年の控えめなメンタリティーからして、夜の街を歩いて危険にさらされる可能性は低い。クロヒメの力で彼を守りたいのなら彼に同行すれば済むことだ。

考え方を転換する。

問題がないことを確認する、のが目的でないとすればどうか。すると次第に嫌な考えになってくる。

ほら、やっぱりおいでなすった。

おぼつかない足取りで路地裏をゆくターゲットに歩み寄る、覆面にジャージ姿の人影二つ。

遠目にも友好的とは言えない態度の二人が、天叢嫌の退路を塞ぐ。

ヒーロー体質の大輔が早々と介入をはかろうとしたが、丈司はその肩をつかんで制止する。

まだだ。

樹菜嬢もまた、賭け出そうとした樓蘭嬢の行く手を阻んでいる。さすがだな。

あんなのにクロヒメをどうかできるとは思えない。むしろ、行動と手の内を確認する願ってもない好機といえる。

一乗り越えられなような高さの窓を見上げてと伝える。頷いたのを確認して窓によじ登り手を差し出した。

窓から外に降り立ってから敷地の外に出るまでは思っていたよりも簡単に出ることができた。

外に出たことの達成感と、変わらず生ぬるい空気。

どこまでも行けそうな気がしていたけど結局連れ戻されることになった。

この後いったいどうなったのか今は全く思い出すことが出来ない。

後ろ流れていく街灯が星のように見える。生ぬるいはずの空気も窓から勢よく入って心地いい。濡れた目元に風があたって涼しい。きっと明日になれば外に出るのが恥ずかしい顔になっているのだろう。

たいした距離を走った訳じゃないけど、知らない道を走っているとこれまでの自分から切り離されたような感覚がある。

「脱出成功だね」

助手席の方を見ると彼女が座っていた。あの頃と全く変わっていない容姿とあどけない笑顔。明日になれば、現実を追いつかれるのだから今夜は出来るだけ遠くに走っていききたい。

そう考えたのだが。

しかし、丈司はこの時の甘すぎる判断をすぐに後悔する羽目になる。

「『珠坂大学附属紫城学園高等部一年、後口慎一。こいつは倉梯二郎。草野はうかつ、あいつの女は人質に最適。樋口サンも喜びだし俺たちも役得でラッキー』」

隠したはずの正体と内心をべらべらと暴露する鏡写しの自分に困惑を隠せない襲撃者と、その連れ。

「なっ、なんだコイツ!？」

「しらねえよ!しるわけねえよ!」

相手の姿をコピーすると同時に思考を読み取る。天叢渚沙自身の能力というよりは、彼女に付き随う環境精魂の仕業か。

自分を撒き餌にしてバートナーの敵対者を誘い出し、情報を吐かせる。それこそがこの散歩の目的だったわけだろう。見た目は弱々しいが身を守る力は十分に備えた彼女たちならではの作戦といえる。

ドッベルゲンガー(?)の姿が揺らぎ、ひずむ。色が抜け、突起物が吸収され、昔映画で見た液体金属ロボットののような金属光沢のあるヒトガタに変ずる。いや、こちらこそが真の姿だろうか。同時に、後口という少年もまた、より戯画化されるように変形していく。弓でもやっているのか上半身中心に筋肉がつき腕が長い体型がより極端に、いかつい顔が人間離れた怪物っぽいものに。背筋は曲がり、犬歯は鈍く黄色い牙に、爪は厚くねじ曲がった鉤爪に。

同時に、倉梯という少年の姿も変じている。こちらはもともと長い足がアンバランスなまでに長く伸び、細面は肉がけて骸骨

志望動機がなんだ、エントリーシートがなんだってんだ、履歴書なんて破り捨ててやる。

もう我慢の限界。新調したリクルートスーツもすぐ使わなくなるからもったいないよね。なんて考えていたのに六ヶ月で三回のクリーニングを乗り越え、梅雨の時期を過ぎることには自分の一部なんて思えてきた。

まあ、実際はそんなことは全くなく、黒いんで暑いし、ピッタリしてるから動きづらいし、てゆうか世の中の会社員のスーツ率を考えたら就職活動の時だけなんでこんな服を着てるのかしらそんな戦友を思いつきり床に投げつけて、それから思い直してフアブってからハンガーに掛けた。

メールをチェックしても「お祈りしております」の文字だけが流れていった。本当に祈ってるかってメールを送る人事の人の気持ちになってみようと思像してみたけどあたりまえに無理。

「言いたいことはわかるけどさ、結局これまでの努力が足りなかったんじゃないの」

わかって欲しくて彼氏に電話しても、以前は「がんばればなんとかなるよ」「次があるよ」って言ってくれたのに

今はこんな投げやりのセリフ。そういう事じゃなくて気持ちを分かち合ってたんだよ。

「そーなの？ わかったわかったから、もう俺眠いからねるね」

電話が切れるおつっという音が聞こえて、自分の中の気持ちも切れた。自分の周りのものが自分を拒否していくような感触、そ

じみた面相に。バッタかナナフシのように痩せてゆく。

タイプは違うものの後口同様に病的を通り越して吐き気すら催す姿。

二人の襲撃者は、野生生物の洗練とはほど遠い、進化の道筋を逆行しつつ妙な袋小路にでも迷い込んだような異様な生物に成り果ててしまったのである。

“なるほどきやつらの腐れた性根に相応しい姿であるな”

少女の足下からくぐもった声。

「今度は手長足長かぁ。ゴリラとガイコツの凸凹コンビだし、ぴつたりだ」

“あわれな獣とはいえ、いずれは臣民に危害を加えよう。このまま捨て置くわけにはゆくまい”

またか！

影から沸き上がるように現れた黒い石鎧の巨人。

全体のシルエットは武人の埴輪じみており、面頬の額には七色に鈍く光る曲玉が収まっている。

この巨人にしても正体はまるで分からないが、現時点で丈司に言えることは、

「性格も頭も悪そうだし、いらないよね？」

“さよう。まさに世界の残滓、排除すべき害悪なり”

実体として具現化した、暴力の塊であるということだ。

少女の体から抜き出された長剣が巨人の手に渡るに至り、丈司はそれを確信する。

「死罪」

「死罪」

“死罪”

れを吹っ切るように逃げ出したくなった。リクルートスーツのポケットから鍵を取り出すと車に乗って外に飛び出した。

「夜中に逃げたそうよ」

小さい頃に入院していた病院。そう言い出したのは友達と自分のどちらからだったろうか。朝起きたらすぐ運動、好きな物を食べられず、毎日の注射そんな日常。本で読んだりテレビで見ている同世代達との生活の違いは諦めていたけど、ここから出てくることが出来れば変わる、そんな希望を持っていた。

決行は夜寝静まってから。ここではみんな決まった時間に眠くなる。それに逆らうために少しずつ生活のリズムを変えていた。

ご飯を食べる量を減らしたり運動の手を抜いてみたり体調が悪いふりをして注射を避けたり。試行錯誤の結果ようやく夜更かしの環境を整えたのだ。

窓から差し込む明かりが月が満ちていることを告げている。廊下には点々と電灯が灯っていた。夏の日差しで暖められた空気は暗い夜に冷やされつつも生ぬるさを残していて、染みついた消毒液の臭いがそれを引き締めようとしているかのようだった。

「いくよ」

出来るだけ小さい声で伝えたつもりだったが意外と廊下に響く声に驚いた。

「うん」

かすかに聞こえた声と同時に握られた手がすこし濡れていて緊張を伝えていた。出入口が開かないことは想定していた。狙いは街頭に照らされる中庭に面していないトイレの窓。

「上から引き上げるから先に登るね」

黒衣の少女と金属のヒトガタと石鎧の巨人が唱和した。

前言撤回。餌にはしっかり釣り針が仕掛けられていた。むしろ釣り上げて駆除が目的だったか。

クロヒメであれば何らかのトラブルは必発。おそらくは異変を感じさせぬ程度に密かに隠蔽活動を行っているとばかり思いこんでいたが……ここまで直接的な力行使していたとは予想外だった。

後口であったものと倉梯であったものは甲高い悲鳴を上げながら逃走を図ったが、

巨人はその巨体に似合わぬ身軽さを発揮、一息に二人を跳び越すと、振り向きざまの一刀でまとめて斬り払う。

おそるべき切れ味と同時に大きさ相応の厚さも備えている大剣は、バッテリーでも切り分けるように二人を両断するとともに、四つの断片をブロック塀に叩きつけていた。それぞれの断片は暫くの間なおもうごめいていたが、やがて完全に息絶えたか動きを止めた。

これはまずいな。

大輔を背中にかばい、押し出す。

それとはほぼ同時に、少女の流し目がこちらを捉える。

「何のつもりだよ、丈司さん」

表情は見えないが、ヒトガタと巨人もまた首をこちらに向けている。

目撃者を逃がしてくれるつもりは、無いのだろうな。

「いいから行くんだ。君さえ残れば何とでもなる」

「……分かった」

この時、天恵のように閃いた。こいつらの正体は……

サナギに瞳に宿る強い力が、急に抜けた。

「そうか。タケルちゃんには私は必要ないんだね」

「これから、早合点するな。別にサナギを蔑ろにしたいわけじゃない。力を借りたいことは夢を叶えた後にも幾らでも残ってる。だから今は頼りないかもしれないけど、少し離れて見守っててくれ。ついでにサナギも成長すれば、きつともっと役にたつようになるから」

すでに中学生に見えないというのにそれ以上成長してどうするんだ、という話もあるが。精神的な話ですよ、念のため。

ともあれ、これで言うべきことはすべて言った。あとはサナギ次第だが……

「……わかった。タケルちゃんがそう言うなら、しばらくは見ているだけにする」

さすがは中学生！いや、こいつも成長してるんだな。しみじみ。

そして、一瞬遅れて大盛り上がりになり盛る店内。いや店外までも波及していく異様なハイテンション。

二人ともたちまちもみくちゃにされる。

「よく言った！」

眼鏡のお兄さんに肩をぽんぽん叩かれた。

「感動しました」

背の高いボニーテールのウェイトレスさんに抱きつかれた。いや、眼鏡お兄さんの視線が怖いっす。

「愛だね、愛」

眼鏡の女の子にはっぺたをつつかれた。

榴弾。特殊部隊が建物突入時に使う、殺傷力より感覚麻痺を狙った手投げ式の爆発物。闇に順応していた目に対してはさらに効果的だろう。

それが戦闘の号砲となった。

目を開けた丈司の視界に、巨人の頭を半球状に囲むように宙を舞う無数の爆発物が飛び込んできた。

シンプルな球形のものはじめ、板チョコのような切り込みの入ったバイナッフル型があれば、木の取っ手のついたポテトマッシュャー型、挙げ句の果てには飯盒型の対人用地雷まであわせて十個以上。

おそらくは樹葉が投擲したものだ。その彼女自身は巨人の体が盾になる位置にまで迫っている。

まるで仕掛け花火を思わせる、一繋がり連続する爆発音。それが途切れた瞬間に大きく後退して間合いをとる樹葉。

ゴング直後の一方的なラッシュとそれに続く一撃離脱。突っ込みを入れない気持ちもあるが、まずは素直に賞賛したい手際と身のこなしだった。

なお巨人に致命傷を与えるにはいたらなかったようだが、既に大輔を追い始めていた巨人が脅威と見なして目標を切り替えるには十分な攻撃であったようだ。

“ふむ。議長殿ならば不足無し。この八坂がお相手つかまつろう。ぐおっ!?”

一歩踏み込んだ巨人を、アスファルトと同時に吹き上げる爆風が半ば浮き上がらせる。上手い。

対戦車地雷なんてものをどこに持っていたかは気になるが、こ

「その心意気、天晴れだと思うよ」

「はげしく同意」

金髪と黒髪のウェイトレスさんに、交互にぐりぐり撫でられた。「格好よかったぞ、少年」

派手派手な女の子に、親指を立てられた。

「そこまで言ったからにはちゃんと責任持てね」

蝶の髪飾りの小柄なウェイトレスさんに背中を叩かれた。

「君はもう勇者に等しい」

ニット帽の男の子から大袈裟なコメントをいただいた。

「この女たらし。かっこつけてるんじゃない！」

吊り目の小柄なウェイトレスさんに優しく罵倒された。

「ヒロ君ともども、肝に銘じます。ありがとうございました」

入り口で客整理をしていたツインテールのウェイトレスさんになぜか感謝された。

「うおーん、うおーん、うおおおーん」

萩本さんに、号泣された。

その他諸々、店中からよく分からない祝福を受けて。

忘れかけていた夢への第一歩として、ローカルなちよとした一番を目指すのも悪くないかと、建流は思い始めていた。

ハッピーエンドと言っているだろう。そこまでは意見が一致するところだ。

だが、彼らが身を置き続けてきた物騒な分岐の数々は、投入された労力と共に、正しい（？）歴史の影へと消え去った。

確かに最高の終わり方ではあるのだが……関係者にとってみれ

こで詮索しても意味がないな。

まあ、あれならしばらくは任せておけるだろう。

「あいつ、魔法の剣じゃなかったのかよ。それがなんで爆弾魔？」
楼蘭の意見には激しく同感だが。この状況においてそんなことは些細な問題だ。

制服の背に隠していた木刀を抜きつつ、問う。

「さて、どちらがお好みかな？」

「正直、どちらも遠慮したいし、やるならフクロに限るんだけど」

スカートの下に隠していた伸縮式の警棒を伸ばしつつ、楼蘭は心底嫌そうに答える。

「選択するには及ばなかったみたいよ」

剣を宿らせる女子中学生と、わけの分からない鏡のパケモノ。どちらがより貧乏くじであったかはわからない。

「各務、そちらは任せるから」

「御意」

ともあれ、丈司が目をつけられたのはヒトガタの方であった。

鏡色のヒトガタはたちまち丈司の姿へと変ずる。

「まさかあの鏡がこんなところで人殺し稼業とは。陛下と宮内庁のお役人が嘆くぞ」

「ほう、どうして分かりました？」

丈司の声で若干の驚きとからかいをこめて答える、各務。

「わからいでか。と言いたいところだが。残念ながら気づいたのは曲玉が先だった」

「ふふふ。『どこまで僕の技をコピーできる？気闘法は使えるのか？』。さあ、どうでしょうか。『こんなのがいると分かっていた

らカラーボールでも持ってきたところだが』。なかなか良い着眼点です。『血液をかけて力を封じられないか?』。『やりにくいなまったく』。そうでしょうねえ」

これは、なかなか腹が立つな。

「ふうむ、鬼には落ちませんか。物言いはともかく、見た目同様中身も真っ直ぐ。さすがは守護聖人の属性を宿すだけのことはあります」

個人情報も筒抜けか。まったく気分が悪い。

「しかし惚れた相手にはついついぶっきらぼうに対応してしまう意外とツンデレなところがあるのですな」

「やかましい!」

怒りを抑え、斬り込む。体は常日頃の訓練通りに動いている。問題ない。

が、各務はすべての打撃をぎりぎりのところで回避する。

「おっとと危ない。ふうむ、この程度では逆上はしませんか」

反射神経ではない。コピーした丈司の体から得た情報で、行動を予測しているのだ。

しかも身のこなしまで同じとは。気味の悪いやつめ。

「ところで、これは個人的な疑問なのですが。どうして彼女を抱こうとしないのですか?」

「……なっ?」

そう来るか!?

ついにとこんプライベートな情報までほじくり出してきた。

「相思相愛、両親にも友人にも祝福されたカップルで、既に婚約もちゃんと取り付けているのですよ。さすがに学生ですから子供

が出来ないようにすべきでしょうが、そこだけ守れば誰に憚ることもないでしょうに」

「あんな子供に手を出せるか!そちらの主人と同じで、体だけ大人で中身はガキそのものなんだぞ」

「肉体は精神に影響を及ぼすものです。私が言うのだから間違いありませんよ。私の皮肉な物言いが気に障るなら、それは自己嫌悪というものです」

性格最悪だ。こいつ。

女性陣の相手にならなかったのは幸運だったのかもしれない。自分の秘密を聞かれるのも腹立たしいが、むしろ友人の秘密を聞いてしまう方が心苦しい。

「そんなに嫌われるのが怖い?生物としての生理を無視して童話のお姫様扱いですか?そちらの方がよほど嫌われますよ。あ、それとも人には言えない性癖があるとか……検索検索」

「……いい加減にしろ!その慇懃無礼な口を二度ときけなくしてやる!」

「うっわーえげつな!。あんたのお仲間タチ悪すぎ」

楼蘭はいくつもの意味で呆れかえっていた。

あの冷静沈着な聖者様を口喧嘩でキレさせるとは。

お膳立てが完全に整ってるのに手出ししなかったという情報にもびっくり。うーん。あの二人だから当然のようであり意外でもある。

スクラ姫みたいのが無警戒にじゃれついてきたら下手すると同性でも危ないと思うが、さすがの自制心、さすがの聖者様とだけ評しておくことにしよう。

「そんなの聞きたくない」

ふいと窓側を向かれしまったにもかかわらず、プレッシャーがほとんど変わらない。すなわちさらに機嫌が悪化中。

ああ、今からやるのは自殺行為かも。

「いいから聞けっての」

ほっぺを挟んでこちらを向かせる。

おーっ!

ウェイトレスさん達の目が光る中、控えめな歓声があがる。

残念ながらお約束通りには行かない。だって相手は中学生だよ?

痛みさえおぼえるほどの強い視線を真っ向から受け止めながら、囁んで含めるように言い聞かせる。

「小さな子供の頃に無邪気に思ってたほど簡単じゃないってのはわかってる。でも諦めるつもりもないんだ」

「だから渚沙が手伝うって言ってるのに」

「申し出はありがたいし、そういう志は尊いものだと思うよ。正直僕には勿体ないとも。でもそれじゃ夢は叶わないんだ。我に七難八苦を与えたまえだったっけ、そんな事を祈ったお侍がいたら?いつも先回りして僕の苦難を取り除いてくれる人がいたとしても、僕の経験は増えないし成長にもつながらない。サナギやその他の多くの人の力を借りてただ偉くなったとしても、それだけじゃ立場に相応しい僕にはなれないんだ」

「相応しいとか相応しくないとか関係ない。誰にも文句は言わせないよ」

「まだわかんないのかな。僕自身が満足しなければ、夢は叶ってないのと同じなんだ……」

「あーもう、外野うるさい!」
ドスドスドス
ブーイングを發した客達が黒衣のウェイトレスさん達に当て身や手刀を入れられては連れ去れていくのを横目に(なんて店だ)、不機嫌メーターがレッドゲージ目指して突き進むナギサとの対話を試みる。

込むようなのは失礼だと思った。だからこそ、僕がどれぐらい本
 気か示したくて、今日はこんな格好で来たんだ。少しぐらいいは伝
 わってたら嬉しいんだが」

たっぷり伝わりました。の気持ちを含めて、建流は深々と頷く。
 さすがはあの詩紀姫が傍らに置こうとする人間だ。この人は尊
 敬の対象に、先輩として見習うべき対象に値する。

かつて一度でも人の上に立とうと誓いながら、状況に流されて
 ばかりであった自分が情けない。

「よく考えて決めてほしいけど、締め切りが三日後なんだ。出る
 にしろやめるにしろ、それまでに教えてくれると嬉しい。あ、こ
 れは連絡先ね」

五ヶ瀬先輩が去って。

覚悟を決めるために十分ばかりの間天井を眺めた後、

「よし」

建流は幼なじみの少女の家、隣の呉服屋を尋ねることにした。

「たのもー！おいサナギっ！」

「んーと、勢い込んでるとごめんさいね。渚沙ちゃんならお
 向かいの喫茶店だから」

店番していた絹さんに行方を教えてもらったが、折角盛り上げ
 た気分がいささかなりとも減衰したのは間違いなかった。

サナギめ、いらん時にはストーカー同然にまとわりついてくる
 のに、こっちらから搜すとなかなか捕まらない。猫みたいなやつだ
 よ。

そして、すごい行列にまたやる気をこっそり削られる気になる
 と、

ファッショングラスにボブカットの女性に手招きされているの
 に気付いた。

「ちょっとそこ行く前途有望な少年」

あれ、新川先生？

「どうしてここに」

「そんなことはどうでもいいの」

いいのか？

「あら不思議。こんなところにハニーポッター特別優待券三百六十
 五枚綴りデザートチケットつきが」

パンツのポケットに無造作に突っ込んでいた札束然としたもの
 を、こちらに押しつけてくる。

「行け、少年。今こそ重力のくびきを振り切って、魂の自由を勝
 ち取ってごらんさい」

「いやそれ大袈裟すぎですって」

「たのもー！」

二度目の正直（？）。

ツインテールの可愛らしい女の子に優待券を渡して（ちょっと
 驚いた顔をしていた）店に入った。

一目で見渡せばすぐにわかる。窓際でブラインド越しに外を眺
 めるサナギ発見。

髪も結わずに真っ黒な振り袖着て一人で喫茶店なんて、あいつ
 ぐらいのものだ。

「サナギっ！」

「私今機嫌が悪いんだよ。タケルちゃんに当たったりしたくない
 から、出来れば後にしてほしいかな」

オール青信号でアクセルを我慢する意味があるかは別にして。

下手すると彼女の方が傷つきかねないしね。

でもクロヒメなんてもののメンタリティーが本当に普通の女の子
 と同じかと言ったらかなり疑問がある。

目の前にいるコイツが典型だ。こんな中学生がどこにいる。

「仲間じゃないわ。道具よ」

ほら来た。

「わたしも各務も八坂も。ただタケルちゃんの夢を叶えるために
 ここにいるの。タケルちゃんは至高の地位につくべき人だもの」

どっかの双子が口走ったのと似てるな。あいつらは敵を倒す
 のと守るのだったっけか。

ここで当然の疑問がわいてくる。

「そのタケルちゃんはお前が人を殺して歩くのを望んでるのか」
 いかにも人畜無害なタイプに見えたが……もしもそうならお仕
 置き決定だ。こんな思いこみの激しい子供を巻き込んだそいつが
 一番悪い。

「家を建てたいと思ったら、まず空き地に住んでいる有害な蛇や
 ネズミを追いかけて、木を切って草を刈るでしょう？そこまでい
 ちいち命令されてやってるなんて思われたら心外だわ」

心外だと。

「それにお言葉だけど、私達はこれまでヒトに危害を加えた事は
 一度だってない。さっきだってタケルちゃんの民に危害を加える
 バケモノを退治したの。つまりこの国を良くするために働いてい
 るのよ」

「理屈はそうかもしれんけど、バケモノ予備軍をわざわざバケモ
 ノに変えて退治するのはどうよ」

おとり捜査で犯罪を誘発するようなもんじゃないか。

「良く調教されたライオンなら町中で放し飼いに出来る？中身が
 バケモノだからこそ予備軍なんでしょう？いつ暴れるかわからな
 いような奴らは、タケルちゃんの国には最初から必要ないの。そ
 れに」

「それに？」

「タケルちゃんに悪意を持ってる相手なら、それがヒトでもこの
 手で殺すのに躊躇ない。だって主を敬わないようなのは、ヒトと
 して認められないもの」

信念の程はよく分かった。

目的意識がはっきりしてる。そして普通の少女の思考からは完
 全に逸脱してる。

逸脱した能力故生じた歪みか、それともクロヒメという魂その
 ものが備える性質なのか。

でも他のクロヒメは変わってはいてもこうやバクはない。まさ
 になんとかに刃物。玲韻さんが危険視するわけだ。

「ねえお姉さん。私と一緒にタケルちゃんのために頑張る気はな
 い？もしかして後宮の隅っこぐらいにはお部屋をもらえるかもし
 れないし」

ふうむ。そういう想像が出来るってのは、タケルちゃんとやら
 は恋愛対象にはなっていないのかね？

「もし特別な才能があれば、国の一つぐらいいは預けてくれるかも」
 いや魅力的なスカウトですよほんと。

「だが断る」

「どうして？お姉さんおかしいわ」
 おかしいのは明らかにそっちだ。

「私は世界の半分をもらうより、古生^{こしよ}くんのココロが欲しいのだ」
ふう、言っちゃったぜ。

残念ながら彼はじゅらの奴に首っ丈だけどな。
「なんなら私がうんと言わせるけど。各務と八坂も協力させる。
うんグッドアイディア」

なぜかやたら乗り気になってるな。

変なのに見込まれちゃったよ。

じゅらといい、同性に好かれやすいんだろうか。複雑。

「だがしかし当然断る！」

「どうして？」

「それが分からん奴とはそもそも交渉の余地がないっての！」

よく言ったわたし！

警棒をびしっと突きつけて、決まったね。

「そっか。残念」

スカートのポケットから何か出したな。

ペン？

渚沙はそれを私の警棒よろしくすると伸ばすと、ひゅんと
風を切って振る。

あれって指示棒？

いや、あのしなりは……

釣り竿？

そう、超コンパクトな釣り竿だ。

長さ・強度の点からは、小鰯釣りぐらいにはなんとか使えるか
といったところ。

「剣は貸し出し中だから、お姉さんとはこれで闘うね」

「なめんな。そんなもので何が……」

ここまでくると気味悪いも感心するも通り越して薄ら寒いもの
を感じるな。

「もとの出所が誰かは知らないけど、うちのお姫様からの指令で
ね」

「はあ」

「きたる文化祭のミスターコンテストに出場して、しかも女装で
優勝しろって無理難題を突きつけられてしまったんだよ」

と言って頭を抱える五ヶ瀬さん。

「うわ……それはそれは、ご愁傷様です」

「これを言うのは心苦しいんだけどね、他人事じゃないんだ。二
人ペアのチーム制だから」

顔を上げた先輩は、心底同情したような顔で建流を見て、それ
からため息をついた。

主催者が見目麗しい男子二人組にどういうアピールを期待して
いるのかバレバレだな。まさか漫才やれというわけではあるまい。
そこで女装というのは、あえて裏を掻いて意表を突こうという
作戦なのだろう。

「さおりさんも篤史さんも最初から乗り気だし、初^{はつ}さん終^{はつ}さんは
僕らの意思を確認する前から衣装の準備始めてるし。あの人達に
目をつけられたら、抵抗しても傷が大きくなるだけで無駄なんだ
よ」

「……」

さおりさんに篤史さんというのは、新川家のさおり先生と、そ
の従弟で姫様のお兄さんにあたる人の事だろう。とにかく目立つ
人たちだから名前と顔ぐらいいは知っている。初・終さんといえは
宮藤家の双子に違いない。十家のなかで上位家の秘書係のような

ひゅん。

かすめた電柱に深々と切り込みが入った。

やっぺー。バケモノどもをけしかけてばっかりだから直接的戦
闘力はないかと思っただのに、會長みたいに気で闘えるのかよ。

「気が変わったらいつでも言ってるね」

「とどめ刺す前にもう一回尋ねてくれよな」

「うーん、それだと遅いかも……ね！」

「おっと！」

踏み込みからの首筋への一撃を反射的に受け流す。

おおっ。結構戦えるかも、自分。

……いきなり致命傷狙ってきたよおい。容赦ないなこいつ。

剣道なんてやったこと無いんだけどな。ちゃんと体が反応して
適切に動いてる気がする。

天才か、天才なのか？

それともクロヒメに認められた相棒ってのは何かそういうもの
かもしれないが、この理由はどうでもいい。

とにかく素の戦闘能力は五分五分のよう。

ただしこっちの得物は鈍器、向こうは恐ろしく軽い名刀といっ
たところか。

いや、それでもじゅらの方がハンドゲがよほどでかい。頑張れ
親友。見守る余裕もないけどな。

遠方でまた轟音が響く。今度は一体何使ってるんだあいつは。

舌戦が主体となった丈司・楼蘭の静かな戦いと比べると、樹葉
のそれは派手きわまりなかった。

巨大な剣と拳あるいは足が振り回され。アスファルトをえぐり、

立場にある関係で、うちや隣の呉服屋に時々出入りしているから、
一応顔見知りではある。

「丸め込まれてるか脅されてるかはいらないけど、草野君のご両
親はすでに陥落してると思う。さっきのお店の人何もかも承知
だろうね」

「まさか……」

「あの人達はこういう遊びには本気で全力を尽くすから。こと詩
紀ちゃんを楽しませるためには、ここぞとばかりに権力財力腕力
にものを言わせるよ。彼女を巻き込まれた以上、僕も期待を裏切
れない」

今でちょっと親近感がわいた。

この人は建流と同じような立場なのだ。

「……嫌だと言えはいじゃないですか、お姫様に」

とイヤミな質問をしてみる。先輩はそれが言えなかったからこ
そ、こんなところにいるのだから。

だから、その返事には驚いた。

「勿論一度は言ったよ。恥ずかしいから嫌だってね」

「じゃあ、どうして自分から僕を引っ張り込みに来てるんです？」

「彼女が本気で楽しみにしてるのが分かったから。あの期待に
は応えなきゃならないと僕自身が思ったんだよ。そして、どうせ
恥を掻くからには恥ずかしい結果を出したいだろう？」

……違う。同じ立場なんかじゃなかった。

この人はただ流されるのではなく、交渉と熟慮のすえに自分の
意思で積極的に巻き込まれる事を選んだんだ。

「ペアを組む候補に君の名が挙がったとき、なるほどと思ったよ。
確かに君なら可能性がありそうだと思ったから。でも強引に巻き

なかなか隅に置けませんね。ライバル出現ですかあ？」

「勘弁してよ吉富さん。なんて人？」

「紫城高等部の五ヶ瀬と言えはわかる。凄いとところのお嬢様っぽいですよ」

五ヶ瀬と言えば、珠坂の十家と喚ばれる古くからの名門の一つだ。

「……わかった。応接間にお茶だけ持ってきてもらえろ？」

いろいろと疑問を感じながらも、失礼だけはないようにと居住まいをただす建流であった。

「あの、俺が草野建流ですが」

爽やかな紺色の振り袖を身につけた美人に一礼された。

古代中国の星座をモチーフにした図柄というのは変わり種に属するだろうが、布地の品質の高さは門前の小僧たる建流にもはっきり分かる。

そんなお嬢様が、履物屋の息子を名指して呼び出してくるのは一体どういうシチュエーションか。

物語的には一番ありえそうな可能性こそが、現実的には一番ありえないだろうな。

「何のご用でしょうか？」

訝しげに尋ねると、

「五ヶ瀬七夏と申します。このたびは建流さんに折り入ってお話した事がありまして、いきなり失礼とは存じますがこうしてまかり越しました。申し訳ありませんが、しばらくお人払いをいただきまするか」

彼女の後では、吉富さんがにやにや笑っている。

コンクリートをたたき割り、あるいは風圧でさえも小柄な少女を吹きとばさんとする。

どこから取り出したか両刃の黒い剣一本を片手に、掠めただけで一発アウトの攻撃を果敢にかいくぐり弾き受け流しつつ必殺の攻撃を叩き込んでいく樹菜。

そう、普通なら完全に必殺だった。象でもホッキョクグマでも最初の攻撃が入った時点で死なないまでも無力化できているはずだ。だが、対戦車地雷の直撃を受けてさえも、八坂には決定的ダメージを与えられない。

彼女本来の武器である剣さえ使えれば問題なく貫けるのだからが……同じく黒い剣の攻撃を受け止めるには剣を防御に回すしかない。クロヒメとしての特性により頑強さでは人後に落ちない樹菜とはいえ、この怪物相手に試してみる気にはとてもなれなかった。

装甲の薄そうな顔面にパンツァーファウスト二連発にも耐えたこのバケモノにダメージを与えるにはどうすればよいのか。

「もしかして中まで詰まってるのかしら。大きくて硬くて黒光りして、実にご立派なこと。いい加減に萎えていただけませんか？」

『どうもあまり上品でない物言いのように聞こえてならぬ。実に嘆かわしい』

「それは気のせいというものです」

金属装甲ならば成形炸薬の連発で貫通できないはずがない。八坂の石のように見える黒い鎧は、あたかもセラミック装甲のような性質を備えているのだろう。

となれば、破るには劣化ウランかタンングステンの安定翼^A装弾筒^F

「悪いけど、十五分ほど外してもらえないかな？」

「いえいえ、三十分でも一時間でもどうぞごゆっくり。お邪魔はいたしませんから、おほほほほ」

「いえ、そんなにお邪魔するつもりはありませんので……」

「ご遠慮なさらずに、おほほほほほ」

おほほほほほが遠ざかっていった。

両親が商工会の緊急会合で留守で助かった、とは思えない。吉富さんに知られたが最後、噂は音速の数倍で駆けめぐらる。

出来るだけ早く話を終わらせてお帰り願わねば、あること無いこと尾ひれをつけて近所中に知れ渡ってしまうからな。

自分だけならいいが、余所様のお嬢様に妙な噂を立ててしまつては、失礼だけでなくうちの店の信用にも関わる。

しかも五ヶ瀬だよ五ヶ瀬。極めつけの

その吉富さんが前に言ってたな。今珠坂にいる五ヶ瀬本家の人間は、新川のお姫様の婚約者ただ一人らしいって。

そうそう、ナナツさんとかいう女の子みたいな名前で女みたい綺麗な顔の先輩が……って!?

えっ、えーっ!?

「五ヶ瀬、先輩？」

「単刀直入に言うね。さっきも言ったけど、草野君に折り入ってお願いがあるんだ」

肯定も否定もしない。だが口調がはっきり変わった。

あえて突っ込まないで欲しいのなら、わざわざそんな格好しなればいと思う。

ただでさえ男に見えないお人だから、女装状態で男言葉を使つたところで男っぽく振る舞ってる女の子の子とは思えない。

つき^{ツキ}徹甲弾^{トウゲツパン}による砲撃が最適だ。

しかし。

彼女の「召喚」は火薬を使わない純粋な運動エネルギー弾は対象外であると同時に、初速を与えられず誘導装置も利用できないという欠点がある。

つまりは艦砲クラスの徹甲榴弾を喚んだとしても、発射できないのだから意味をなさないわけだ。

運動エネルギー^Aロケット^K弾^Eは近接発射では加速距離不足で簡単に弾かれ、距離をとれば悠々回避され、ただ周囲のビルにいくつもの風穴を開けただけであった。

われながら、一見便利なようで不便な能力だ。これまでは隠密的なバケモノ退治が多かったからほとんど出番がなかったが、こうして思いつき活用してみても決して使い勝手は良くない。

まあ、そもそもこんなバケモノを相手にするのは軍隊でも想定外だろう(米軍あたりには密かに専門部隊がいるかもしれないが)。

『まるで効かぬとは言わんが、こちらはまだまだ耐えられる。そちらはそろそろネタ切れのようだが』

「いいえ、まだまだ大丈夫」

開ける引き出しは無限に近い。倒せないまでもあしらって粘り続けることならできる。

だが、あとの二人はどうなのか。

同格のクロヒメである天叢はもとより、あのコピー男(?)が必ずしも八坂に劣ると思えない。

その危惧はすぐに現実となる。

十秒の後、丈司の気配が消えた。楼蘭との繋がりが次第に弱くなっているの感じられる。

全力を発揮できるのは、あと三十秒かそこらが限界か。
「ときに八坂さん。わたしの全力の攻撃、受け止められる自信はありますか？」

『主とともに力を失った敵を討っても自慢にはならぬ。強敵をこの手で打ち破って引導を渡してこそ、武人の誉れというもの。参られよ』

巨人はバカ正直に足を止めた。絶対に倒されることはない、という自信の表れだろう。

「では存分に」

とは言っても、本当の全力を出すわけにはいかない。珠坂ごと無くなってしまっただけはドリフトによる仕切り直しも難しくなる。

だが、共に闘う二人を巻き込む事を考慮する必要がある（しても仕方ない）のなら……限定的な全力発揮は目的遂行のもっとも冴えた手段となりうるだろう。

樹菜は振り上げた左手の指を鳴らす。

『薙菊刈り』掛ける3！』

彼女の召喚に応え、三つの黒い影が超高空に出現するや、

『ぬっ？』

八坂がすぐに反応する。

大した感覚だ。しかしそれが命取りになる。

建造物という建造物をなぎ払うために作られた熱圧力爆弾。それを適当な間隔で一氣にばらまいてやった。

しかも爆弾は八坂を狙ったものではない。出現位置は、今や途切れかけた楼蘭の気配の直上だ。

『貴様っ！卑怯な！』

アスファルトの地面を爆発させるように、巨体が跳躍する。

メニユーを見もせずに適当に指さす。

「本当にそれでいいんですか？」

「かまいません」

気配を隠すには気配の中だ。ここはたっぶりの悪意でもって殺気を覆い隠してやろうと、玲韻は持ち前の悪戯っけを発揮することにした。

十分後。

「ん——っ！」

無意識に口に運んだその真っ赤なパフェに載っていたのは果物ではなかった。

涙で霞む目で伝票を見れば「ハバネロパフェ（辛口）」の文字が躍っている。

すりガラスの向こうから、よっしゃ！という声や、小さな拍手、そして笑い声が聞こえた気もある。

渚沙は少しだけ後悔しつつ、より一層確信を深めることになる。やはりこの店は以前とは違う。彼女への悪意にあふれている。

気に入らない。

徹底した調査が必要だ。

本日何十度目かのため息だった。

五ヶ瀬七夏は履物屋「ぐさの」の店先にいた。

ただでさえ女の子っぽいと言われ続けてきた。名ばかり婚約者の詩紀ちゃんと手を繋いで歩いていても美少女二人組に見られる名前を名乗ってもなお少女と信じて疑われなかったことも数知れ

良い判断だ。ここで樹菜を殺しても既に実体化した爆弾は止められないが、八坂の巨体と装甲なら爆風から渚沙を庇いきれる可能性が高い。

だがここまでは想定内。

「さらに『MOAB』掛ける6！」

さらに時間差で超大型の熱圧力爆弾を追加してやる。これだけ炸裂すれば一キロ圏内は更地だ。

ここまでやっても防衛に徹した八坂を倒しきれない可能性はある。

だが、八坂自身は衝撃に耐えられても、渚沙を守りきるには我が身を盾にする他ない。

つまり、狙撃の回避は不可能！

崩れかけた建物の壁を交互に蹴ってビルの上に乗って跳び移った樹菜は、地に伏せた八坂を視認するや、温存していた彼女の代名詞を喚ぶ。

「BLU-107」掛ける16！

ロケットで加速しつつ目標に突っ込み、突き刺さってから爆発する。滑走路破壊用に作られた徹甲ロケット爆弾。

十分な加速距離をとったデュランダルなら、セラミック装甲を貫通して八坂をも倒しうる筈だ。

落下してくる大型爆弾に射すくめられて動くにも動けない八坂を狙撃。その後に渚沙やヒトガタを区画ごと吹き飛ばす。

よしんばすべての打撃に耐えるだけの防御力を備えていたとしても、酸素のすべてが消費され尽くされたこの地では、いかなクロヒメといえど生存は不可能だろう。

そしてここに樹菜がいて認識を続けている限り、ドリフトによ

ず。

正直なところ、自分の容姿は好きではない。女の顔だと思ってみれば綺麗なのだろうが、七夏自身は詩紀の兄の篤史さんのような格好いい男性になりたいのだ。

それなりに努力はしてみた。筋力トレーニングに励んだりもしたが、いくらハードに頑張ってみても筋肉はつかずじまい。日焼けしてみようとしても、赤くなってひりひりするばかりで全然黒くなってくれない。いかにもラフな格好をしても、そういうファッションと判断されてしまう。

そんな彼の気持ちを知って知らずか（いや絶対知っている。何度となく訴えているのだから）、周囲はしきりに七夏を女装させてがる。

さおりさんしかり、篤史さんしかり、詩紀ちゃんしかり。七夏が絶対に逆らえない人々が乗り気なのが困りものだった。

夏は詩紀ちゃんとともにガールズバンドに紛れ込まれた。その時のメンバーがこの辺でバイトしてるらしいので一度顔を出さねばと思っているが、今日商店街に来たのは別の用件。

楽しくなかったとは言わないが……あれはあくまでも謎のガールズバンドの謎のメンバーとしてのこと。「コーカロリイ」のナナが七夏であることを知る者はごく内輪に限られる。

だが今回の指令は……

「坊ちゃんにお客様がいらっしゃってますが、お通ししましょうか？」

「うん、サナギなら上がってもらって」

「いいえ、渚沙ちゃんじゃない女の方ですよ。建流ぼっちゃんも

本のもじりだろう。不健康そうなやせっぽちのおじさんが経営する店で、味は悪くないがずっと客の入りが今ひとつだった。

それがここ数週間で随分繁盛するようになった。容姿に優れたアルバイトの少女を何人か雇って、可愛らしい制服を揃えた頃からだ。普通に考えれば、テコ入れに成功した、というやつなのだろう。

新人アルバイトの一部は彼女にも見覚えがあったものの（基本的に他人に興味がないのでいちいち名前までは知らないが）、少なくとも彼女に敵対的な人物は含まれてはいなかった。これまでも地味な渚沙に突っかかりたり干渉してくる人間は皆無に等しかったし、彼女の理性は気にするほどのものではないと言っている。ジャンルのには呉服屋の商売敵になるような店ではないし、むしろ同じ商店街の一員として共存共栄の関係であるから特に含むところがあるはずもない。

であるからして、不快に感じる理由は彼女自身にも分らない。だが、彼女は自分の直感を信じることにしている。物心ついてからずっと直感に従って生きてきたし、これからもそうするだろう。

虎穴に入らずんば虎児を得ず、と言う。下手な考え休むに似たりとも言ふ。

直接乗り込むのが一番だ。

一言もかわすことなく雰囲気だけで人垣を割り、目をハートマークにして道を譲った男達には一瞥もくれず、行列をショートカットして店内へ。

通りを渡るときに別の振り袖娘とすれ違ったのには気付いてい

る待避も不可能。

完璧な攻撃だった。

火災の中右往左往しているであろう住民達には気の毒だが、そこからへんは皆が何とかしてくれるだろう。

「剩ったからMOPもおまけしておくわ」

さらに駄目押しに、対地下壕用の超大型貫通爆弾も追加しておいた。

「……」

樹菜の体が崩れ落ちる。

会長も楼蘭も逝ったか。

そしてMOABの炸裂まであと数秒。

「また会いましょうね、ローラ……あ、兄さんにメール入れるの忘れてたかも……」

立て続けの爆音が珠坂市を揺るがし、複数のキノコ雲が立ち上った。

複数のクレイターの中心。砕け散った石鏑が散乱する中。天叢渚沙は立ちつくしていた。

議長。なんと恐ろしい怪物だったことか。

傍らには二つに割れた鏡と曲玉。

八坂が吸収し各務が反射することで、渚沙は熱と衝撃と酸欠から完全に守られていた。

だがそれには、二人の同志の存在を引き替えにする必要があった。

だめだ。これでは不十分だ。

たが……悪意どころか興味の一片片も感じさせぬ彼女に対しては、何の危険性を感じることもなく。

だから渚沙は気にもとめなかった。

敵意だけが脅威ではない。攻撃力だけが脅威ではない。

少し前までの彼女であれば、直接主に近づく者に関してはほんのわずかな違和感でさえ捨て置きはしなかっただろう。

だが、和服を着慣れていないであろうぎこちない歩き方や、詳細に観察すればそれ以上の事を語ってくれたであろうちょっとした体運びの癖に、気づけなかった。

ハニーポットの面々を気にするばかりに、恐るべき敵を内懷に踏み込ませてしまった事に、気付けなかった。

「あのう、チーフさん。あの黒い振り袖って……」

招かれざる（？）客の存在に気付いた明日香が、据わりまくった目つきでらしからぬ殺気をまき散らし始めている。

天叢に気付かれるのも時間の問題だ。

「しっ。私が行くわ。明日香ちゃんも休み入って」

慌てて明日香をフロアから引込めると、玲韻は内心の動揺を完璧に隠しきって注文訊きに向かった。

「お姉さんのお勧めを」

メニューを開こうともしない少女は、開口一番こんなことを宣った。

これが中学生の注文の仕方か？と思いつつも、

「どれもお勧めですよ」

と当たり障りない答えを返すと、

「じゃあこれで」

クロヒメは他にも何人もいるし、この国はバケモノであふれている。

それらに対抗するには彼女だけでは足りない。三人揃って初めて王の証としての意味があるのだ。

爆音を背に、仲間を置いてただただ逃げる。

かつてのダイナスがあちらの世界、グリメウルで何度となく体験してきたことだが……何度経験しても慣れない。

振り返れば塩の柱になる覚悟で、心残りを振り切るように走る。

今の太輔は無力に近いが、それでも一緒に残って勝ち目のない戦に望みたかった。

だが、太輔にしか出来ないこともある。彼らは太輔を信じて、すべてを託したのだ。

だから走れ、ダイナス！走れ、竜胆太輔！

生き残り、伝えろ、それが使命だ。

ちょっとした地震にも匹敵する揺れの中、一秒が一日にも感じられる中を一步步つ体を進め。

喫茶ハニーポットにたどり着いた時には、爆音はいつのまにか途絶えていた。

その意味を考えてはいけない、と本能が命じる。

震える手で機械的に勝手口の鍵をあけて店内に入ると。すでに全員が集合していた。

当然か。あれだけの爆発だ。太輔達を送り出した彼女らが、異常に気づいていない筈がない。

「今、迎えを出すべきか相談していたところよ」

すぐに、ポニーテールの娘に椅子を勧められた。

「三十秒で息を整えたら、簡潔に報告してちょうだい」

玲韻さんよろしく腕組みして大輔を見下ろす態度はあくまでも冷静。

「竜胆大輔君、あなたは何を見たの？」

クロヒメ独特の硬質の美貌が、凄みさえ備えた視線の圧力をもって、有無を言わず命じてくる。

だからこそ一切の私情をまじえず、落ち着いて語ることが出来た。

「草野建流に対する人質として、後口慎一と倉梯二郎という紫城の生徒に危害を加えられそうになった天叢渚沙は、石鎧の黒い巨人と鏡のヒトガタを呼び出した。後口の姿に化したヒトガタによってバケモノに変えられた二人は、巨人の剣で斬り殺された。奴らは俺たちに気づいて口封じをしようとした。会長と狩谷と三条は、やつらを食い止めて俺を逃がすために残った。そんなところだ」

質問の主、ポニーテールの娘は眉根を寄せた。

「前半は理解したわ。で、その会長と狩谷とかいうのは何者なのかしら？」

「扇戸丈司会長と狩谷楼蘭と三条樹菜だよ。あんた、婚約者の事まで忘れ……」

待て。

俺は今何て言った？

先ほどから玲韻を差し置いて場を仕切っているこの娘は誰だ？ 触れただけで切れてしまいそうな鋭さと剣呑さ。陰性の零囲気。

味方の麻緒さんでさえ明日香を刺激する危険があると、玲韻さんは常々注意を払っていたというのに……

すっかり失念していたが、あれは皇位継承の神器である以前に、神話のオロチの体内で鍛えられた剣なのだ。それが敵対的な態度をとって、流殺しの剣の本性を目覚めさせないはずがなかった。

「勿論覚えていたわよ」

今さら言われたところで、こんなに信用できない台詞もない。

玲韻さんの記憶もリセットされてるのだ。

「そこまでコントロールが効かないとは思わなかったけど」

「ともかく、次からは彼女は外すべきだ。危険だといって殺してしまつては天叢と同じだ」

「言いたいことはわかるけど、そんなバケモノを殺さないように削り倒して説得ってシビアじゃない？」

睡蓮が愚痴りたくなるのもわかる。

「ただ倒すだけでいいなら玲韻さんがとうにやっているだろう。我々が協力を要請したのは、つまりそういうことだ」

「……お願いされれば手を貸さないこともないけど」

「お願いします。この通りよ」

最年長の玲さんは、義理の娘の前であっさりと腰を折った。

「ななな、何やってんの!？」

「この街を昔から見守ってきた斗流一族の一人としてお願いしてるの。睡蓮ちゃんと婿殿と明日香ちゃんは、血の薄い濃いはあっても同じ流れに連なってるから、私一人が頭を下げて済むぐらい

こんな娘は知らない。記憶にない。

いや……大輔はたった今、自分で言った筈だ。

どんなにとぼけてみても、否定しようがない。容姿は間違いなく大輔の知る彼女のものだ。

ではこれが、いつか丈司が語った……彼が関わることで可能性を奪ってしまったという、完全な彼女なのか。

彼女が存在が意味することは、一つ。

「どうして？」

ポニーテールの娘の鉄面皮が崩れていた。

「竜胆君が扇戸さんを知ってる？ いえ、あの人が貴方と一緒にいるはずがないわ!」

ただでさえほの白い明日香の顔が、雪のように蠟のように蒼白となり、黒衣に包まれた全身はガタガタと震えている。

「だってあの人は、だって、私のために……」

大輔の肩に手が置かれた。玲韻がかぶりを振っている。それ以上踏み込むな、という事だろう。

あのお気楽脳天気なお子様娘をこうも変貌させる何があったのか、玲韻の態度からも想像に難くない。

そうか。

分かってしまった。

彼女は丈司のいない世界で、丈司のかわりになろうと決意したのだ。

あの幸せそうな明日香の姿を知っている大輔にとっては、痛々しくて見ていられるものではない。

これ以上彼女を刺激することを避け、睡蓮を含む他の者達にも簡単な質問を試みてみたが、いずれも似たり寄ったり。

なら幾らでもやるつてのは分かってもらえると思うけど」

「わかった、分かっただからやめてってば! 手伝うわよ、手伝えばいいんでしょ」

そして当然のように、仕切り直しの四度目となった。

きつと次があるのだろう。

そしてまたろくでもない光景を目の当たりにし、一人だけ生々しい記憶を保ちつつ、もう喋り飽きた「かくかくしかじか」を改めて説明しなくてはならないのだ。

天叢に致命傷を与えずに捕らえて交渉の席に着かせるのに何回掛かるのだろうか。

よしんばそれに成功したとして、頑固きわまりない彼女を説得して真夜中の危険行為をやめさせるにはどのぐらいの試行錯誤が必要となるだろうか。

……皆のやる気が続くのは、何度やっても一回目ゆえなのだ。願わくば、彼自身がPTSDでどうにかなる前に決着がついてくれますように。

と、大輔は祈らずにはいられなかった。

とある日曜日の昼下がり。

天叢渚沙は部屋の窓から通りを見下ろしていた。

気に入らない。

何かが引く掛かる。

実家の真向かいの喫茶店の事だ。

ハニーポットすなわち『蜂蜜壺』という甘ったるい名前は、萩

「彼に接触しようとした瞬間に戦闘勃発するわよ。あなたの相棒さん達を見てれば分かるでしょう?」

「……そりゃそうっすね」

樹菜の指摘する通りだ。人質をとるために強敵を倒す必要があるようでは意味がない。

「人質作戦からは離れた方がいいんじゃないか?」

「僕も大輔に賛成だ。戦術としては有効であっても、仲間内の士気と結束が低下するような真似は避けるべきだろう。分裂や各個撃破に繋がりがねんからな。名譽の要素を失った戦いは、時として味方の支持も得られないものだ」

さすがは人心の掌握に長けた聖者様。言うことは見事だが動機が見事に計算ずくで、こういうところ本当に恐ろしい人だと感じる。

「ならば、正攻法でギブアップを狙うしかないわ」

ここで玲韻さんが動いた。

「原則に従って戦力の集中をはかりましょう。三度目の正直だし、チームハニーポッターズの全力をもってあたりたいわ。店長には悪いけど、今度は最小限の保険だけ残すことにするから」

「私自らが出る!」、待っていました!」

麻緒がヨイショしたくなる気持ちも分からなくもない。丈司さんの兄弟子でしかもクロヒメ、属性は炎の神剣。おそらくはチーム最強の力を備えた彼女の出陣は何より心強い。

かくして、萌衣だけが残るという変則パーティーに。

萌衣であれば、周りに人さえ住んでいれば緊急時の戦力には事欠かないわけだし……向こうがこちらの意思を知らない（歴史的には交戦は一度も起こっていないのだ）以上、常識的に考えて天

こうなっては認めるほかない。丈司達は、天叢達を食い止めることに失敗したのだ。

ならば、おそらくは天叢によって書き換えられてしまったこの世界を、あるべき姿に書き戻さねばならない。

大輔にはそのための力がある。今こそ自らに科せられた役割を果たす時だ。

「俺が観測班を任された理由は覚えているな?つまりはそういうことだ」

まずは好奇心と理性に訴えてみる。

「どうゆうこと?はつきり言いなさいよ、明瞭かつ簡潔に」

たちまち睡蓮^{フレア}の機嫌が悪くなった。

リクエストに応じて単刀直入に言う事にする。

「俺たちとともにあったはずのあいつらは、元からいなかった、あるいは既に居なくなったことにされている」

「はぁ?」

聡明な彼女にしては察しが悪い。いや、さいきんめつきり頭を使うのを面倒がるようになった感があるな。

「今度はこっちの都合で世界を改変しかえしてやるんだよ。こっちはクロヒメが六人、いや炬が一人モードだから今は五人か。多少繋がりに飛躍があるうが、あいつ一人の仕業ぐらいひっくり返してお釣りが来るんじゃないか?」

「そういうものなんですか?」

と萌衣ちゃんに尋ねられるが、大輔が知るはずがない。

「違うんですか?」

詳しくそうな玲韻さんに振ってみる。

「理論的にはね。そもそも、こんな事もあるうかと思って人数を

叢サイドからの襲撃はあり得ない。概ね十分な情報を集めたと判断される大輔は、大型双眼鏡を用いて安全な遠方のビル屋上からの観察に徹する。それが玲韻さんの計画だった。

一見、穴はないように見えた。

だが、懲りない（出来事がリセットされ学習できないのだから仕方ないのだが）二人が例によって天叢にちょっかいをかけ、その凶行を防ぐべくハニーポッターズマイナス1が立ちふさがったその時、事件は起こった。

目を擦りながら丈司の後をついてきていた明日香さんが突然前へと進み出、とてつもないサイズの黒い両手持ち剣を虚空から抜き出した。

刃渡りだけで二メートル、幅は三十センチ近い。剣というより建材かなにかとでも言った方がまだしっくり来る。

女子としては背が高い方だとはいえ、彼女はゆるい女子高校生裸の上半身に革ベルトをたすきがけにした筋骨隆々&禿頭の戦士にこそ似合うような超大物武器はミスマッチきわまりない。一端を持ち上げることすら困難に見えるそれを明日香は無造作に振り上げ、天叢との間合いを一気に詰める。

曲玉の黒い巨人が天叢を守ろうと割り込み、こちらもまた巨大な剣による突きを繰り出すが、明日香は跳躍してそれを避けつつ剣を巨人の肩口へと叩きつけた。鎧に食い込んだ刃を支点に宙返りしつつ巨人の頭を踊り越え、一太刀で天叢の体を叩きつぶす。音のない双眼鏡の視界の中、それだけの事が数瞬の間に起こった。

玲韻さんや丈司さん、樹菜あたりはすぐに悟ったことだろう。相性が悪かったのだ。

集めてあったわけだし」

この用意周到さ、やはり考えあつての事だったんだな。

「それにその子達のこと全然知らないってのが気に入らない。婿殿が言うことが本当なら、きれいさっぱり記憶を消されちゃってる事になるでしょ。それってなんか癪じゃない?」

こんな子供っぽさもまた同居しているわけで、いつもながら底知れんお人だ。

「こういう場合、うつすら覚えてるとかがお約束でしょ。伏線らしい伏線も用意しないなんて物語作法としちゃ反則っすよねえ。この釈然としない気持ちをごにぶつけられたいのやら」

「責任者出てきなさい、と言いたいよね」

と妙な方向で盛り上がってるのは麻緒さん&絵莉華さん。

協力さえ得られれば動機はどうでもいいが……ただでさえ不確定要素ばかりで成功するかも分からない賭けなのだから、もう少し真面目にお願いしたいところだ。

「後を俺に託して残ったあいつらを裏切るわけにはいかない。あんたらの真剣な協力が必要だ。頼む、この通りだ……」

「大輔が頭下げてる……どういう風の吹き回し?一体何たくらんだんの?」

睡蓮^{フレア}が妙な顔をしてるが、俺だって尊敬に値する友人のためとあらば頭ぐらい下げる。

そこまで薄情者だと思われてたのか。

待て待て、なんで俺だけが気をもんでる?

だんだん腹が立ってきた。

「ああもう、四の五の言わず俺を信じて手伝えクロヒメども!これはあんたらのためでもあるんだから!ほら返事っ!」

睡蓮「っ、はいっっ！」

普段は強気な彼女も、瞬間的なプレッシャーには意外に弱いのだ。

玲韻「オーケー」

当然。言い出しっぺにここで反論されたら困る。

絵莉華「麻緒さえ良ければ……ん、問題ないって」

これは想定通り。真緒さんは面白そうならGO！な人だからな。

萌衣「はい、もちろんです」

素直な娘だから

明日香「……」

やはり、難物が残ったな。

「あの人に会わせてやる。信じろ、明日香さん」

勇気を奮い起こして、目標と対峙。

呼びかけに応じてゆっくりと顔を上げた明日香の上目遣いの視線が、網膜をすり抜けて前頭葉から心の底の底まで見通さんとかりに突き刺さってきた。

声に出さずとも分かる。冗談であの人を愚弄するようならただではおかぬという強い意志が、大輔の真意を推し量ろうとしている。

体が震えるのをはつきりと自覚する。素直に怖い。

生殺与奪を握った相手に値踏みされているような、それどころかグリメウルの魔王や先ほどの三人（？）と対峙していたときと同じ、命を通り越して魂にまで及ぶ危険を感じる。

強い意思は、一歩間違えれば容易く害意へと転じるだろう。彼女の機嫌次第では、丈司さん達のように世界から消されかねない。だが、ここで怯んでしまつては彼に合わせる顔がない。

ながらも、干将莫耶の子供達は死兵となって死体を乗り越え押しつづもつとした。

無関係な人間を次々に斬り殺す事に何の躊躇もない天叢。一方、自分たちの都合に他人を巻き込むという状況に耐えきれず、萌衣の剣筋は次第に乱れていき……当然だが、先に根負けしたのは萌衣の方だった。

年端もいかぬ子供の首がとんだ途端に干将莫耶とその子供達は一瞬にしてかき消え、目を閉じた萌衣の胸へとミニ釣り竿が突きこまれた。

「逃げてダイナス！」

「さっさと行け！大輔！」

睡蓮と楼蘭がほとんど同時に叫ぶやいなや、大輔は駆け出した。あとは前回とほとんど同じ展開に。

いや、スタートが遅かった分、待避はよりいっそうぎりぎりになった。

「結局私が全部吹き飛ばした、とそういうわけね」

「おそろくは」

爆風に追われるように走ったからな。繰り返す衝撃と背中の中熱をはつきり覚えていた。

「申し訳ございませんでした、わたしが上手くやっていれば」とや、つてもいいことで落ち込む萌衣。

「いや、あそこで手を止めたのは人間として正しい」

「そうそう。大輔の言うとおり。普通は一般人を盾にとられた時点で手を挙げるわよ。悪いのはすべてあのお色気娘だし。私まで巻き込んだ事には気に病まなくていいから」

その言い方では、気にしろと言ってるようなものだ。

前世では魔王にさえ気合い負けしなかったダイナスだ。こんな娘になど……いや。違う。そうじゃない。

本当的な畏れを理性で押し殺すのではなく、信じる心で塗りつぶさねばならない。

丈司さん、あなたの選んだ人だ。俺も信じる。

なあ、こんな時あなたならどうする？

んー、こんな感じか？

彼がよくやっていたように、明日香の頭を平手で軽く二度叩き。

「まったく、君という人は」

薄く微笑みかけて頷きかけてみたところ……さすがは丈司流。効果は絶大だった。

大きな目を見開いて硬直してしまった彼女は、大きく二度頷いて、それから深々と腰を折った。

いや、俺に頭を下げてでも仕方ないんだけどな。

「よし、みんな頼む！」

「世界を革命する力を！」

そして麻緒に一番美味しいところを盗られた……

狙ってたな、絶対。

定位置に明日香と向かって座る丈司を視認した瞬間、大輔は脱力した。

「はあ――」

樹菜と楼蘭のコンビも健在だし、意識してのドリフト発生で全員を取り戻すことに成功したわけだ。これは快挙といえよう。

「ごめんなさいっ、なんとお詫びしてよいか。返す返すも申し訳ありません」

余計に恐縮した萌衣は、米つきバツタみたいにぶんぶん頭を下げまくってる。

こういったところ、本当に素直で可愛らしい。見た目も正反對だが、ふてぶてしいまでに冷静にヒトが斬れるアレと同級生とはとても思えない。ついでに言えば、入れ物が男の子だったのは今なお信じられない。

「もう、気に病むなって言ったじゃない」

口調とは裏腹に睡蓮の表情は満足げ。彼女は絶対Sだと思う。

しかし萌衣の能力はなかなか使いどころが難しいな。

人間の一部を媒介にして作られたという（一説には莫耶自身を人身御供としてとりこんでいるとも）そもその起源が邪法くさいことを考えれば、いかにも悪役の使いそうな悪趣味な効力にも納得だが、彼女自身が純粋な性格だけに余計に問題が大きい。手段を選ばなければ確かに有効な戦法ではあるが、敵が意に介さなければこちらの良心がなお痛む結果になる。

干将莫耶でここまで危険なら、睡蓮のダインスレイフの特殊能力はあてにしないのが懸命だな。主に道徳的な意味で。

「やはり、半端な攻撃や人質程度で膝を屈してくれる相手ではないのだな。次こそ三度目の正直といきたいところだが……」

丈司さんは反省しつつ

「一般人でダメでも、サブターゲットなら人質として効果があるんじゃないか？」

と、麻緒が提案。漫画描きだけあって、思考実験と割り切って非道徳的なシチュエーションにも順応できるのだろうか。

「それでも、殺されると分かって放っておくのはちょっとねえ」
一方、派手できつい見た目の楼蘭が意外に常識的。面白いものだ。

「同感だ。ここで介入しないようでは、俺はもう魔王の敵を名乗れなくなる」

「分かったわよ。好きにしたら」

たいていの場合、睡蓮は結局は俺の好きなようにさせてくれる。いちいち憎まれ口を叩かずにはいられないのは性格だろうな。

先の戦いは被害も含めて無かったことになっているとはいえない……何回も巻き込まれる周辺住民に心で詫びつつ、大輔は二度目の戦いへと臨んだ。

「とりあえず二人を逃がすことには成功したんだが……」

いつの間に手にしたのか。

鏡の前に立ちふさがった睡蓮は、鋸状の刃と深い血溝と緩い反りを持つ黒い片刃剣を。曲玉巨人を相手取った樹葉は、両刃の黒い片手半剣を携えていた。

それらが彼女たちを象徴する伝説の剣、ダインスレイフとデュランダルに違いない。天叢が曲玉巨人に貸し与えた剣もまたサイズや色を別にするれば古墳時代の鉄剣そのものに見える。

剣は同時に彼女たち自身でもあるわけだから、いちいち携帯せずとも必要に応じて呼び出す事が出来るのだろう。

が、

天叢と対峙した萌衣が自分の剣を呼び出した時には、大輔だけ

ため息をついて椅子から半ばずり落ちて、誰にも責められる筋合いはない。

彼はそれだけの事をやり遂げたのだ。

運命操作に対抗できるこのメンツなら、再びグリメウルの平和を取り戻すことも可能かもしれない。

これでまた、魔王に一步近づいた。

「では巡回班より報告を。ターゲットは例によって街を一回りして帰宅。特記事項なし。以上」

丈司のおそろしく簡潔な説明で、ほぼ状況が理解できた。

今晚は何も起こらなかった。つまり、後口と倉梯が天叢にちょっとかいを出す辺りから無かったことにされている。

それはそうか。奴らが消されているのならあの戦いは起こりえない。

そこにはもう一つ重要な事実がある。

天叢軍団と巡回班の間での出来事を知るものは誰もいない。

つまり、要説明。

ここで解説せざるを得ないだろうな。

「あー、ちょっといいか？」

かくかくしかじか。

大輔にしか出来ない役回りとはいえ、不快な出来事を思い出しでは描写するという行為は、精神力を相当消耗させる。

皆にとっては平和ないつもの夜。すなわちHPもMPもほぼ満タン状態なのだろうが、大輔的には今晚はHP、MP大量消耗系のイベントが連続し続けているわけ。

いや、もう。疲れた。

「それが本当なら、大輔には本当に世話を掛けた事になるな。心

でなく樹葉も睡蓮も、敵である天叢さえも随分と面食らっていた。馬手に黒、弓手に白。切るより突く事に重点が置かれたデザイン。の細身の両刃剣を二本。

なにしろモノが干将莫耶であるから、二刀流までは想定しなかったでもない。

しかし、萌衣に応えて出現した剣は二本どころではなかった。

辺り一面を埋め尽くすほどの多数。地面やビルの壁面、自動販売機や電柱、あらゆる場所に突き立った黒い剣は長さも形状も微妙に異なるものばかり。他の連中を見るとクロヒメの剣は黒い剣一本限りというのが通例のようだが、彼女は例外中の例外らしい。

それだけでも十分驚くに値するが、集まってきた野次馬達はその剣を手取るや萌衣を守るようにそれらを振るいはじめたのには、剣を呼んだ萌衣自身さえ仰天していた。無数の剣はおそらくは夫婦剣の娘達とでもいふべきもので、人々を惹きつけて自らを手に取らせ、使い手として使役する力を備えているのだろう。

ド素人の集団が人間離れした運動能力と一流の剣技をもって天叢や鏡へと果敢に襲いかかる様子はシュール極まりないものではあったが……見た目はともかく実際の戦力はちょっととした騎士団に匹敵する。強力な加勢を得た萌衣と睡蓮は天叢と鏡を激しく攻め立てた。まさに多勢に無勢。一方で樹葉は巧みに爆発物を利用して曲玉の拘束に成功しており、天叢のとりうる選択肢はギブアップの他ないと思われた……しかし。

天叢は十倍の以上の敵に一步も怯まぬどころか、踊るような体捌きで攻撃をかわしつつ、ミニ釣り竿に気を込めて子供や老女までもばっさばっさと斬りまくった。味方が倒される様子に気付き

から礼を言わせてもらおうよ」

「ええ、今こうしていられるにも大輔さんのおかげなんですネ。

ほんとうにありがとうございます」

いつもの丈司さん（残機マイナス1）と、ちゃんと緩い見慣れた明日香。あらためて安心感をおぼえると同時に、どうしても少し違和感も感じてしまう。

自分にとつての真実を語っても、これまでは冷たい目で見られるばかりだったか……

こうして人から感謝まで受けられるとは感慨深い。と同時に、なかなか面はゆくもあたりする。

「いや、俺にはこのぐらいいきできんからな。役に立てて幸いだ」

「こら、デレデレしてるんじゃない！」

と睡蓮は言うが……デレデレと照れは似てるようでまるで違うんだよ。

「……それにしても、三種の神器そろい踏みとはな」

おっと、すっかり忘れていた。

「その件、昔の丈司さんから玲韻さん向けに言伝えられてたんだが……今の丈司さんも同じ結論に達するんだな」

「昔の、とか言わないでもいい。まるで刑務所暮らしで丸くなったみたいに聞こえる」

ごもっとも。

「『やられちゃった会長さん』、ではいかがです？」

こういうところ、実に明日香らしい。悪意がない分ストレートにぐっさり来る。

「前回の、ぐらいいしておいてくれ……頼むよ」

「はいっ。うけたまわりました。まだやられてない会長さん」

「今回の僕は別にやられるつもりはないんだがね……」

この二人、ボケと突っ込みの分担がきっちりしてるな。

それはともかく。気になっていたりしたことを尋ねてみる。

「無事再会（むしろ再開か？）できたら、ぜひ丈司さんに聞かねばと思っていたんだが。その三種の神器ってのは、巨人とかペプ○マンとかの事を言ってるのか？」

「そうだな。天叢嬢の属性は言わずもがなとして、八咫鏡と八咫瓊勾玉がその周辺精魂群として顕現していても何の不思議もない相手の姿を写して真似るのは鏡の性質そのものじゃないか。ならば石鎧の巨人は残る曲玉の変化と考えるのが自然だ」

「あんなのが人だったのか？」

「顕現した精魂が人に宿っているとは限らない。年経た器物は魂を持つと言われるだろう。ならば神代からの宝物ともなればそのぐらいの精魂が宿っても不思議はない」

なるほど。立て板に水とはこの事。簡潔明瞭で説得力がある推測だ。さすがと言わざるを得ない。

「つまり一対三か。負けるわけね」

玲韻さんの評は、かくのごとく身も蓋もない。

「ものすごく失敬なことを言われている気がするんだけど、気のせい？」

「普通なら怒っていいところだが、相手が相手だからな。ただの人間では数字に入らないと言われても仕方あるまい」

「りょーかい会長さん。一応言ってみただけ。ささ続けて続けて」
ちくちくと嫌みぐらいは言いたくもなろう。一般人楼蘭のささやかな抵抗というわけだ。

「周辺精魂は必ずしも主精魂に従っててるわけではないから。そも

そも主精魂って概念自体が、ただ観察の首座に供するための便宜的な考え方だとアリス自身が言ってるわ。それに従えば、神器として同格の三者は同等の力を備えていると考えるべきね。あるいは、推測に推測を重ねるのもなんだけど、一つの精魂が異なる能力の發揮に適した三種の実体と一度に連携して顕現しているという可能性もある」

「例えば、私と紗也のように？」
と絵莉華。

「あるいは、私達が私達のままそれぞれの剣を手に出来るように」
説明になっていない説明に、クロヒメ一同が納得の様子で頷く。このへんは本人達以外には理解しがたい感覚なのだろうな。

「理屈はどうあれ、単体で樹菜ちゃんを退けるだけのバケモノが三体。対策が必要ね」

「お言葉ですが玲韻さん、私は別に実力で負けたとは思ってませんけれど？」

と、さっきまで世界から消し去られていた少女が、にっこり笑顔を浮かべて言う。

「こうしてしきり直せてるって事は、核は使ってないって事です。から。駅裏の再開発地区が壊滅した程度なら、せいぜいが収束燃料気化爆弾あたりかしら」

「それはそれは、ご配慮痛みいるわ」

どうにも聞き流しがたい単語が混ざっていた気がするが……丈司さんも首を振っている事だし、詮索すまい。

「市街地のど真ん中でそんな戦争をおっぱじめるに至った経過を、もうちょっと詳しく知りたいところなんだけど」

期待の視線が集まるが、こんなところで振られても困る。

それもう死んでる。

「さっき話したのがすべてだ。俺自身が体験していない出来事については何とも言えないんだが」

丈司や楼蘭に視線で助けを求める。

「どう戦ってどう死んだか？ そんなのはまさに闇の中だ。今回の僕は何も経験していないんだからな」

「以下同文」

これもまた当然だな。

「ここで情報を総括しようか。大輔の活躍でターゲットの基本的な性向・手口と大雑把な戦力までは把握できた。さらなる凶行の阻止をはかろうとするなら再度の武力衝突は不可避だろう。以後は巡回班に十分な戦力を配置する方針としたいが、皆異存はないか？」

基本的には賛成だ。あの態度を見る限り、そうそう行動パターンが変化するとは思えない。

だが……

「さて婚殿」

ほらいらっしゃった。玲韻さんはなぜか上機嫌かつ残酷に宣言「やっぱりあなたの目と耳だけが頼り。ぎりぎりまで観察を続けて、味方を見捨てても必ず生きて帰る。それが使命よ」

「それってどこの戦闘妖精？」

と麻緒に茶化され、

「そんな立派なものじゃないって。人間セーブポイント、人生バックアップメディアで十分よ」

睡蓮には見事にぶっちゃけられた。

「あんな一人の人生じゃないんだからね。勝手に死んだら殺すから」

二度目のチャンスは、思いの外早くやってきた。

樹菜&楼蘭、萌衣、大輔と睡蓮。今度は前回の反省を入れてクロヒメ三人を擁するチームとなっている。これなら戦力的にひけはとるまい。

「なんであの二人まで復活してるんだ？」

どこかで見たような二人組に、どこかで見たようなシチュエーション。デジャブを感じる。

当たり前だが、同じ人間だけあって行動パターンが全然変わらない。

「きつと誰かが望んだのね。いちど釣れた実績があるのだから、餌には最適ってことでしょ」

と、樹菜が推理する。

おそらく大きく間違っていないだろう。何度もドリフトを体感してきた大輔にはそれが感覚的に理解できる。

商工会で悪魔みたいに恐れられている玲韻さんあたりが一番怪しいが、それをいち早く察した樹菜も見た目によらずなかなか気づかない思考をしているようだ。

「あれ、止めないとまずいんじゃない？」

萌衣に袖を引かれる。この反応は予想通りだが、

「ほっとけばいいのよ。あんなの百害あって一理ないんだから。社会のゴミよゴミ」

見た目は愛らしい睡蓮も、猫かぶりを放棄した本性は道徳的とはとても言い難い。